

鈴 鹿 市 郡 山 町

郡山遺跡群発掘調査報告Ⅰ

西高山D遺跡
西高山古墳群
西川遺跡

1983 .11

鈴鹿市教育委員会
鈴鹿市遺跡調査会

序

昭和 50 年より開始しました鈴鹿市郡山町所在の夕川ニュータウン造成事業に伴う埋蔵文化財調査も、8 年間と言う気が遠くなるような期間を経て、無事調査が終了しました。70,000㎡にも及ぶ調査面積は県下でも類例はなく、調査の結果、古墳時代から奈良時代を中心とした大規模な古代集落址の外、前方後円墳、須恵古窯址などが発見されました。それらの遺跡に関連した土器も整理箱で 1,000 箱近く出土しました。これらは、この地方の古代社会を解き明かす上で、不可欠な資料となることは言うまでもありません。こうした文化遺産は大切に保存し、後世に永く伝えるとともに積極的に活用を図り、文化の向上に役立てることが、私たちの大きな使命であると考えております。こうした意味からも、この調査報告が、地方の古代文化究明の一・助になれば幸いと存じます。

最後に、終始文化財保護に深いご理解とご協力をいただき、多額の調査経費の負担をお願いしました三交不動産株式会社取締役社長服部泰造氏に深く敬意を表するとともに厚くお礼申し上げます。また、この調査にあたって最後まで暖かいご指導、ご助言をいただいた服部貞蔵（三重大学名誉教授）、服部千之（名古屋工業大学教授）、仲見秀雄（鈴鹿市文化財調査会会長）各指導委員の先生方はもとより、小玉道明氏（三重県教育委員会文化課）、をはじめとし、三重県教育委員会文化課、各市町村教育委員会各位並びに、調査に協力いただいた地元郡山、中瀬古、秋永、越知の関係各位に深く感謝申し上げる次第でございます。

1983 年 10 月

鈴鹿市教育委員会

教育長 神 尾 博

例 言

1. 本書は、三交不動産株式会社が鈴鹿市郡山町に計画した、夕川ニュータウン造成事業に伴う郡山遺跡群調査のうち、B地区所在の西高山D遺跡、西高山古墳群、西川遺跡の調査結果をまとめたものである。
2. 調査は、事業者である三交不動産株式会社より委託を受け、鈴鹿市遺跡調査会が実施した。その調査経費、本書の出版費は三交不動産株式会社の負担による。
3. 調査・遺物整理ならびに本書の執筆は、鈴鹿市教育委員会社会教育課中森成行による。
4. 本書に用いた遺構標示の略記号は下記による。
SB：竪穴住居址、掘立柱建物址 SK：土 壙
SD：溝址
5. 本書に掲載した航空写真は、中日本航空株式会社（昭和56年撮影）、鈴鹿市役所都市計画課（昭和53年撮影）の提供による。



郡山遺跡群調査位置図 (1 : 5,000)

目 次

I 前 言	1
II 位置と歴史的環境	7
III 西高山D遺跡の調査	9
IV 西高山古墳群の調査	15
1. 古墳群の位置	16
2. 西高山1号墳	16
3. 西高山2号墳	22
4. 西高山3号墳	30
V 西川遺跡の調査	33

図 版

1 郡山遺跡群航空写真（昭和53年撮影）	(1) 西高山2号墳（発掘前）
2 郡山遺跡群航空写真（昭和56年撮影）	(2) 西高山2号墳（発掘調査後）
3 西高山D遺跡	9 西高山2号墳
(1) SK-1、SB-1 (2) 須恵器、窯壁、砥石	(1) 円筒埴輪出土状況 (6) 紡錘車出土状況
4 西高山D遺跡	(2) 人物埴輪出土状況 (7) 鍊出土状況
須恵器	(3) 須恵器出土状況 (8) 前方部周溝断面
5 西高山1号墳	(4) 後円部周溝断面
(1) 西高山1号墳（遠景）(2) 西高山1号墳（発掘前）	(5) 円筒埴輪出土状況
6 西高山2号墳	10 西高山2号墳
(1) 西高山2号墳（発掘調査後）	須恵器
(2) 西高山1号墳（既掘墳）	11 西高山2号墳
7 西高山1号墳	円筒埴輪、朝顔形埴輪
円筒埴輪、形象埴輪、山茶碗	12 西高山2号墳
8 西高山2号墳	形象埴輪、紡錘車

- 13 西高山3号墳
 - (1) 西高山3号墳(発掘前)
 - (2) 西高山3号墳(発掘調査後)
- 14 西高山3号墳
 - 須恵器、土師器
- 15 西川遺跡
 - (1) 発掘区全景
 - (2) 発掘区全景
- 16 西川遺跡
 - (1) S B 27・28・32・33
 - (2) S B 1・2・13
- 17 西川遺跡
 - (1) S B 13
- (2) S B 16・17・18・19・20
- (3) S B 9・10・S K 8
- 18 西川遺跡
 - 縄文式土器
- 19 西川遺跡
 - 縄文式土器、石器、須恵器
- 20 西川遺跡
 - 須恵器
- 21 西川遺跡
 - 須恵器
- 22 西川遺跡
 - 須恵器、土師器、砥石、鉄滓

挿 図

- 第1図 郡山遺跡群の位置 6
- 第2図 B地区遺跡地形図 7
- 第3図 西高山D遺跡地形図 9
- 第4図 西高山D遺跡遺構i実測図 11
- 第5図 西高山D遺跡出土遺物実測図(須恵器、土師器) 13
- 第6図 西高山1号墳地形図 15
- 第7図 西高山1号墳出土遺物実測図(埴輪)… 17
- 第8図 発掘調査前の西高山1号墳墳丘実測図 18
- 第9図 発掘調査後の西高山1号墳墳丘測量図、墳丘断面図 19
- 第10図 西高山1号墳出土遺物実測図(須恵器・山茶碗) 21
- 第11図 西高山2号墳墳丘測量図、墳丘断面図 23
- 第12図 西高山2号墳出土遺物実測図(円筒埴輪) 24
- 第13図 西高山2号墳出土遺物実測図(形象埴輪) 25
- 第14図 西高山2号墳出土遺物実測図(須恵器) 27
- 第15図 西高山2号墳:測量図、断面図 31
- 第16図 西高山3号墳出土遺物実測図(須恵器、土師器) 31
- 第17図 西川遺跡地形図 33
- 第18図 西川遺跡遺構平面図 35
- 第19図 遺構実測図(縄文時代) 36
- 第20図 遺構実測図(竪穴住居・掘立柱建物址)… 37
- 第21図 遺構実測図(竪穴住居址) 39
- 第22図 遺構i実測図(竪穴住居・掘立柱建物址)… 40
- 第23図 出土遺物実測図(縄文式土器) 44
- 第24図 出土遺物実測図(縄文式土器) > 45
- 第25図 出土遺物実測図(縄文式土器) 47
- 第26図 出土遺物実測図(石器) 48
- 第27図 出土遺物実測図(須恵器) 50
- 第28図 出土遺物実測図(須恵器) 51

表

- 第1表 郡山遺跡群調査工程表 2～3
- 第2表 郡山遺跡群の竪穴住居址時期区分… 4
- 第3表 西高山D遺跡掘立柱建物址の規模… 10
- 第4表 土壌の規模 10
- 第5表 遺構別出土遺物 14
- 第6表 西高山古墳群の規模 32
- 第7表 西川遺跡竪穴住居址の規模 41
- 第8表 掘立柱建物址の規模 42
- 第9表 土壌の規模 43
- 第10表 遺構別出土遺物 53

I 前 言

鈴鹿市は、伊勢の国の中心として栄えたところで、伊勢国府跡、国分寺跡、軍団跡と推定される長者屋敷遺跡など重要遺跡をはじめとし、約 700 箇所^{※(1)}の埋蔵文化財の所在が確認され、県下でも数多くの埋蔵文化財を保有する市の一つである。今後詳細な分布調査を実施すれば、優に 1,000 を越す遺跡・古墳が発見されることと思われ、重要遺跡の確認調査を含めて、当市は文化財行政において多くの課題をかかえている。市内の遺跡・古墳の分布状況は、鈴鹿川流域と南部の中の川流域の二箇所^{※(1)}に大きく分けられ、鈴鹿川流域左岸の広い台地に所在する遺跡のいくつかは、戦時中の軍事施設の建設、また最近の大きな開発により姿を消したのに対し、南部は今日まで大きな開発からまぬがれ、遺跡はほぼ完全な状態で保存されてきた。

郡山遺跡群は、鈴鹿市南部を伊勢湾に東流する中の川右岸の河岸段丘上に位置し、行政区画は鈴鹿市郡山町に属する。この周辺は、古くから菴芸郡衙推定地とされ、多数の埋蔵文化財に恵まれている。調査当初は、郡山遺跡と呼称していたが、試掘調査の結果、多数の集落址・古墳・古窯址が確認されたことから、郡山遺跡群と総称することにした。

1. 調査経過

調査に至る経過 昭和 44 年、国鉄伊勢線中瀬古駅開設に伴い三交不動産は駅前を中心に計画当初 100 万 m²にも及ぶ大規模な団地造成事業を計画し、昭和 48 年、造成事業に関連した仮設道路を中瀬古駅前から末野台地中央部を東西に建設した際、多量の土器片が検出された。この土器片の発見が文化財調査の発端となったのである。このことから、開発区域全域の埋蔵文化財の確認のため鈴鹿市教育委員会では、とりあえず第 1 期工事区域（A 区）の分布調査を鈴鹿市文化財調査会委員、仲見秀雄、大場範久両氏に依頼した。その結果、周辺の畑にもかなりの土器片の散布が認められ、遺跡は広範囲に及ぶことが予想

されたのである。この調査報告をもとに、鈴鹿市教育委員会、三重県教育委員会文化課、三交不動産の三者により、造成区域内の埋蔵文化財の取り扱いについて協議がくり返され、(1) 調査には鈴鹿市教育委員会あたり、このため調査に専従できる調査員 1 名を置くこと、(2) 調査にかかる経費は原因者である三交不動産が負担することが了解され、ようやく昭和 50 年 5 月に調査組織として鈴鹿市遺跡調査会（代表、鈴鹿市教育委員会教育長中川義一）が発足し、三交不動産と埋蔵文化財保護協定書、ならびに委託契約^{※(1)}をかわし、調査にとりかかる運びとなった。調査にあたって、服部貞蔵（三重大学教授）、服部千之（名古屋工業大学教授）、仲見秀雄（鈴鹿市文化財調査会会長）、井上武弘（三重県教育委員会文化課課長）の四氏を調査指導委員に委嘱し、調査方法、保護措置について指導・助言をいただくことになった。

調査体制 鈴鹿市遺跡調査会

代 表 中川 義一（教育長 昭和 50～53 年）
神尾 博（ " 昭和 54 年～）
事務局長 竹中 和郎（社会教育課長 昭和 50 年）
弓削 弘（ " 昭和 50 年～54 年）
浅野 義孝（ " 昭和 55 年～56 年）
筒井典三郎（ " 昭和 57 年～）
事務局員 高田 義幸（社会教育課、事務吏員昭和 50 年）
館 康衛（ " 昭和 50 年）
伊藤 俊一（社会教育課文化係長 昭和 50 年～54 年）
岸田 建雄（ " 主査 昭和 50 年～）
杉野 惇（社会教育課課長補佐 昭和 55 年～56 年）
小森 孝之（ " 文化係長 昭和 56 年）
白仁 一彦（ " " 昭和 57 年）
西村喜久男（ " " 昭和 58 年）

調査担当者 中森成行（社会教育課事務吏員）
経理担当者 脇田敏実（三交不動産株式会社）
（いずれも発掘調査当時）

A 区試掘調査 昭和 50 年 6 月より、遺構の埋設状況を明らかにするため、谷・未買収地を除いた台地全域に 20m 間隔、4 × 4m のグリッド約 454 箇所設定し、11 月末まで試掘調査を実施した。分布調査が不可能であった山林・草生地からも遺構が検出され、

第 1 表 郡山遺跡群調査工程表

調査期間	遺跡名 (調査面積)	調査概要	調査に係る諸活動(月)
S50	A区試掘調査 (7,000㎡)	① 試掘坑 454 箇所設定して、調査した結果、古墳時代後期から奈良時代を中心とした大規模な集落境であることが判明した。	発掘調査指導委員会 (5) 発掘調査指導委員会 (9) 発掘調査指導委員会 (11)
51	西高山 C 遺跡 (6,000㎡)	② 古墳時代後期の竪穴住居址 (Ⅲ・Ⅳ期) 13 棟、古墳時代後期以後奈良時代に至る掘立柱建物 28 棟が検出された他、鎌倉時代の土壌などがある。出土遺物は、各時期の須恵器を中心とし、円面硯三点、紡錘車、土錘、砥石、土玉が出土している。	栄小学校 (3)
	西高山 A 遺跡 (6,000㎡)	③ 古墳時代後期の竪穴住居址 (Ⅲ～Ⅴ期) 26 棟、古墳時代後期以後奈良時代に至る掘立柱建物 15 棟が検出された。古墳時代の須恵器が多い中で、特に歪生品、自然釉の付着したものが目立った。	遺跡説明会 (8) 三重県発掘技術者研修会 (8)
	西高山 B 遺跡 (3,000㎡)	④ 古墳時代後期の竪穴住居址 (Ⅱ期) 3 棟が検出されているが、住居址に伴う須恵器としては郡山遺跡群内で最も古い。北半分は、緑地として保存される。	
52	末野 B 遺跡 (10,000㎡)	⑤ 末野台地の仮設道路南側部分である。古墳時代後期から奈良時代に至る竪穴住居址 (Ⅲ～Ⅳ) 21 棟、奈良時代から平安・鎌倉時代に至る掘立柱建物 65 棟が検出されている。建物群のなかには、廂・柵列を伴い、建物配置に計画性が窺えるものがあり、一般の集落跡とは様相を異にしている。他に、溝によって区画された平安時代の四面廂建物がある。円面硯二点出土。	中瀬古町老人会 (スライド) (3) 遺跡説明会 (4) 白子小学校 (4) 郡山町老人会 (スライド) (4) 河芸町郷土史研究会 (4) 栄小学校、黒田小学校 (4) 秋永町老人会 (スライド) (5) 平田野中学校母親学級 (6) 稲生小学校、稲生郷土史研究会 (6) 遺跡説明会 (8) 加佐登小 PTA (11)
	B2区試掘調査	⑥ 分布調査、試掘調査の結果、古墳三基と遺物包含地 (西高山 D 遺跡) が発見された。	
53	末野 C 遺跡 (25,000㎡)	⑦ 仮設道路北側部分で、奈良時代から平安・鎌倉時代に至る掘立柱建物が多数検出されたが、なかでも、鎌倉時代の建物址は全て総柱建物で、約 20 棟ほど検出された。他に同時期の円形土壌、土壌墓、溝址が見つかった。遺物には、山茶碗、山皿の他に、緑釉陶器片 1 点があり、中世の遺構、遺物が目立った遺跡である。	千代崎中学校 (4) 三重県埋文担当者会議 (6) 遺跡説明会 (8) 桑名市教育研究会 (9) 平田野中学校家庭教育学級 (10) 北勢四市文化財協議会 (10) 千里団地子供会 (10)
54	松山遺跡 (1,000㎡)	⑧ 古墳時代前期の竪穴住居址 (Ⅰ期) 1 棟の他、方形周溝墓 1 基、鎌倉時代の溝址がある。	中瀬古町老人会 (スライド) (1)
	末野 A 遺跡 (10,000㎡)	⑨ 古墳時代後期の竪穴住居址 (Ⅲ～Ⅴ期) をはじめ、古墳時代以後奈良時代に至る掘立柱建物が多数検出された他、平安時代の素掘りの井戸、縄文時代の竪穴住居址 1 棟がある。出土遺物には、井戸址から出土した井戸椀、曲げ物、土師器 (椀・甕・皿)、製塩土器、灰釉陶器の他に、硯・フイゴの羽口、土馬、鉄斧がある。中央部は緑地として保存される。	白子小 PTA (7) 遺跡説明会 (8) 神戸中学校 (スライド) (11)

古墳時代後期から奈良時代を中心とする大規模な集落址であることが判明した。この調査報告及び遺構・遺物の検討会を事業者をまじえ指導委員会でおこない、この席で協議内容をふまえ、遺構の確認された箇所について極力現状保存できるよう、計画設計をお願いした。次回の指導委員会では、前回の協議内容をもとに設計された計画図の概要説明が事業者側からあり、保存方法、保存面積について協議があ

った。また、保存面積をこれ以上増やすことは事業経営から非常に困難であると言う事業者の強い要望から、郡山遺跡群の性格上貴重な箇所、遺構密度の高い箇所を優先的に保存区域に含めるなどして再度、計画の変更をお願いした。そして最終的には、遺構密度の高い末野 A 遺跡 (10,000㎡)、遺跡群内で最も古い須恵器を出土した西高山 B 遺跡 (3,000㎡)、縄文時代の周知の遺跡である追谷遺跡 (2,000㎡)、造成区

調査期間	遺跡名 (調査面積)	調査概要	調査に係る諸活動(月)
S55	末野古墳	⑩ 径15m×15m、高さ1mの円墳で、周囲に巾1.5mの周溝が巡る。主体部は、開墾により破壊されている。周溝から出土した須恵器から築造時期は7世紀前半頃と考えられる。	中瀬古町老人会(スライド)(3) 旭ヶ丘小学校(3) 白子小学校(4) 遺跡説明会(4) 栄小学校家庭教育学級(6) 発掘調査指導委員会(7) 遺跡説明会(8)
56	進入道路調査 塚腰遺跡 中瀬古南遺跡 大門遺跡	⑪ 塚腰遺跡からは、弥生時代終末から古墳時代前期に至る方形周溝墓2基、中瀬古南遺跡からは、古墳時代前期の竪穴住居址(I・II期)5棟の他、鎌倉時代の掘立柱建物、土壇墓(青磁碗出土)がある。大門遺跡からは、古墳時代前期から後期の竪穴住居址(I・II期)5棟が検出された外、大きな鉄滓がある。	鈴鹿市郷土史研究会(スライド)(2) 発掘調査指導委員会(2) 遺跡説明会(4) 明和中学校(5) 神戸中学校(5) 旭ヶ丘小学校(6)
57	西高山D遺跡 西高山2号墳 西高山3号墳 西高山1号墳 須恵古窯調査 B ₂ 区試掘調査 西川遺跡 (1,200㎡) 遺物整理	⑫ 掘立柱建物1棟、土壇4が検出された他、須恵器の中には、杯・蓋の熔着したものがある。 ⑬ 全長25.5mの前方後円墳で、円筒埴輪が巡り、5世紀末に比定される。 ⑭ 径12m×12mの方墳。 ⑮ 径30m×30m、高さ1.5mの円墳で、周溝内より、黒斑を有する円筒埴輪が出土する。 ⑯ 西高山A遺跡の南から、A遺跡と同じ時期の須恵器を焼成した古窯址(2基)が検出された。1つは焚口から煙道まで10m、他は7.9mを計る。 ⑰ 試掘堀45箇所設定した結果、遺物包含地(西川遺跡)が発見される。 ⑱ 古墳時代後期の竪穴住居址(Ⅲ・Ⅳ期)が19棟、古墳時代後期から奈良時代に至る掘立柱建物址13棟の他、縄文時代中期末の竪穴住居址2棟がある。	旭ヶ丘小学校(4)

東端の茶白山古墳群に属する古墳4基について現状保存されることになった。他に遺構・遺物の確認された箇所については、発掘調査を実施して記録にとどめることにし、重要遺構等の発見があった場合はその都度、指導委員会で保存方法等について協議することになった。なお、遺跡名は、独立した台地、道路境等を利用し、字名とアルファベットを用いて、西高山A・B・C遺跡のように呼び、また造成区域内の遺跡・古墳を総称して郡山遺跡群と呼称することにした。

進入道路調査 A区内の調査終了後、造成事業に関連し、進入道路に伴う調査も生じてきた。昭和55年11月から昭和56年3月まで、関連公共事業として周知遺跡三箇所(塚腰遺跡・中瀬古南遺跡・大門遺跡)について道路部分に限って調査を実施した。

古窯址調査 西高山A遺跡の南に位置する小支谷の北斜面より、道路工事中、須恵古窯址2基が発見され、昭和56年12月より約10日間の日程で緊急調査を実施した。

B区調査 A区の西に位置する第II期工事(B区)は、南部の丘陵地を中心としたB₂区とA区から直ぐ西へ続くB区に分けられ、B区内の遺跡の確認は

A区と同様に分布調査と試掘調査により行った。B₁区からは、集落址(西川遺跡)、B₂区から、古墳三基と集落址(西高山D遺跡)が発見された。B₂区は、昭和56年4月から、B区は昭和57年2月からそれぞれ調査に着手した。またB₂区から、前期古墳の可能性のある西高山1号墳、鈴鹿市南部において数少ない前方後円墳が発見され、この地域の古代社会を究明する上で貴重な資料であり、保存されるよう指導委員会で業者に要望したが、B₂区丘陵部は、数mにわたって掘り下げ、削土を他所へ移動する工事施行により、保存は困難であるとの回答であった。

2. 調査の協力

B₁区所在の西川遺跡の調査をもって、昭和50年6月より開始した郡山遺跡群の調査は終了した。調査面積約70,000㎡、この間まる8年を要した。長期にわたり、しかも大きな事故もなく発掘調査が無事に終了したのも、猛暑、厳冬をいわず調査に協力していただいた地元郡山をはじめ、中瀬古・秋永・越知各地区の方々のお蔭であり、最初にお礼を述べたい。また発掘当初から、調査事務所の管理・経理事

第2表 郡山遺跡群の竪穴住居址時期区分

住居址の時期	須恵器の特徴	須恵器実測図
I期竪穴住居	須恵期が一般化する以前,土師器を中心とした竪穴住居。	
II期竪穴住居	初期型式の須恵器を伴う竪穴住居。	
III期竪穴住居	杯・蓋にヘラケズリ調整された須恵器を中心とする竪穴住居。	
IV期竪穴住居	杯・蓋の底部・天井部が未調整のままの須恵器を中心とした竪穴住居。	
V期竪穴住居	蓋に返りが付き,杯底部がヘラ削りされた須恵器を伴う竪穴住居,	
VI期竪穴住居	蓋の返りが消失し,口縁端部が屈曲し,杯に高台が付く須恵器を伴う竪穴住居。	

務について、脇田敏実（三交不動産株式会社）、樋口一男（郡山町、56年逝去）氏に協力いただいていることも忘れることはできない。調査にあたっては、大場範久（石薬師高校）、保条馨（千代崎中学校）、垣見博一（白子高校）、長谷川登（神戸中学校）、中川善夫（栄小学校）各氏に協力いただいた。

3. 概要報告書の刊行

出土品の整理 各遺跡の出土品の整理と併行して、各遺跡の概要報告書を次のとおり刊行している。

郡山遺跡試掘調査概要Ⅰ 1975.10

郡山遺跡試掘調査概要Ⅱ 1975.12

西高山遺跡調査概要 1976.6

西高山A・B遺跡調査概要 1977.6

末野B遺跡調査概要 1978.3

末野C遺跡調査概要 1979.4

東進入道路建設に伴う発掘調査概要 1981.3

4. 調査報告書の作成

報告書の執筆報告書の作成は、A・B地区ごとに各遺跡の報告を2冊にまとめることにした。A地区内に所在する末野A・B・C遺跡、西高山A・B・C遺跡、松山遺跡、末野古墳・古窯址及び進入道路関係遺跡についても58年度中に刊行の予定である。

なお本報告の作成にあたって、石質の鑑定については、小林秀樹氏（鈴鹿市教育研究所所長）、埴輪については、西口寿生氏（奈良国立文化財研究所）より多くの御教示を得た。

5. 埋蔵文化財保護協定書の締結

(1) 事業地内文化財保護協定書

鈴鹿市教育委員会（以下「甲」という）と、三交不動産株式会社（以下「乙」という）とは、当該事業計画地内の文化財の保護について、文化財保護法（以下「法」という）の精神ならびに規定に基づき、つぎのとおり協定を締結し、これを誠実に実行するものとする。

1. 事業の概要

- (1) 事業の名称 宅地造成事業（仮称夕川ニュータウン）
- (2) 事業地 鈴鹿市郡山町大字末野、向山、追谷、下浦、広川、夕川
鈴鹿市中瀬古町大字唐立、太々星
- (3) 事業の計画面積 283,000㎡（別添図のとおり）

2. 事業地内の文化財

- (1) 名称 郡山遺跡
- (2) 試掘面積 8,000㎡

第1条 工事施行中またはその他の事由により新に発見された文化財については、乙は現状を変えることなく甲に通知し、その指示にしたがうこと。

第2条 止むを得ず発掘調査を必要とする文化財については、乙の委託により甲あるいは甲の認める団体が法に定められた手続きをとり、主体となって発掘調査を行うものとする。これに要する経費は乙の負担とする。

第3条 乙の事業完了後における個々の文化財の保存方法、管理など具体的措置については、甲、乙が別途協議して定めるものとする。

第4条 甲は、乙の行う事業の実施状況について、必要な報告を求め、かつ立入検査を行うことができるものとする。

第5条 甲は、乙がこの協定に違反し、かつ文化財保護に重大な支障をもたらすと認めるときは、乙から事情を聴取し、その程度に応じた改善措置もしくは工事の一部中止を指示できるものとし、乙

はこれにしたがわなければならない。

第6条 この協定に定めのない事項または協定の定める事項について疑義を生じた時は、甲乙が協議のうえ定める。

上記協定の証としておのおの記名押印のうえ、その1通を保有するものとする。

昭和50年5月27日

甲 鈴鹿市教育委員会
教育長 中川 義一

乙 三交不動産株式会社
取締役社長 由良 喜市

(2) 三交パークタウン「夕川」中央公園計画について（案）（三交不動産株式会社）

中央公園は、「夕川」に設置される計画の4つの公園のうち中央部に位置し、面積10,000㎡の規模をもつ夕川最大の公園である。

この中央公園は埋蔵文化財との包蔵地として現状保存される区域を公園として利用するものであるため、文化財保存の観点から次のような制約をうけている。

1. 公園として利用するに当たっては、埋蔵文化財の現状保存に支障のないようにすること。

2. 樹木の根による埋蔵文化財の破損を防ぐため、将来大木になるような樹木を現地盤に植えないこと。

一方、公園としての利用をはかるためには、芝生広場や遊具施設の設置、あるいは、樹木の植栽は是非共必要である。

従って、この両面の調和をはかり、双方の条件を満すような方策を考えなければならない。このような考え方に立って、次のような基本方針によって公園計画をまとめることにした。

中央公園造成計画基本方針

- (1) 埋蔵文化財の現状保存に支障のないものとする。
- (2) みどりに囲まれた静穏ないこいと教化に役立つ自然度の高い公園とする。

このような二面の目的を両立させるため、

1. 現状保存区域の原地盤上におおむね30cm程度の覆土を行い、埋蔵文化財の保護をはかるほか、計画地盤高の造成、芝、低木等の植栽を行なう。

2. 防風、修景、樹木の植栽等を考慮して公園の周囲に自然な形のマウンドを配置する。静穏な公園とするうえで特に障害となる冬期の季節風の減衰をはかるため、公園周囲の北と西側のマウンドは南、東側と較べてやや高いものとする。

3. 区域内に現に植えている樹木は、極力保存につとめるほか、新たに植栽する樹木、とりわけ高木は、

開発地内の自然植生樹木を主として用い、環境の再現につとめるものとする。

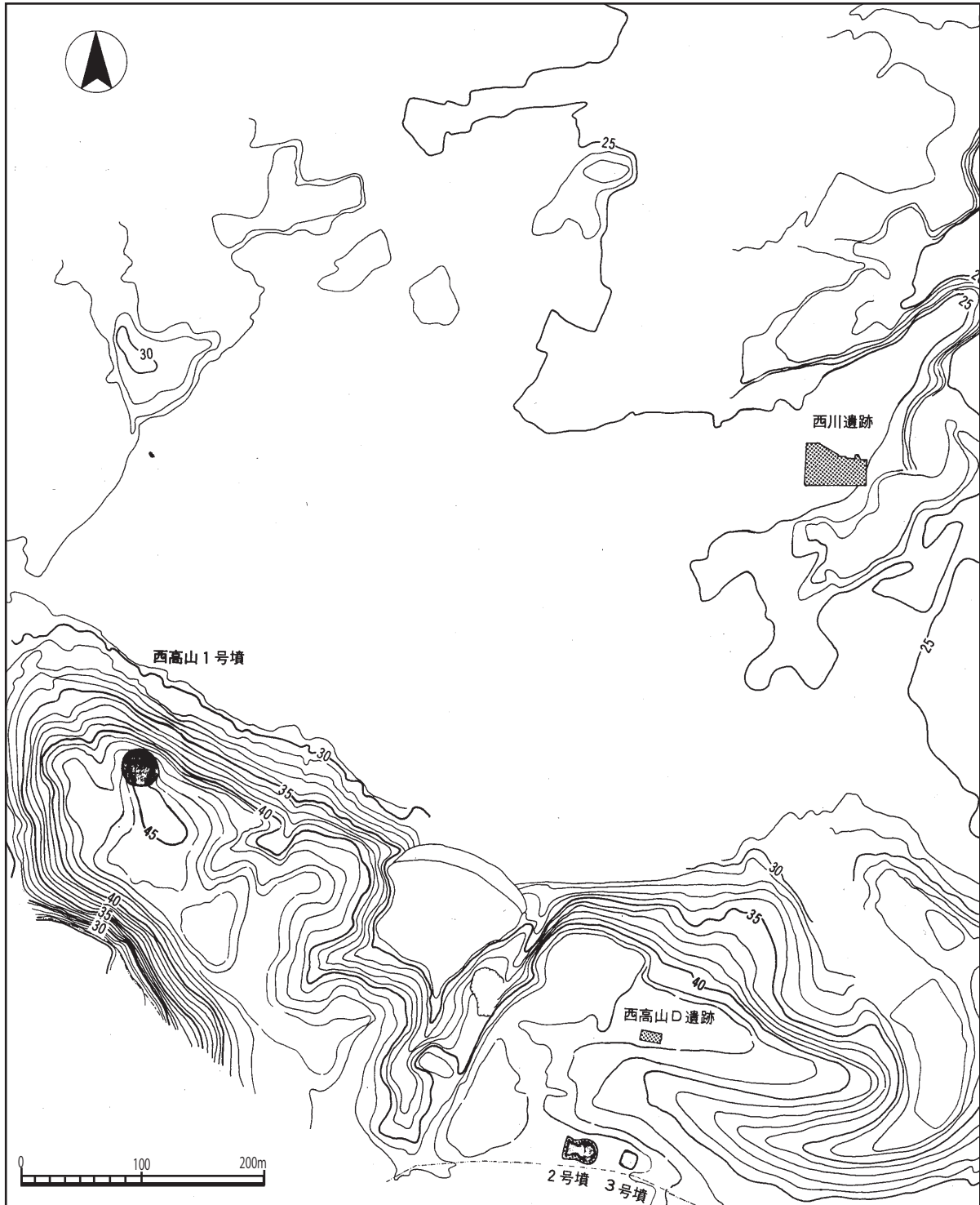
4. 高木の新たな植栽は、埋蔵文化財の支障のないようにするため、マウンド地内、埋蔵文化財本発掘ならびに試掘ずみの区域で行うものとする。

5. 遊具類は、文化財保護に支障のないよう覆土上にまとめて配置するものとする。



第1図 郡山遺跡群の位置 国土地理院 白子(1:25,000)

Ⅱ 位置と歴史的環境



第2図 B地区遺跡地形図 (1:5,000)

1. 地 形

郡山町から中瀬古、秋永町にまたがる広い台地は、鈴鹿市南部を伊勢湾に東流する中の川の河岸段丘により形成されたもので、台地の東には、伊勢平野につながる中の川の沖積地が開けている。台地の縁辺部は標高5～10mと低く、南に行くにしたがって高くなり、郡山遺跡群が所在する中央部は、標高20～21mで巾70～80m、深さ10～13mの樹支状の谷が郡山の奥地まで延び、広く台地をとりまいている。谷と台地の比高は約10mあり、台地は、畑、密柑畑に利用され、一部山林、草生地となっている。谷は自然湧水も豊富で、最近まで水田が営まれていた。台地は南部で河芸町と接しながら標高35～42mと急に高くなり、そこからの眺望は開け、鈴鹿市街はもちろんのこと、遠くは伊勢湾、知多半島までも望むことができる。

2. 時代概観

この台地の開発は古く、縄文時代までさかのぼり、山間部の追谷遺跡から縄文時代の石器類が、西川遺跡からは、竪穴住居址も見つかっている。山あいの湧水の豊かな谷を臨む台地は、生活条件に恵まれ、後背の丘陵は絶好の狩猟場を提供していたに違いない。

農耕社会に代表される弥生時代以後の遺跡は、経済基盤となる中の川の低湿地を臨む台地縁辺部に集中し、畑遺跡⁽¹⁾・中瀬古南遺跡⁽²⁾・大門遺跡・松山遺跡からは、弥生時代末から古墳時代前期に至る竪穴住居址が検出されている。また同じ松山遺跡・塚腰遺跡からは、鈴鹿市南部では初めてである弥生時代最終末から古墳時代前期に至る方形周溝墓が見つかり、この地方の弥生社会から階層分化による首長層発展への政治構造を究明する上で貴重な資料である。

初期首長層の墳墓に、明治時代三角縁神獸鏡⁽³⁾を出土した赤郷塚があり、それに次いで首長をつとめたのが経塚古墳⁽⁴⁾の被葬者とされている。いずれも低い台地にあり、弥生時代から古墳時代に至る遺跡と同じ位置を占めている。またこれら前期古墳とは、さほど離れていない南西の造成区内の台地から黒斑のついた円筒埴輪を持つ円墳（西高山1号墳）、首長層クラスの前方向後円墳（西高山2号墳）が新たに発見された。

須恵器生産が始まる古墳時代後期になると郡山遺跡群にみるように、山間部の台地まで開発され、集落も急激に増大⁽⁵⁾する。直ぐ南の千里が丘遺跡（河芸町）からも多数の住居址を検出している。そうした集落の需要に応じるため、須恵器生産も量産化されこの地域一帯に窯業生産地（徳居古窯址群）が形成される。一方集落の増大は、茶臼山古墳群（21基）、大野古墳群（46基）にみるように、群集墳の発生につながっていく。このように集落と古墳群・窯業生産とが深く結びつき、一つの古代社会を形成していることが郡山遺跡群の大きな性格であり、こうした特徴が「郡山」と言う地名が示すように律令社会において奄芸郡衙成立の大きな要因ともなっている。

律令社会の遺産である条里遺構は台地の北に広がる沖積平野に残っていたが、近年の圃場整備により見ることはできない。条里の方向が現在の畑の地割となつて少し残っている⁽⁶⁾。

古墳時代後期から奈良時代にかけて盛時を迎えた山間部の集落も平安・鎌倉時代以後他所への移動が考えられ、姿を消す。荘園社会における土地と農民の支配関係によるとも考えられる。荘園社会の一端を窺い知る資料として、保延5年（1139）栗真荘が、田三反を郡山の酒井神社に寄進した古文書が当神社に保管されている（県指定文化財）。また「吾妻鏡」による平家残党の反乱である羽取山の戦い（元暦元年、1184）の羽取山（服部山）とは、郡山南方の丘陵を指しているとも言われ⁽⁷⁾、古代ばかりでなく中世においても、この地方は歴史の舞台となって登場してくるのである。

註（1）仲見秀雄「畑遺跡」『国鉄伊勢線関係遺跡調査報告』鈴鹿市教育委員会 1967。

（2）中森成行「東進入道路建設に伴う発掘調査概要」鈴鹿市教育委員会 1981。

（3）現在、秋永町真昌寺にて保管。

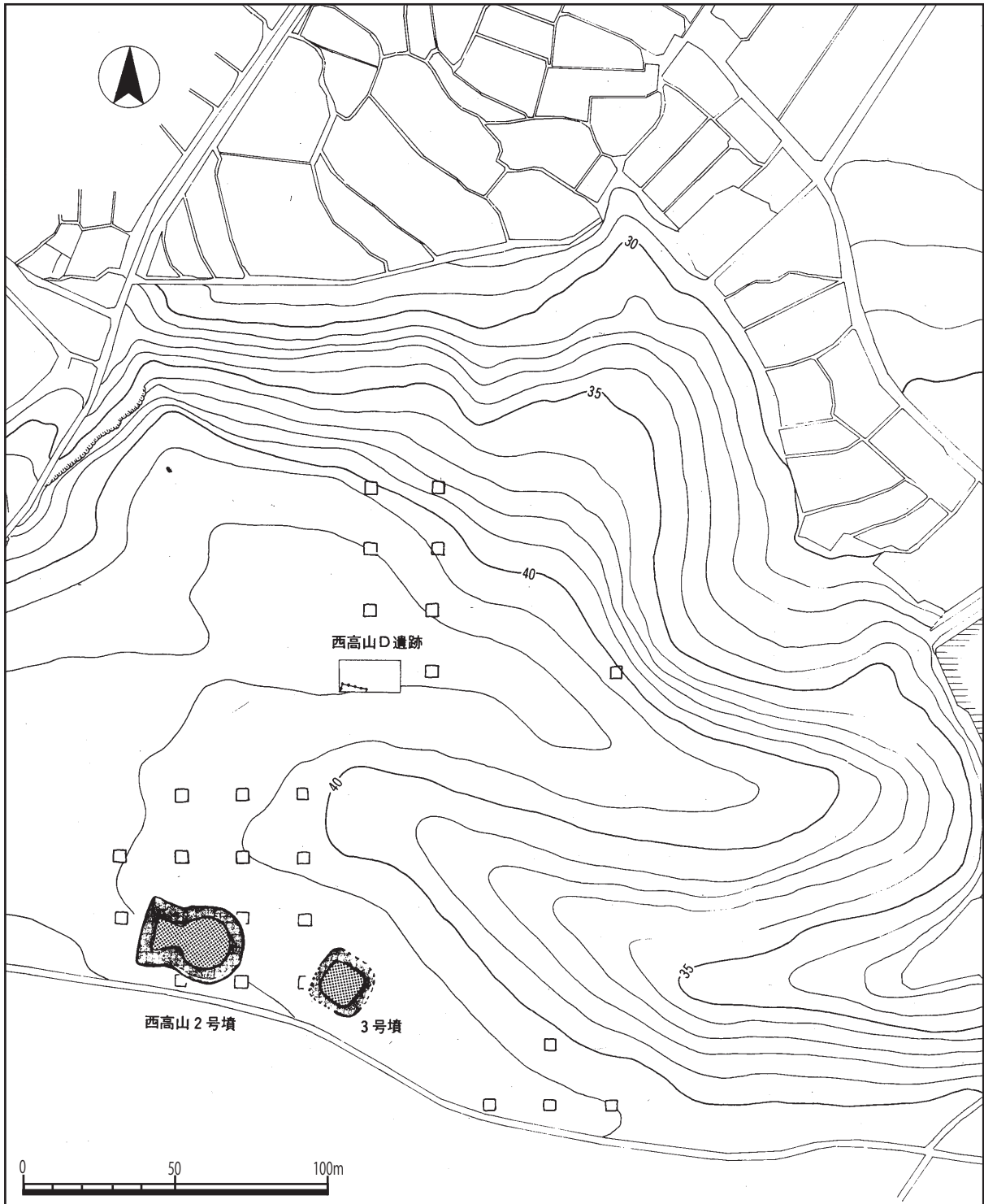
（4）真田幸成「経塚古墳」『国鉄伊勢線関係遺跡調査報告』鈴鹿市教育委員会 1967。

（5）小玉道明「千里ヶ丘遺跡発掘調査報告」千里ヶ丘遺跡発掘調査団 1968。

（6）戸祭由美夫「古代伊勢国奄芸郡の郡家と条里」歴史地理学会報88号

（7）『鈴鹿市史』第1巻 1981。

Ⅲ 西高山D遺跡の調査



□印は試掘箇所

第3図 西高山D遺跡地形図 (1:2,000)

1. 位 置

南西区の造成地（B₂区）は、標高 41m～42m の台地からなっており、中央部でやや細くくびれ、東側は浅い谷の進入により台地は二つに分かれている。

西高山D遺跡は、この二つに分かれた台地の北側に位置し、これまで調査した集落址のなかで、最も高い所に所在している。B₂区の分布調査においては、遺物の散布は認められなかったが、未買収地を除いて 20 箇所設定した試掘掘のなかでただ 1 箇所、遺構・遺物が検出されたことから、この箇所を中心に面積を拡張し本調査を実施することになった。

2. 遺 構

約 200㎡の調査から掘立柱建物址 1、土壇 4 が検出された。開墾後、畑として耕作されていたことなどから、包含層は無く、表土である耕作土より 15～20cm で直ぐ地山面に至り、遺構はすべてこの面より検出された。地山と遺構埋土とは良く似た黄褐色をなし、遺構の確認はむずかしかった。

(1) 掘立柱建物址

S B 1 発掘区の南東隅で検出された。南側は未掘のため規模は不明であるが、おそらく 2 間×4 間の北西—南東棟の建物であろうと思われる。西妻柱は、現在の穴により上面は削られている。柱穴掘り方は、径 40cm～50cm、深さ 50cm～60cm で、方形に近いものが多く、なかには、径 20cm の柱穴痕が残るものもある。掘り方内から、杯 A の細片が出土している。S K 4 との前後関係は明らかに出来なかった。

第 3 表 掘立柱建物址の規模

名称 (S B)	規模 (間)	桁行 (m)	梁行 (m)	棟 方 向	柱 間	
					桁行 (m)	梁行 (m)
S B 1	4 × -	7.2	-	N - 78° - W	1.8	2.1

第 4 表 土 壇 の 規 模

名称 (SK)	形状	規模 (m)	深さ (cm)	名称 (SK)	形状	規模 (m)	深さ (cm)
SK2	不正形	5.5 × 2.5	25	SK4	長方形	3 × 3.6	15
SK3	長方形	3 × 1.4	15	SK5	円形	5.5 × -	30

(2) 土 壇

S K 2 5.5m × 2.5m の不整形の土壇で、小さい壇がいくつか重なったものと考えられる。須恵器の出土量が最も多く、西側の土壇より、杯 A・B 類のほか、蓋・身の熔着したものが三点出土している。南東隅には、20cm × 20cm の範囲で焼土が残っている。

S K 3・4 3m × 1.4m、3m × 3.6m、いずれも深さ 10cm～15cm と浅く、床面に小柱穴が認められる。遺物は S K 3 より須恵器の杯・蓋 A・B 類が数片と砥石 1 点が出土している。

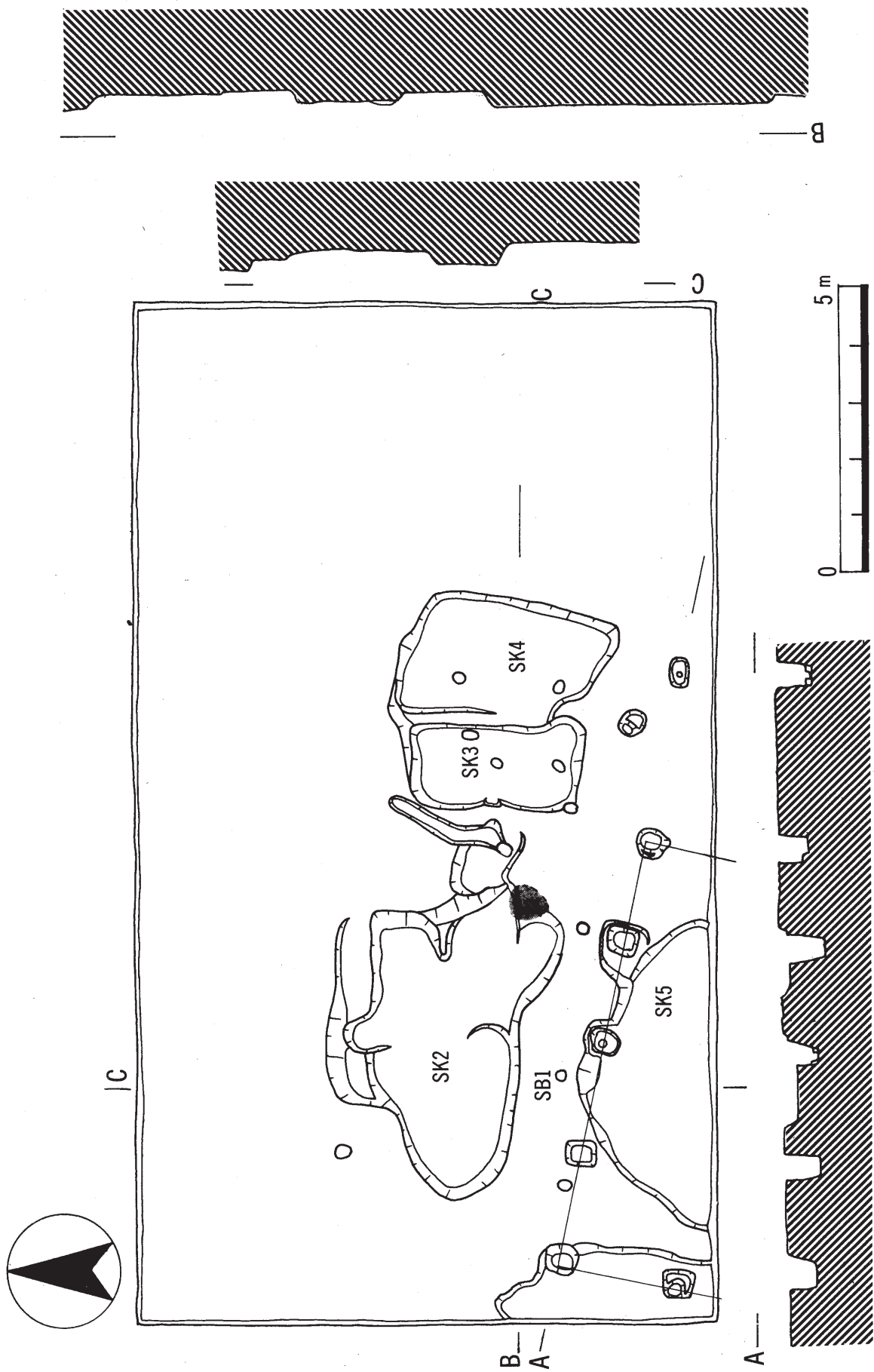
S K 5 円形を呈した径 5.5m の土壇で、南側部分は、道路と未買収地のため調査できなかった。深さは 25cm～30cm と他の土壇より深く、須恵器の杯 B・C 類が多く出土した。埋土には、炭化物を若干含んでいる。

3. 出土遺物

遺物は、7・8 世紀の須恵器の杯・蓋が大半で、少量の土師器の甕・皿片の外、砥石 1 点がある。

(1) 須恵器 (第 5 図 1 - 41)

杯・杯蓋・高杯・平瓶・長頸壺・鉢などがある。須恵器の大半を占める杯は、丸い底部と口縁部に蓋受けのたちあがりのある A、底部がヘラ削りされ、体部が外傾、もしくは内する B、底部に高台をもつ C の三種に大別できる。蓋も同様に、丸い未調整の天井部をもつ A、宝珠のつまみがついて内面にかえりがつく B、かえりが消失し、口縁端部が屈曲する C の三種に分けられる。



第4図 西高山D遺跡遺構実測図(1:100)

杯A (6-9・41) 径10.5cm～11cm、高さ2.4cm～3cmと小形の杯で、たちあがり短かく内傾し、底部はすべて未調整である。7の蓋受けには蓋の口縁端部が融着する。黒灰色で、自然釉が付着する。8は体部に歪みを持ち、底部は茶褐色。9は蓋とも考えられるが、つまみがついた痕跡と底部調整がないところから杯とした。底部は茶褐色でザラザラし、器表はあらい。41は、杯、蓋が完全に融着するもので、三点出土している。杯は黒灰色、蓋は灰褐色。

蓋A (1-5) 1・2は径9.8cm～10.4cm、高さ3cm～3.2cm、天井部未調整の小さな蓋。2は器壁は薄く、窯壁が付着する。灰褐色。3・4は高さが2.4cmと低く、口縁端部が外反するのが特徴。3は体部が歪む。黒灰色。5は径8.6cm、高さ3.6cm、口縁端部が外反し、体部が小さく波うつ。内面中央部は小さく雑に削られ短頸壺の蓋と考えられる。黄灰色。

杯B (20-27) ヘラ削り調整により底部が中広い面をなし、体部が外反するB₁ (20-22・27) とヘラ削りにより底部は丸く仕上げられ、体部が内湾気味のB₂ (23-25・26) に分けられる。20は口径に較べて浅い杯で、口縁部がやや外反気味のもの。21は体部が大きく外傾し、口縁部がそのまま真直ぐ上にのびるもの。内外面ともよく水引きされる。ヘラ削りされた平坦な底部に「×」印の窯印がある。23はヘラ削りされた丸い底部と、そのまま上にのびる口縁部からなる。口径9.2cm、高さ4.2cm。24は内湾した体部と直立する短かい口縁部からなる深い杯。径8cm、高さ5.6cm。25は丸味をもつ体部で、底部の1/3はヘラ削りされ、重ね焼痕と「×」印の窯印がある。黒灰色。26は最大形で、径18.5cm、高さ6.5cm。底部はすどくヘラ削りされ、稜をつくる。青淡色。

蓋B (10-19) 宝珠のつまみがついて口縁部にかえりがつくもの。天井部はヘラ削りされるが黄褐色の自然釉の付着でザラザラし、調整方法の不明なものが多い。小形の(14-19)と大形の(10-13)に分けられる。10は径17.9cm、高さ4.4cm。かえりがわずかに口縁部より突出する大形の蓋でわずかに歪みをもつ。天井部の平坦部はヘラ削りされるが、窯壁・自然釉が付着し黄褐色のため不明確。内面は水引きされ、中央部はナデ調整。11はかえりが突出しない大きな蓋で、天井部の1/2はヘラ削り。内面は

水引きされ、青灰色。13の天井部には同心円状の沈線を巡らし、その間に細かな刺突文をつける。青淡色。16は天井部の2/3がヘラ削りされる。焼が甘く赤褐色。19はかえりが真直ぐ下にのびる偏平な蓋で、天井部がわずかに歪む。壺の蓋と考えられる。

杯C (30・31) 30は径14.7cm、高さ5cmで体部の内外面は水引きされる。底部調整は小片のため不明。青淡色。31は底部がヘラ削りされる。

蓋C (28・29) 径18cm～19cmで天井部の2/3がヘラ削りされる。内面は水引きしたあと中央部をナデ調整。28は口縁部が明瞭に屈曲せず口縁端部に丸みをもつ。29は28よりやや強く屈曲し、口縁端部が断面三角状に近い。杯Cと同様に青淡色である。

皿(32) 径14.2cm、高さ2.7cmで口縁部は薄く仕上げられる。口縁内外面は水引きされ、底部はヘラ削り調整。灰褐色。

高杯(33・34) 33は大きく外反し、二条の沈線がめぐる杯部と大きく広がる長い脚部からなる。脚部は下位でゆるやかに屈曲しながら小さな段をつくり、中央部の浅い沈線は軽くナデることにより表現する。34は底部が平坦で口縁部が強く弩曲する小さな杯部と細い筒部から大きく広がる脚部とからなる。脚部の上部に三条の浅い沈線が巡る。黒灰色で自然釉が付着する。口径8.2cm、高さ8cm。

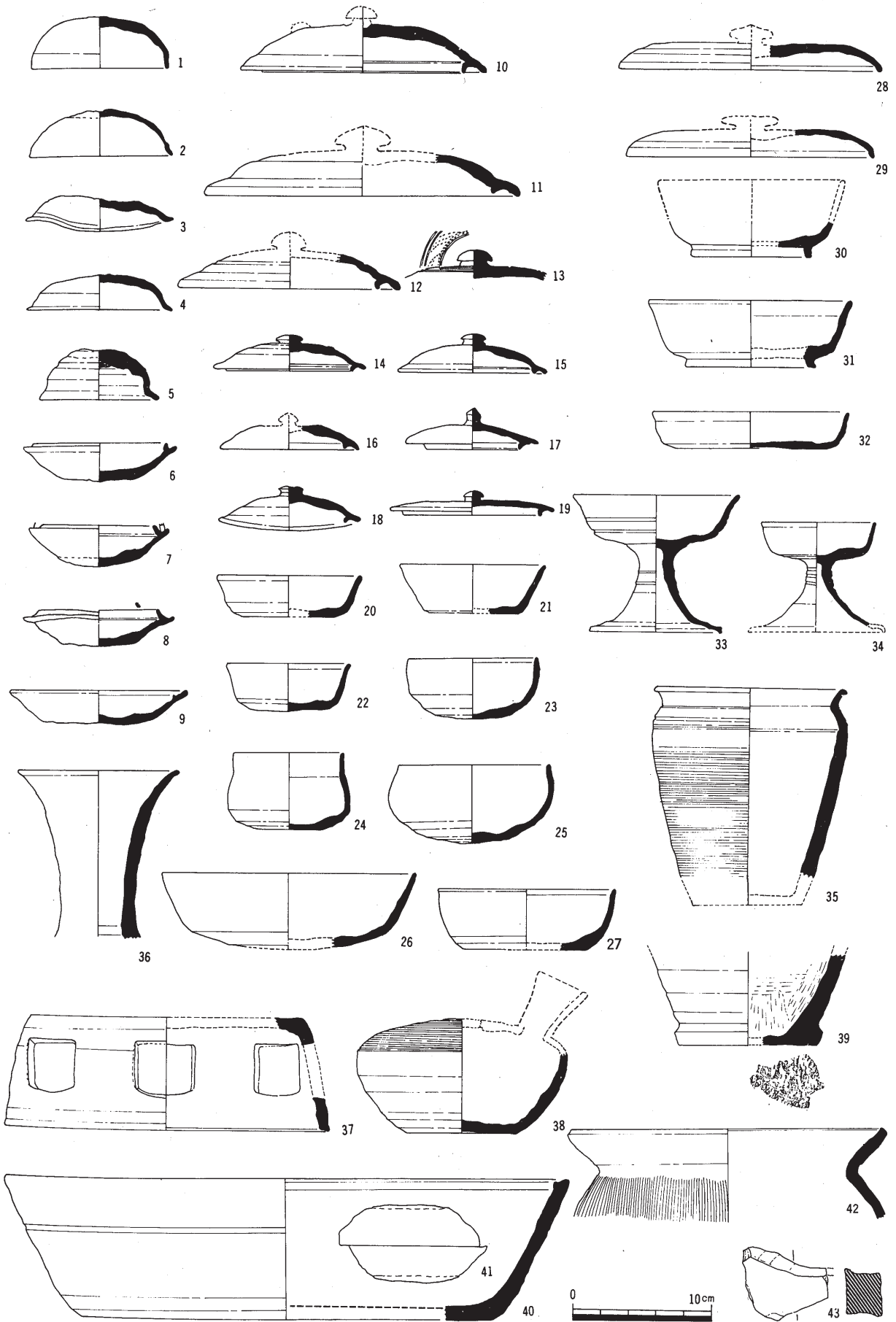
広口壺(35) 外反した短かい口縁部と少し肩があり、ほぼ全体にカキ目を施した長い胴部からなり、肩部・頸部に一条の沈線が巡る。焼成が堅く表面は黄灰色。内面は水引きされ黒灰色。

長頸壺(36) 長頸壺の口縁部でラッパ状に開き、口縁端部は丸くおさめる。内外面とも水引きされ、黄灰色の自然釉が付着する。口径11.6cm、高さ12cm。

焼き台(36) 底径23.7cm、高さ8.3cm、浅い鉢をひっくり返したような形で、体部は水引きされ、周囲に約4.2cm×4cmの方形の透しが8個つく。土器をのせて焼く窯道具と考えられ、上面に穴が穿たれていたか不明である。青淡色で少し焼成が甘い。

平瓶(38) 口頸部を大きく欠損した平瓶の体部である。肩の張った体部下位は大きくヘラ削りされ、上位はカキ目調整が施される。青白色で砂粒が多い。

ねり鉢(39) 厚い板状の底部は、粘土ひもを周囲にまきつけることにより形づくられる。底部にはへ



第5図 西高山D遺跡出土遺物遺構図(1:4) 須恵器、土師器

ラによる多数の刺突文があり、内面は荒い縦・横のナデにより調整。底径約 10cm。

平底鉢（40） 推定径が 52cm、高さ 10.2cmの大形の平底鉢で体部は大きく外反し、下位はわずかにへら削りされ、上位には浅い沈線が巡る。口縁端部は、引き出されたように凹んだ小さな面をもっている。焼成が甘く、灰白色である。

（2）土師器（第 5 図）

甕（42） 口縁部がくの字形に外反し、端部はひき

出される。外面はハケ目調整されるが内面は不明。砂礫を含み黄褐色。

（3）その他

①砥石（43） 5cm×4cmの小さなもので、中央部が細くなり、三面が磨滅している。凝灰岩。

②窯壁塊（図版 3） 10cm×4cmの窯壁塊の一部に丸味があり、天井部の一部とも思われる。他に 5cm×5cm程のものが 2 個あり、自然釉のため黒く光っている。

第 5 表 遺構別出土遺物

器種 遺構	器種											土師器							
	杯 蓋			杯 身			壺			鉢		皿	平瓶	甕	高杯	焼台	皿	甕	
	A	B	C	A	B	C	短頸	広口	長頸	ねり鉢	平底鉢								
S B 1	○			○															
S K 2	1~5,41	10,12,13 15,16	29	6~8	20, 22~25	31								○	34	37			
S K 3		11,17,18				30													
S K 5	9	14,19	28	21	26, 27		○	35	36	39	40	32	38	○	33		○	42	

3. 結語

西高山D遺跡は、北には延びず南に続くものと考えられるが、試掘調査結果などから判断して小規模な集落址と考えられる。本遺跡は、過去に調査した集落とは少し性格を異にしている。そのいくつかをひろってみよう。

① 郡山遺跡群の集落は、谷を臨む舌状台地の周辺部に住居をかまえることが一般的であるのに対し、本集落は標高 41～42m という一段高い台地上に所在している。

② 集落の開始は 7 世紀前半～中頃と他の集落に較べて遅く、しかも 8 世紀前半頃には他所への移動が行われ、存続期間は 50～60 年と非常に短い。

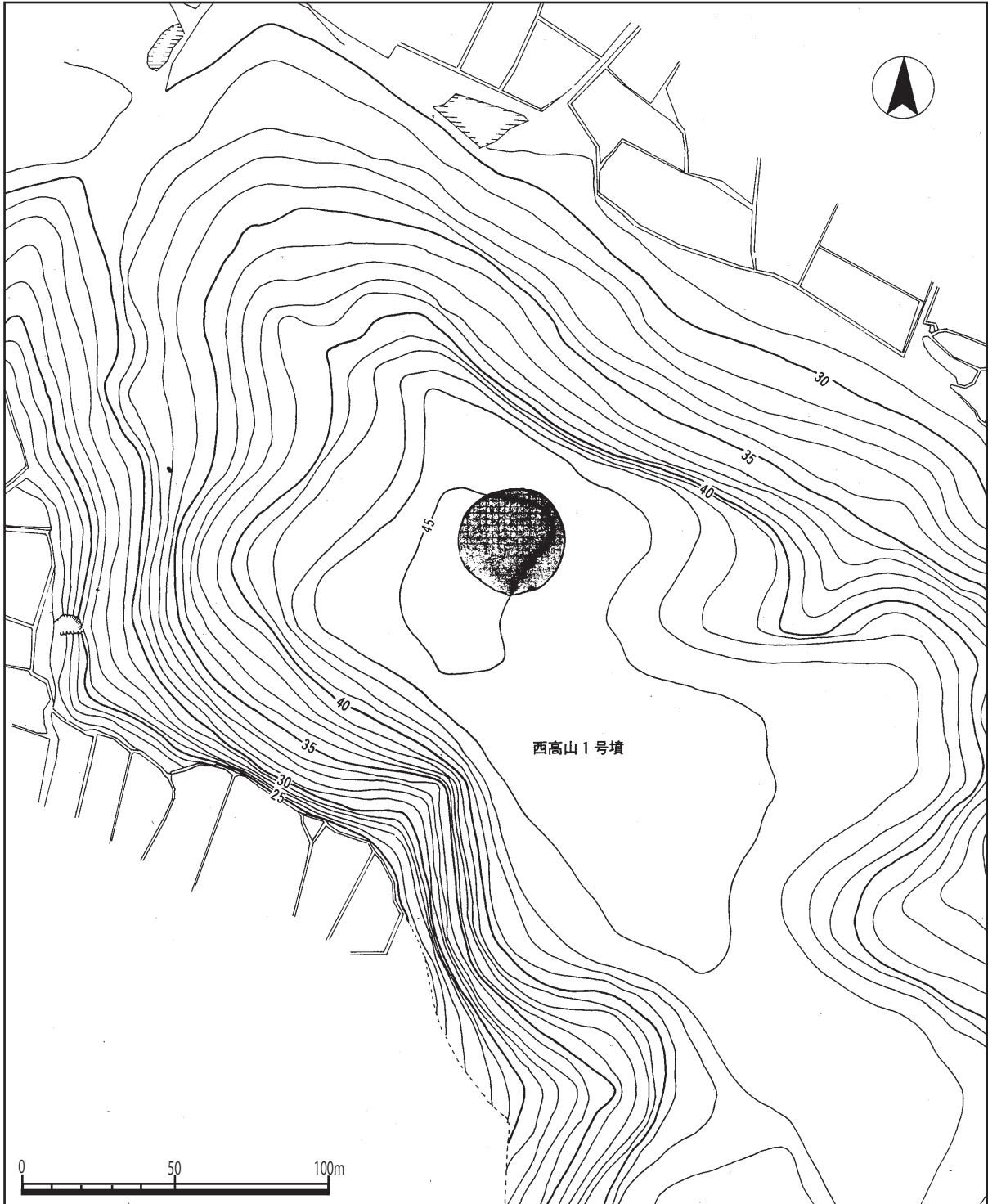
③ 土壙から出土した須恵器のうち、特に S K 1 からは、蓋・身の融着したもの、歪みをもつもの・自然釉の付着したものが多数を占める。

以上のことから、これらは一般集落址からの出土遺物と言うよりも、古窯址からの出土品と言った方

が似つかわしいものであり、焼き台、窯壁塊の出土を考え合わせれば、この付近に古窯址の存在は疑う余地は無く、こうした点から、この集落が須恵器生産に関与していたことも十分に考えられるわけである。

西高山D遺跡出土の須恵器は V・VI 期の竪穴住居址の指標となるもので、郡山遺跡群の各遺跡から出土しているが、竪穴住居吐から出土することは少ない。おそらく、この時期、これまで調査した集落の多くは竪穴住居から掘立柱建物へ移行していたものと考えられる。

IV 西高山古墳群の調査



第6図 西高山1号墳地形図 (1:2,000)

1. 古墳群の位置

西高山古墳群は、西高山D遺跡と同じ南部の台地上にあって、当初4基ぐらいの古墳から構成されていたものと考えられる。1号墳は台地の最西端部にあり、古墳の墳形は保たれていたが、ここから東へ500mの所に位置する2・3号墳については、開墾とその後の耕作により墳丘の大半は破壊され内部構造を知る由もない。2号墳の西側にも古墳が存在したと聞かすが、その所在を明らかにすることができなかった。台地下の平地には、46基からなる大野古墳群をはじめ、数多くの古代集落が存在しており、これらとの関連が予想されるところである。

2. 西高山1号墳

(1) 位置・外形 (第6・8図)

本古墳は、眺望のきく台地最西端部でも北寄りに位置し、周囲は急な傾斜地となっている。墳頂から北に向かって、昭和初期に調査されたと言う既掘墳が巾4.5m、長さ8mの範囲でわずかにくぼんで認められた。また、この周辺は長らく密柑畑として利用されていたことなどから、墳丘の裾には、その境界が溝となって残っている。南から観察すると古墳としての高まりがはっきり確認でき、周辺樹木の伐採後の平板測量では、直径30m、高さ1.5mの円墳であることが予想された。

発掘の手順として、土層観察のトレンチを十字に残し、表土除去とともに主体部の確認に努めた。その結果、既掘は12×4mの範囲で、深さ3.5mにわたり掘りくぼめられ、その後排土で埋めもどされていることが柔らかい土質から明らかになった。慎重に掘り下げていったが、主体部の痕跡、遺物は一点も確認できなかった。

周溝は、急な傾斜地となっている北側を除いて各側で検出されたが、南側の周溝は、巾6m、深さ1mで最も大きく深い。西側に行くにつれ周溝は狭く、巾3.5m、深さ0.8mと浅くなる。周溝の最下層はいずれも黒色土層(20～30cm)があり、埴輪片多数が埋まっていた。形象埴輪は、南東溝と、墳丘の北西裾から出土しているが墳丘上からは、円筒埴輪が樹立

した状態で一点も検出されなかった。

その他に、山茶碗が南西区の溝より最下層の黒色土層直上から出土し、その付近に炭化物が非常に多く認められた。後世に供献されたものと考えられる。

墳丘の断面観察から、地山にあたる明茶褐色の粘土層の上には、旧地表と考えられる巾15～20cmの薄い青緑色の層がのっているが、西と南の端は、古墳の築造の際に削り取られて認められない。この旧地表より上は盛土と考えられ、その盛土の順序は、まず南東地区を中心に粘質の茶褐色土を一気に盛り上げるによりおこなわれ、層序に変化は認められない。その後、北区は数回にわたって盛り上げられ、墳丘規模を拡大するとともに、より北側へ張り出した格好となっている。最終的には、旧地表より2～3m下にみられる硬い黒褐色の砂礫で上部を履うことにより盛土は完了している。

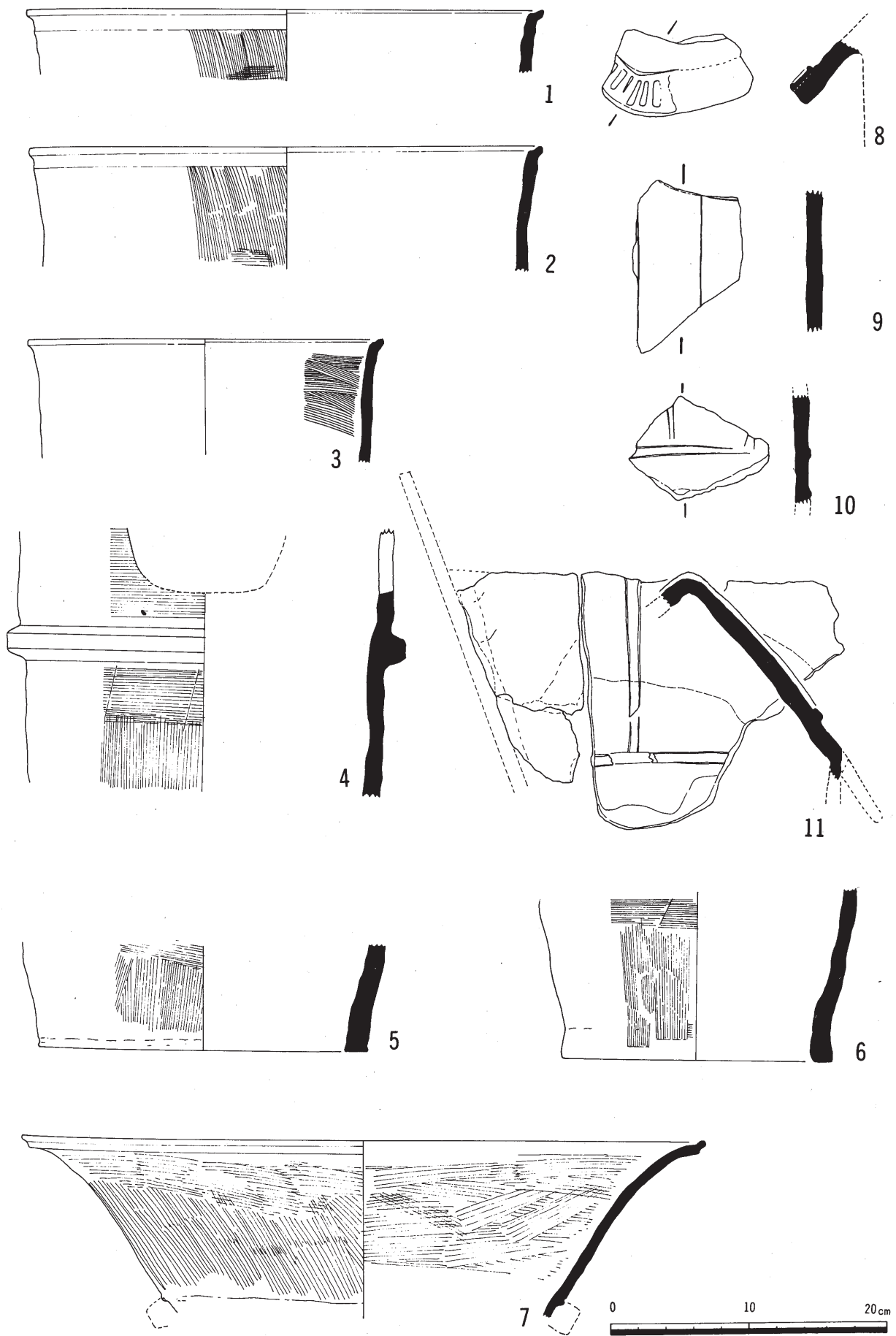
(2) 出土遺物 (第7・10図)

出土遺物は、周溝から見つかった円筒埴輪・形象埴輪が大半を占め、その他、南西区の周溝中から見つかった山茶碗片、埴麓から見つかった大形の須恵器の甕片がある。

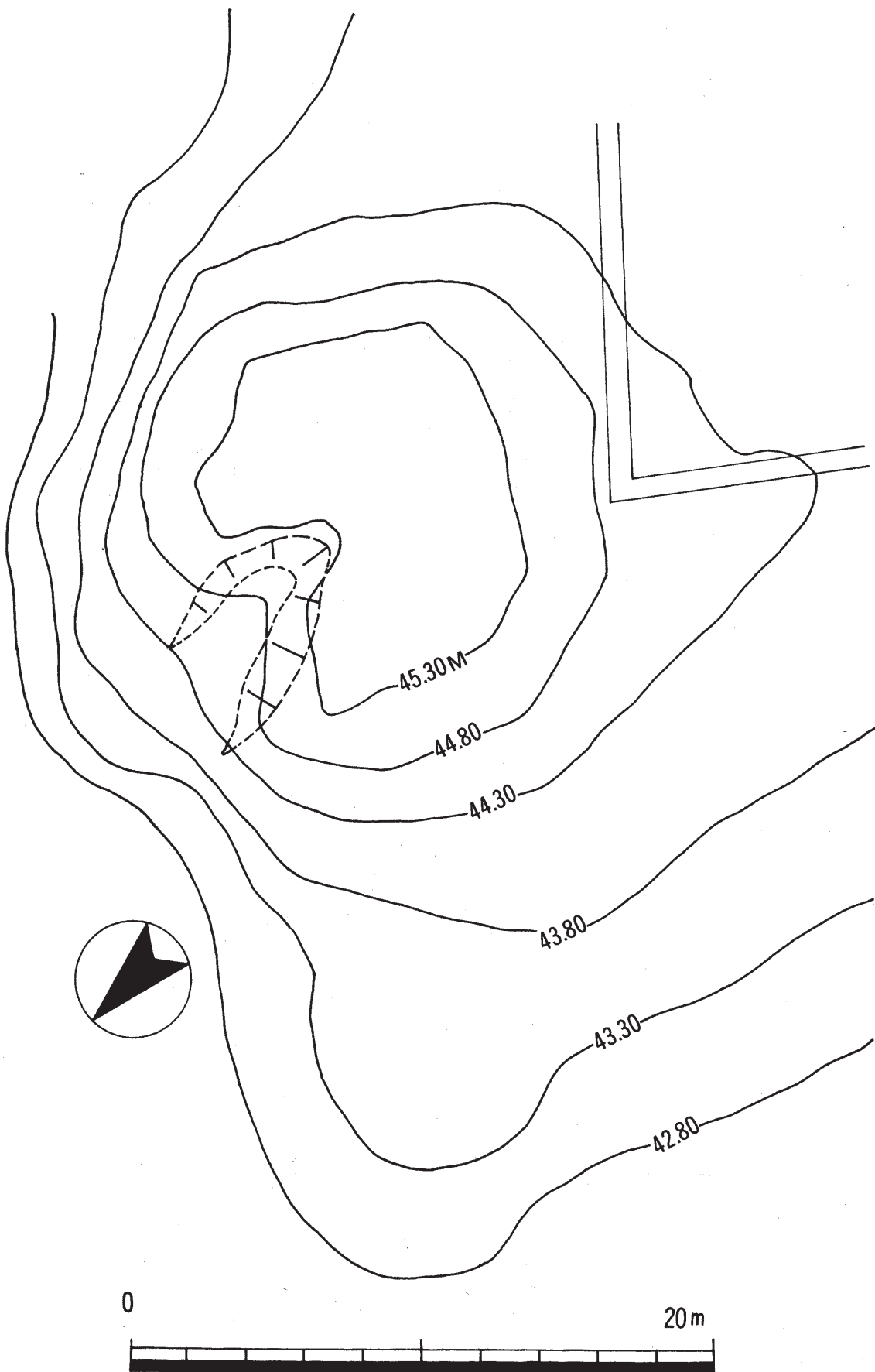
1. 円筒埴輪、形象埴輪 (1-11) (第7図)

口縁部から基底部まで接合したものはなく、全体の器形を窺い知ることにはできないが、個々の破片から推測すると非常に大形の埴輪で器壁も厚く、ところどころ茶褐色、黒褐色の黒斑があり、古い様相を示す埴輪であることが判る。胎土には、砂粒を含むものと、緻密な粘土を使用する二種に大別でき、前者は、円筒埴輪に、後者は、特に北側で見つかった形象埴輪に多い。刷毛目は、非常に細かく、丁寧であるが、胎土に砂粒を含んでいることから、遺存状態は良くない。

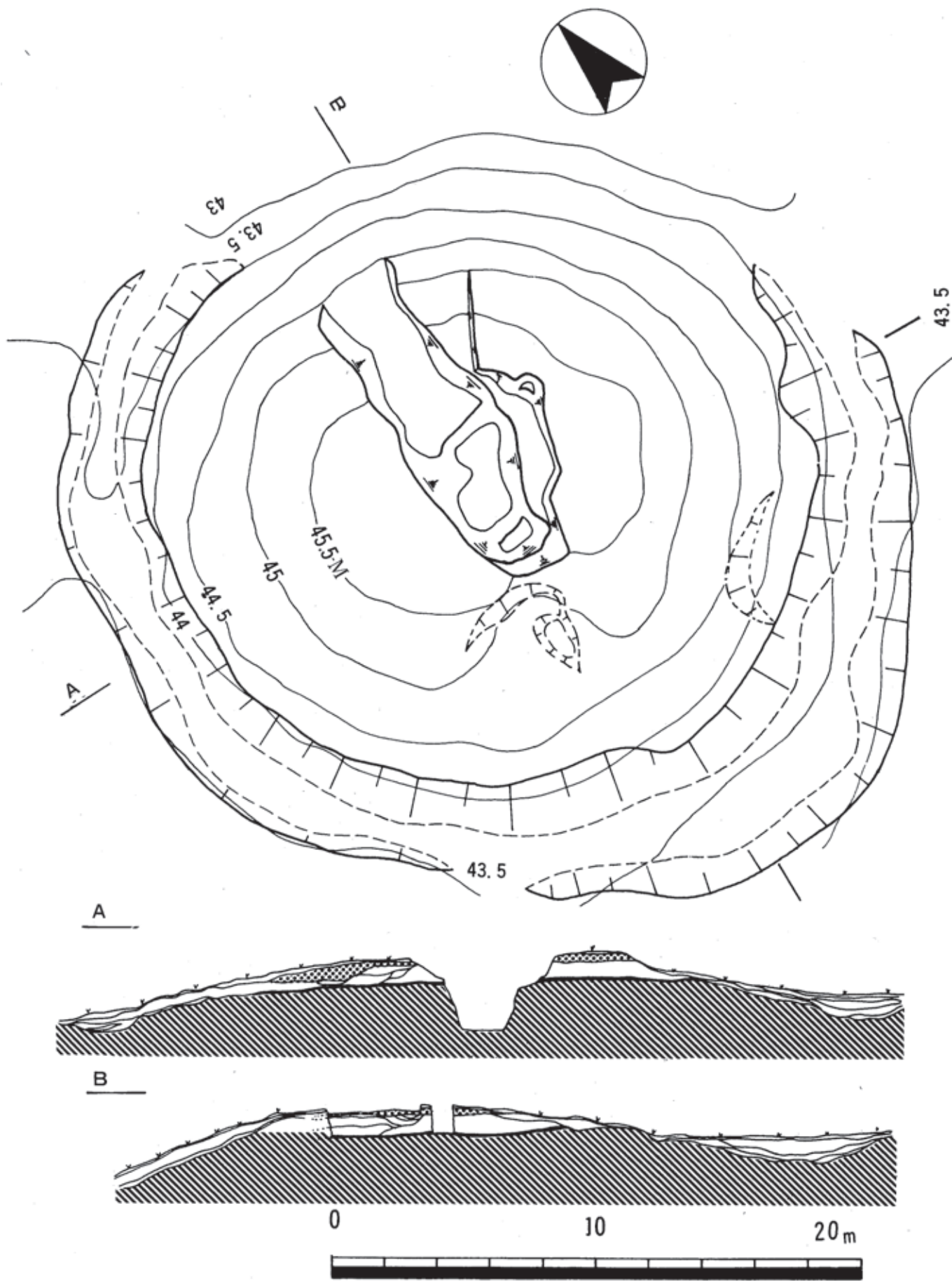
1・2 口径37cm、円筒埴輪の口縁部で端部が短かく外反し、小さな面をつくるのが特徴である。外面には細かなタテ刷毛の後、下端部にヨコ刷毛がみられる。内面はナデのみで刷毛目・輪積痕跡は認め



第7图 西高山1号墳出土遺物実測図 (1:4) 埴輪



第8图 西高山1号墳填丘実測図 (1:200)



第9図 発掘調査後の西高山1号墳墳丘測量図, 墳丘断面図 (1:200)

られない。胎土には砂粒を含んで黄褐色を呈している。2には大きな黒斑がある。器厚8mm。

3 前者に較べ口径がやや小さい円筒埴輪の口縁部である。表面は剥落したのか、刷毛目は認められず、内面には細かなヨコ刷毛が施される。胎土は砂粒を含まない緻密な粘土を使用し明茶褐色。

4 推定径28cmの円筒埴輪の胴部で、中央に大きな円孔がある。台形状の大きなタガを有し、上段ではヨコ刷毛、下段では、1次調整はタテ刷毛、2次調整にヨコ刷毛を施す。このヨコ刷毛は、工具を停止させながら進む手法で、その工具の中は、約4.5cmである。胎土は砂粒を含み、器厚は7～8mmと厚い。黄褐色で一部に黒斑がある。

5・6 埴輪の基底部で、器厚は1.2cmと厚く端部の内面は指で押えている。いずれも1次調整にタテ刷毛、2次調整にヨコ刷毛を施すが、なかにはタテ、ヨコ不規則に細かく調整しているものもある。5の端部はわずかな範囲をヨコナデしている。

7 口径45cmの朝顔形埴輪で、口縁端部の外側に稜をつくる。内外面とも荒い刷毛目が施されている。胎土は緻密で黄褐色。

8 家形埴輪の軒先部分で、軒先は薄い巾2.5cmの粘土帯をはりつけ、刻みをつけることで表現する。胎土には砂粒を含み赤褐色。

9・10 器厚8mmの板状のものに、細い沈線を施しており、緻密な粘土で明褐色。9は壁にあたるものか。

11 両側に破風板をもつ非常に大形の家形埴輪の屋根部分である。屋根には、巾0.7cmの粘土帯を張りつけ押し縁を表現する。左側のものは、外反する特徴から破風板の一部にあたるものと考えられ、個々に作られ接合されていたものが、はがれたものと思われる。屋根の表面は黒褐色、内面は黄褐色で胎土に砂粒を含む。破風板も胎土に砂粒を含み、赤褐色を呈している。両者は非常に近いところから出土している。

2. 須恵器・山茶碗（第10図）

甕(1) ゆるやかに外傾する口径36cmの大形甕の口縁部で、口縁端部は丸くおさめ、外側はヨコナデに

よりするどい稜をなしている。文様の構成は二本一對のヨコ沈線と、タテに細かな沈線を重ねることによりおこなう。内外面とも黒灰色で黒びかりし焼成は硬い。

山茶碗(2・5) 口径が15～16cm、高さ5.5cm、体部にやや丸味が残し、口縁端部がわずかに外反する。高台には、灰釉陶器を彷彿とさせるものがあり、山茶碗でも古く位置づけられるものである。いずれも底部に糸切痕が残っている。

(3) 結 語

西高山1号埴は、昭和初期に地元の青年等により調査され、漢式鏡・玉類・直刀等が出土し、近くの学校に保管されていたと言われているが、その後行方不明となっている。造成事業に伴う今回の調査において、主体部が存在したと思われる埴丘中央部は大きく掘りくぼめられていることが判明し、残念ながら、内部構造を究明するに至らなかった。

そこで、1号埴の位置、周溝から出土した円筒埴輪等から、当古埴の性格について検討してみたい。

西高山1号埴は、南西部の細長い台地の最西端部に位置する径30m、高さ1.5mの円墳で、ここから北へ500mのところには46基からなり鈴鹿市南部では最大規模を誇る大野古埴群が存在する。つまり1号埴は大野古埴群を見下ろす格好で位置しているのである。古埴群は未だ調査されたことはなく、詳しい築造年代は明らかでないが、地方での群集埴の発達と、周辺集落の盛時を考え合わせ、6世紀前後の時期が考えられ、台地上に位置する1号埴の立地から古埴群に先行する5世紀代の古埴と想定できる。

1号埴はこの周辺の円墳の規模と比較した場合、茶臼山1号埴(径54m、高さ8m)よりもかなり小さく、大野古埴群のなかにも30m前後の円墳は数基認められ、目立って大きいものではない。

もう一つ時期判定の手掛かりとなるものに周溝から出土した円筒埴輪がある。円筒埴輪は黒斑を有し、口縁端部が短かく外反し、器表に細かなハケ目を施すのが特徴である。この種の埴輪は鈴鹿市内からは未だ出土例は知られておらず、県内に類例を求めてみると、四日市八幡塚古塚⁽¹⁾から、口縁端部のつ

くりが若干異なるものの、黒斑の埴輪が出土している、当古墳は、割竹形木棺、粘土槨主体部等の内部構造と出土遺物などから5世紀中頃の築造時期が考えられている。おそらく、西高山1号墳もこれと前後する、首長層の墳墓と考えて間違いなさそうである。

それでは、西高山1号墳は、この周辺でどのように位置づけられるのだろうか。東の低い台地では、この地域を最初に統率した首長の墳墓と考えられ、4世紀代に位置づけられている赤郷塚古墳を筆頭に、経塚古墳→茶臼山1号墳という系譜が想定され⁽²⁾、こうしたなかで、周辺古代集落の支配組織・社会構造が理解されてきた。これに対して、南部の台地、大野古墳群を中心とした西の地域は未調査部分が多く、周辺集落と支配者層との関係、東の前期古墳との関係など不明な点が多かった。しかし、西高山1号墳を始め、台地上の古墳群の調査により、少なくとも、東の在地勢力に対し、この地域にも集団を統率した首長層がいたことが証明され、1号墳の被葬者はま

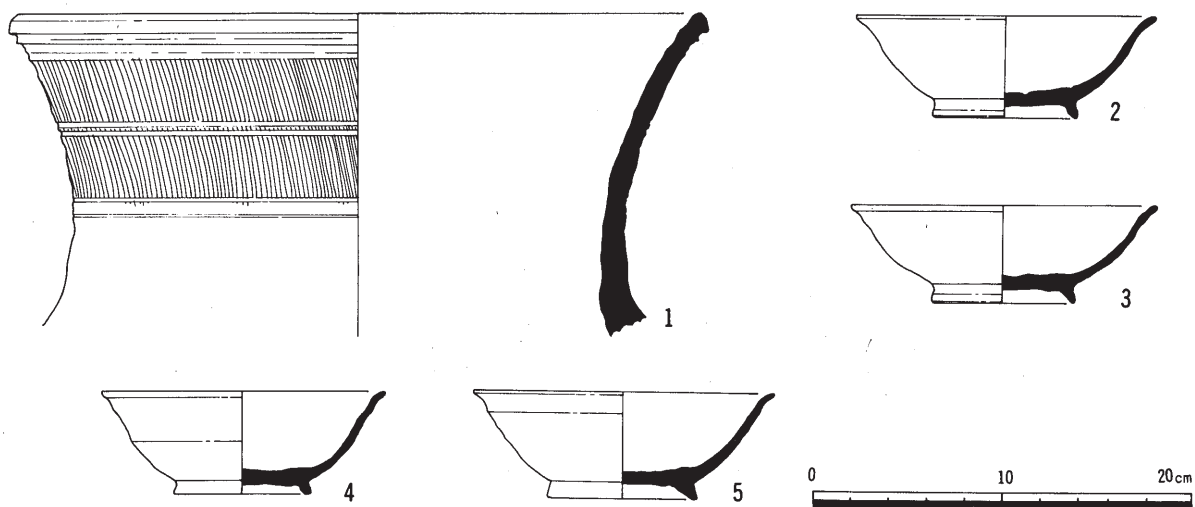
さにその集団の初現的な首長であった可能性が高いのである。

その後、東部では帆立貝式の経塚古墳、市内第2の規模を誇る大形円墳である茶臼山1号墳が、西では、全長25.5mの前方後円墳である西高山2号墳が現われるように、いずれの地域も強力な権力を有した首長が出現する。更に、茶臼山古墳群、大野古墳群にみるがごとく、群集墳の発達をうながした両地域の社会構造は非常に良く似ているように思え、今後、当古墳から3km東に位置する赤郷塚古墳、経塚古墳等の前期古墳との関係が究明されることにより一層この地域の政治状況が明らかにされることだろう。

註1. 小玉道明「八幡塚古墳発掘調査報告」

四日市市教育委員会 1975。

2. 真田幸成「経塚古墳」『国鉄伊勢線関係遺跡調査報告』鈴鹿市教育委員会 1967。



第10図 西高山1号墳出土遺物実測図 (1:4) 須恵器、山茶碗

3. 西高山2号墳

(1) 位置、外形 (第11図)

西高山1号墳から東へ500mの同じ台地上に位置する。分布調査時、数点の円筒埴輪片を採集したことが、発掘調査のきっかけとなった。古墳の大半は破壊され、盛土が露出していることから他と土質が異なり、わずかに高まりは認められるものの、付近の畑の高さとは余り変わらず、むしろ埴輪片の確認がなかったら、古墳としての断定は困難であったかも知れない。

立地としては、西高山D遺跡とは逆に、台地南側のほぼ中央に位置している。台地の直ぐ南は、巾15～20m、深さ10～11mの樹支状の谷に面しており、当時の現況とすれば、北側よりむしろ南西に眺望が開けていたのかも知れない。

発掘の手順として、当初20m前後の円墳であろうと想定し、古墳の中心部と考えられるところから十字にトレンチを設定し、南東区(I区)から、左廻わりにII(北東)、III(北西)、IV(南西)区に地区割をし、古墳の規模、形状の確認につとめた。I、II区において、円形に巡る周溝が確認され、ほぼ円墳であろうと考えられたが、III区から、前方部と西へ延びる埴輪列が確認され、IV区においても対称となる位置から、埴輪列と前方部が見つかり、全長約25.5m、周溝を含めると約35.5mの主軸をほぼ東西にとる前方後円墳であることが判明した。周溝は古墳の全周をとりまいて、後円部の溝が深いなかでも特に南側の周溝が巾5m、深さ1.2mと最も深く、西へ行くにつれて浅くなり、前方部西端の溝は巾4.6m、深さ0.4mと非常に浅い。周溝の最下層には、巾30～40cmの黒色土層があり、この層の近くからは円筒埴輪片が多数検出された。後円部から前方部にいたるIII・IV区のくびれ部を中心に、基底部のみを残した円筒埴輪が約40点ほど見ついている。円筒埴輪片の出土点数もこの地区が最も多く、埴輪の樹立密度の高かったことを物語っている。形象埴輪の出土は、IV区の溝に限られ、埴輪列もIV区がIII区に較べ密であることなどから、南側を意識しての埴輪の樹立がおこなわれていた可能性もある。埴輪片の他に、周溝から須恵器が出土しているが、その場所も限られている。

有蓋高杯、甕がI区の溝より、杯・杯蓋はIII区のくびれ部で炭化物が混じった黒色土中から完形品で出土した。壺はそのくびれ部の溝、須恵質の紡錘車はIV区の溝から形象埴輪片とともに出土している。

土層の断面観察から、粘質の茶褐色の地山面直上に1号墳でも認められた緑灰色(旧地表)が巾20cmで薄く認められ、更にその上には、青灰色(砂質性)、茶褐色(粘質)の土層がブロック状に認められ、結局この層が盛土で、大半が破壊され約30cmしか残っていなかった。この盛土のなかから焼土、炭化物がわずかに見ついている。前方部の西端は、削平されたことも十分考えられ旧地表、盛土等は認められない。また前方部の盛土は、溝の掘削土のみでおこなわれたとすれば、築造当初も余り高くはなかったと考えられる。前方部のくびれ部の浅いところから供献されたと考えられる須恵器の杯がほぼ完全な形で数個体検出されていることなどからもうなづけられよう。

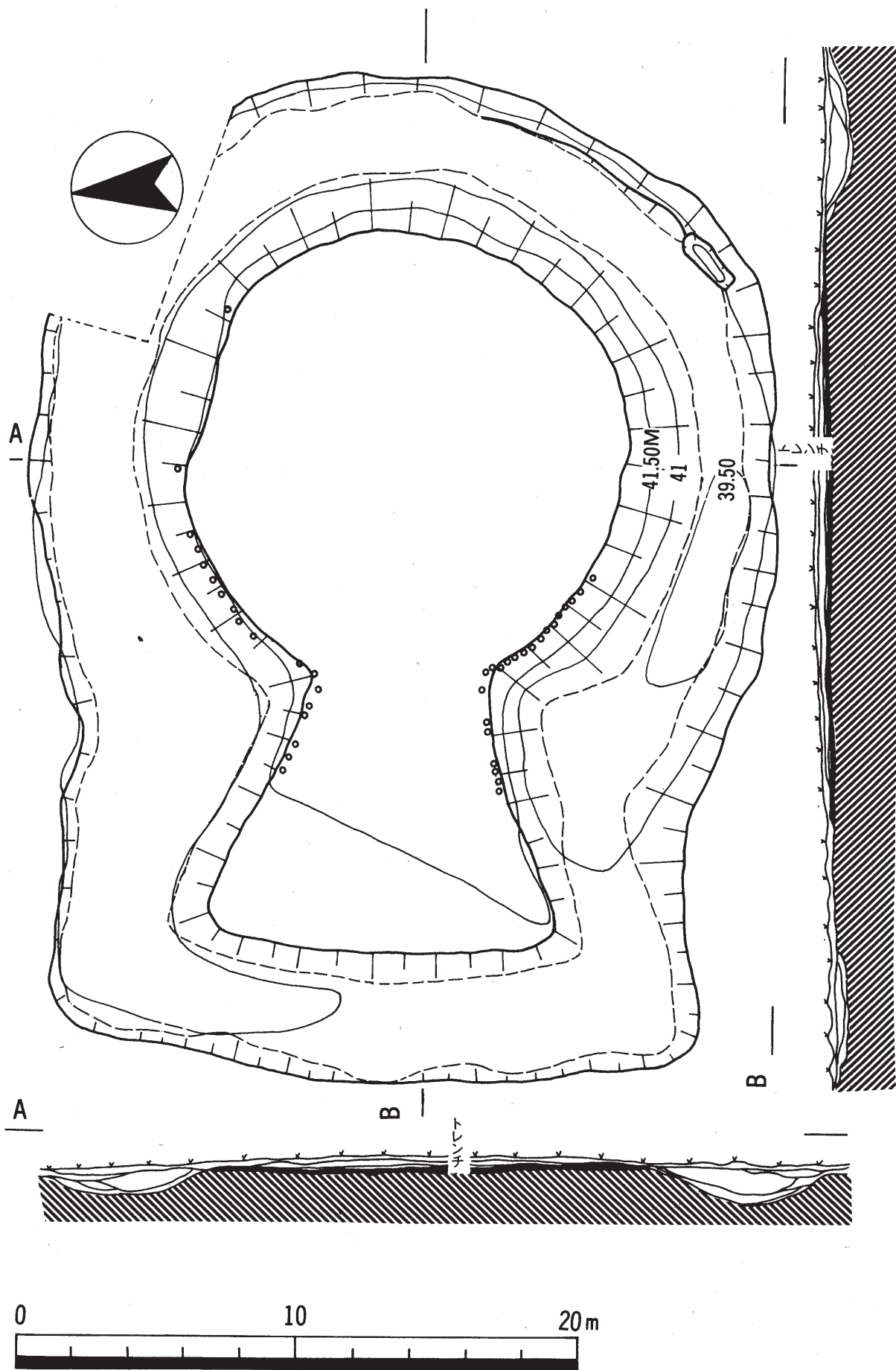
(2) 出土遺物 (第12～14図)

1. 埴輪 (第12・13図)

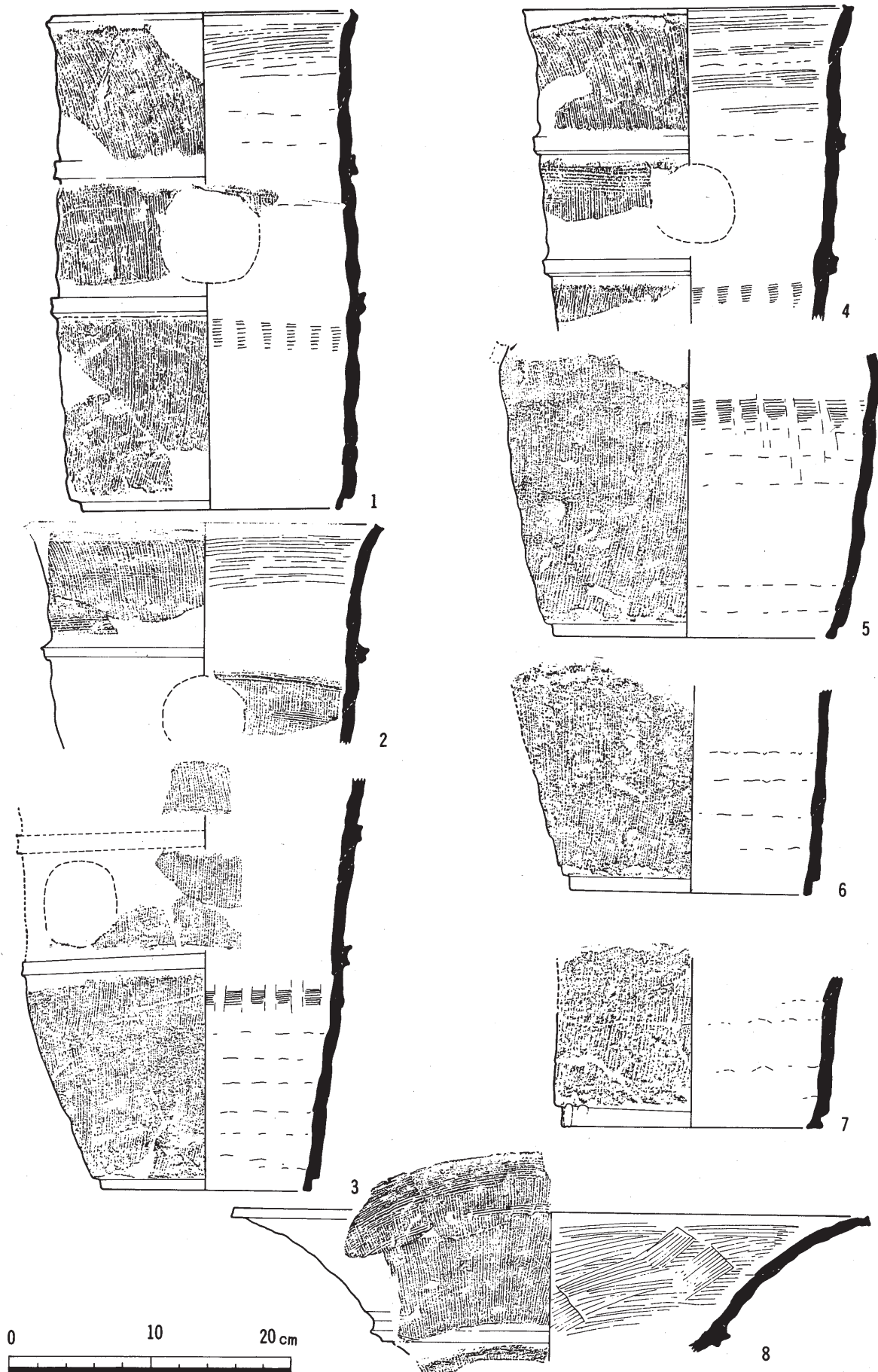
(1) 円筒埴輪 (1～8)

周溝内、くびれ部から円筒埴輪片が多数出土したが、口縁部から基底部まで接合するものは少ない。個々の破片から判断すると、円筒埴輪は余り高くはなく、タガを二本めぐらした3段-基底部(1段)、中央部(2段)、口縁部(3段)-のものが一般的と考えられる。器壁は薄く仕上げられ、内外面に輪積痕跡が横すじとして良く残り、刷毛目調整は、1次調整のタテ刷毛だけで終了するもの、2次調整にヨコ刷毛を施すもの二種がある。焼成も硬質で、所謂須恵質と呼ばれるものと、軟質の普通円筒がある。基底部には、きまって「凹痕」がついており、2号墳出土の円筒埴輪製作技法の一つの特徴ともなっている。その他、円筒埴輪の口縁部に朱の塗られた破片も数点出土している。

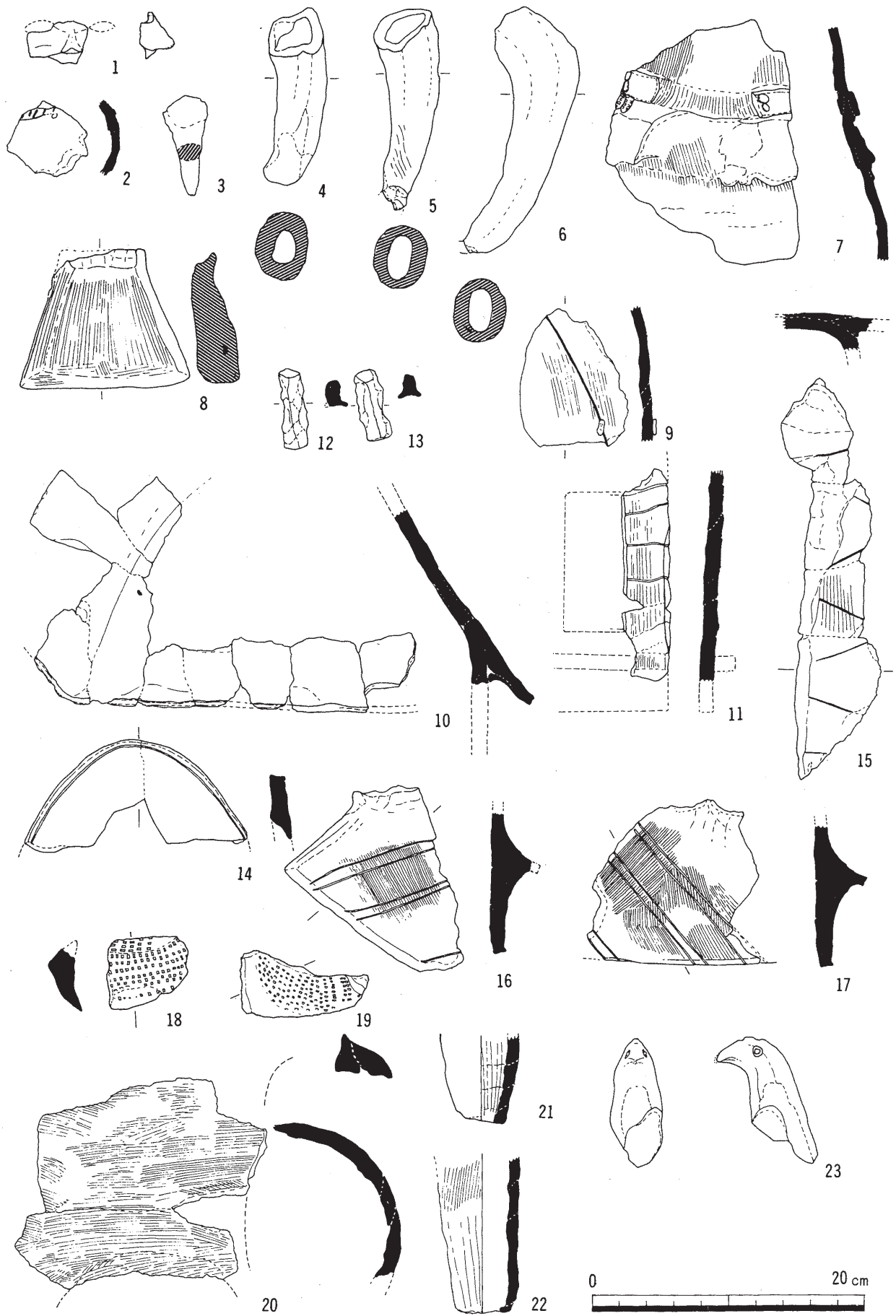
1. 口縁部から基底部まで接合した唯一の円筒埴輪で二段目に径約8cmの円孔をあける。器厚が7mmと薄く、内外面に輪積の痕跡が良く残り、口縁部の径と基底部の径が余り変わらない小形の埴輪である。口縁端部は、内側に鋭く引き出され尖りぎみで、基



第 11 图 西高山 2 号墳填丘測量図、墳丘断面図 (1 : 200)



第 12 図 西高山 2 号墳出土遺物実測図 (1:4) 円筒埴輪



第 12 图 西高山 2 号墳出土遺物実測図 (1:4) 形象埴輪

底部に「凹痕」が残る。器表には、下から上へのタテ刷毛、内面には口縁部と一段のタガ下付近にヨコ刷毛を2cmの中で施す。茶褐色で、焼成は硬質である。口径21.5cm、器高3.5cm。

2. 口径25.2cmで、二段目に径6cmの円孔を穿つ。口縁部のつくり、内面の刷毛目調整は1と同様であるが、口縁部と二段目には、タテ刷毛のあとヨコ刷毛を施す。青灰色で焼成は堅い。

3. 器形がややいびつで、二段目のタガ間は8cmと狭く、器表はタテ刷毛のみである。青灰色で非常に硬いところと、灰白色で焼成の甘い部分がある。

4. 二段目に径約6cmの円孔を有し、タテ刷毛の後、ヨコ刷毛を施す。全体に赤褐色をなし、焼成は硬質。口径23cm。

5. 基底部の径と長さが、他の円筒埴輪より大きいもので、内面の一段タガ付近につけられるタテ刷毛は他の円筒埴輪と同じ特徴で、部分的にナデにより消されている。焼成は軟らかく、明茶褐色。

6・7. 胎土・色調は5と非常に良く似ており、7の器表には、巾3cmの粘土ひもの痕がのこり、埴輪の最下段はこのひも3本で形づくっている。基底部の「凹痕」には、紐状の庄痕が巾6～7cmにわたって認められる。

8. 大きく外反する朝顔形埴輪の口縁部で口縁端部のつくりは、円筒埴輪と変わらない。器表の上位には、タテ刷毛の後、ヨコ刷毛を施し、内面は、荒い刷毛目で試上げられている。黄褐色で焼成は非常に堅い。口径約44cm。

(2) 形象埴輪 (1 - 23)

形象埴輪の中には、人物、家、動物、楯形埴輪がある外、器形の不明なものも多数ある。

○ 人物埴輪 (1 - 9)

1. 人物埴輪の顔の部分で、左側には、ヘラで切りぬいた目の一部と、中央部には、粘土を盛りあげた小さな鼻がつく。茶褐色。

2. 小さく刻みをつけた細長い文様は、入れ墨とも考えられるが、顔のどの部分にあたるかは不明である。

3. みずらと考えられるもので、上端は薄く、下端は丸くつくられている。長さ7.2cm。

4 - 6. 人物埴輪の腕の部分で、太さは3～

4cm、指先は薄くつまみあげるだけの表現で終る。6は肩から指先まで約20cmを計る。

7. 人物埴輪の胴部で、刷毛目を施した胴部中央に巾1.5cmの粘土帯をつけ、更にその上に円形の浮文をつけ金具を表現する。左端にも、小さな飾りをつける。帯の下には、上衣の裾が剥落した痕が認められる。

8. 薄い粘土板を折り曲げてつくったもので、鬚とも考えられる。表面には、刷毛目を施し、上端には剥離した痕跡がある。12cm×10cm、厚み2.8cm。黄褐色。

9. 左袖に合わせた上着で、紐結びは小さな粘土玉で表現している。器表は細かい刷毛目を施している。

○ 家形埴輪 (10 - 14)

10. 四注造りの屋根で、ゆるやかに内傾する角度から、図面正面は妻側と考えられる。屋根と軒先は別々につくられ、内側からは、粘土玉により軒先の固定を図っている。屋根には装飾はなく、ナデだけで終る。黄褐色。

11. 高さ10cmの入口を平側の左寄りにつけた壁部分で、タテに荒い刷毛目、ヨコに4～5本の沈線を施す。下端部にタガの剥落した痕がある。黄褐色。

12・13. 径が5cm×1.5cmの小さな棒状のもので、器表は軽くつまんで形を整えている。堅魚木と考えられ、三点出土している。

14. 楕円形の板状のもので縁に細い沈線が巡る。器表は丁寧にナデられ、裏は不調整である。家の破風板とも馬の鞍とも考えられる。器厚1.2cm。他に縁が肥厚するものもある。

○ 楯形埴輪 (15 - 17)

14. 楯形埴輪の端部で突起と楯の面は別々につくられ、接合面に粘土を塗りつけ接着する。表には沈線により鋸歯文が描かれ、剥落が著しいがわずかに刷毛目もみられる。

16・17. 三角状の粘土板に、細かな刷毛目を施した上に二本単位の沈線をつけたもので、2個出土している。裏側は、いずれも突起がつき、丁寧にナデられ、上端に円筒状のものに接着していた痕がみられる。

○ 動物埴輪 (20 - 23)

20. 動物の背中から腹部にかけてのところで、背は、タテに粘土ひも、腹部はヨコに細長い粘土ひもを積み重ね形成されている。表には細かな刷毛目が全体に施され、下端部の歪みは脚部とついていくものと思われる。

21・22. 径5.4cmの円筒形のもので、動物の足と考えられ、上部には刷毛目を施す。21には中1.8cmの輪積痕がよく残る。

23. 小さいとさかをつけたニワトリで、くちばし、目はヘラ先で表現している。腹部は中空となっている。黄褐色で剥落が著しい。

○ その他

18・19. 細かい方形の刺突をつけた台形状のもので、馬の鞍によく見る文様である。19の上端には丸いものから剥れた痕がある。

2. 須恵器 (第14図)

杯(6-8) 内傾ぎみの長い立ちあがりとヘラ削りされた底部からなる小形の杯である。胎土に砂礫を含み、ヘラ削りはすべて左まわりである。6・7は、径9.4cm~9.5cm、高さ5.2cmで丸みをもった底部のヘラ削りは広い範囲にわたり、口縁端部に小さな段をつくる。8は6・7よりも蓋受けは水平で、

底部は平坦である。底部の焼成は甘く、灰白色である。

蓋(1-5) ヘラ削りされた天井部と長い口縁部からなる蓋A(1-5)つまみがつく蓋B(8-9)がある。

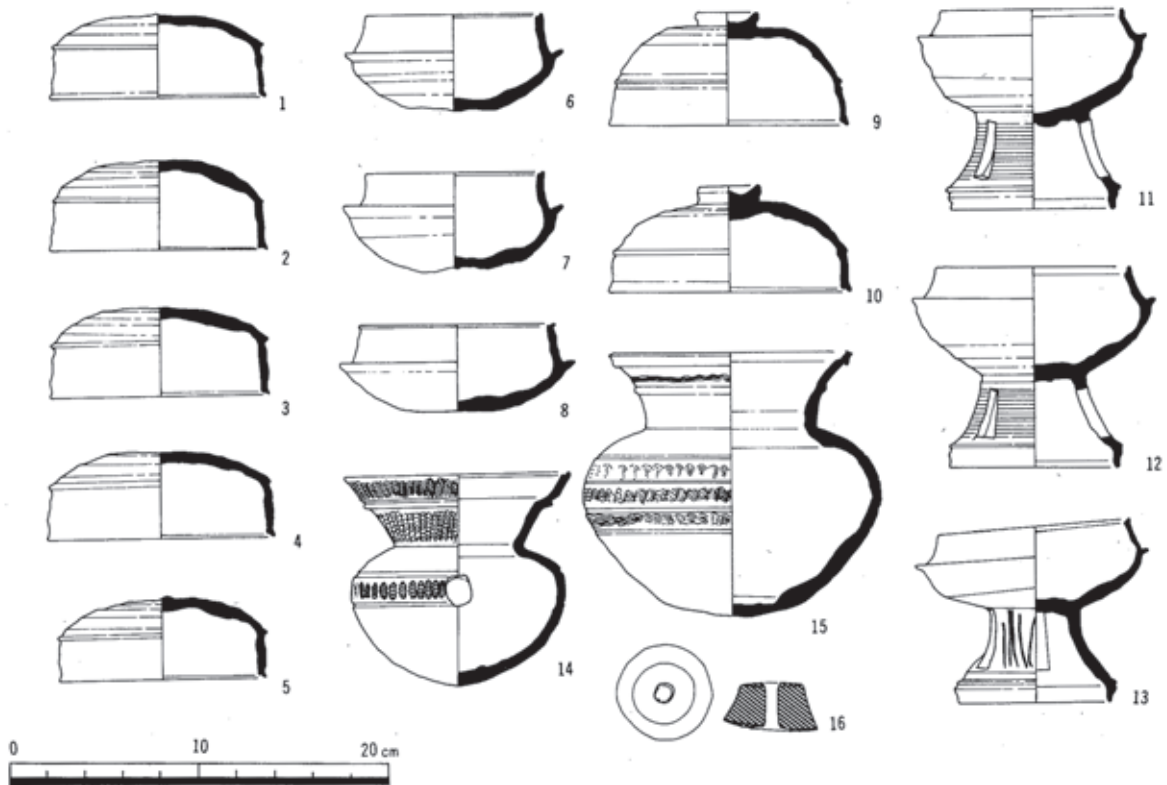
蓋Aは径12~12.5cm、高さ4.6~4.7cmの蓋(1-4)とやや小さい径10.5cm、高さ4.4cmの5に分けられる。天井部は中広くヘラ削りされ、平担ぎみで、口縁部との境は稜をなす。口縁端部は、杯と同様に小さな段をつくる。胎土に砂礫を含むものが多く、ヘラ削りはすべて左まわりである。

蓋Bは、天井部の中央に中凹のつまみがつく有蓋高杯の蓋である。ヘラ削りの範囲は、つまみの口縁部で、口径12.8cm、高さ6.4cmと大きい。

高杯(11-13) 杯に短い脚をつけたもので、杯部の形態は、杯身と同様であるがヘラ削りの範囲は狭い。脚部には、カキ目調整を施し、長方形の透しを三方に持つのが一般的である。

13は、口縁部が短かく、薄く仕上げられ、杯部が傾むいている。脚部には、たてに5本の沈線による窯印がある。

はそう(14) 口径12cmの大きく開く口頸部は、上位で一



第14図 西高山2号墳出土遺物実測図 (1:4) 須恵器

たん段をなし外上方へのび、外面には櫛描波状文をめぐらす。体部の上位には、二条の沈線と烈点文をめぐらした文様帯があり、その上には、円孔を穿っている。体部の下端は、平滑化されている。口頸部の内面、肩のところには、茶褐色の自然釉が付着している。焼成が堅く青灰色。

壺(15) 外傾する太い口頸部と、肩の張った体部からなる。口頸部の外面には、小さな稜とくずれた櫛描文、体部には、四本の沈線と櫛描文が施されるが、茶褐色、緑色の自然釉付着のため文様は不鮮明である。灰褐色。

紡錘車(16) 径5.2cm、高さ2.2cmの須恵質の紡錘車で、中央に巾7mmの円孔を穿つ。外面は小さく面取され、底部は少し磨滅している。

(3) 結語

西高山2号墳は、周囲に埴輪が巡る、全長25.5m周溝部分を含めると36mの古墳時代後期に属する前方後円墳であることが判明した。鈴鹿川流域では、愛宕山古墳(66m)、王塚古墳(63m)、寺田山古墳(70m)をはじめとして10基程前方後円墳が確認されているものの、中の川流域は未調査部分も多く、北岸(御園)に1基、南岸では、歴史的環境の中でも触れたとおり、経塚古墳、わずかに痕跡を残す赤郷2号墳の外、西の徳居の1基を含めて4基が知られ、西高山2号墳を含めると5基となるが、北岸の1基を除いた他は、土取、調査後の消滅により、完全に埴形を保っているものは無い。

2号墳の埴丘の大半は、開墾、耕作により破壊されており、内部構造等は不明であるが、周溝内の出土遺物は豊富で、築造時期は須恵器の形式から5世紀末頃に比定され、同じ5世紀代の西高山1号墳との関連が予想されるところである。しかし両古墳は互に台地の西と東に相対立するように位置し、また2号墳が台地の南に偏よっているところから、同じ経済基盤を有した同じグループに属していたかは少し検討をする必要がある。仮にこの南の台地帯における支配組織を西高山1号墳(円墳、漢式鏡出土)→西高山2号墳(前方後円墳)の系譜に求めると、時期的なことに問題はあつたものの、東の低

い台地における赤郷塚(円墳、三角縁神獸鏡出土)→経塚古墳(前方後円墳)の系譜にみる前方後円墳築造に至る政治状況は良く似ており、前方後円墳の被葬者は、旧首長に増して、強力な権力を有していた地方豪族であつたに違いない。また一段と高い台地上で前方後円と言う埴丘形式を採用していることは大いに注目されるところで、この地域でいかなる支配勢力を誇っていたのか、興味ある問題である。こうした点について、古墳から出土した須恵器は、この地方における初現的な形式であること、また窯業生産地の発展していく歴史環境のなかで、推測の域を出ないが、被葬者を、窯業生産の開始と密接な関連があつた人物、例えば、須恵工人集団を積極的に自分の支配組織に組み入れた首長層を想定できないだろうか。「須恵器工人の受入れは、大和政権の関与のもとに、おこなわれた」⁽¹⁾とすれば、被葬者は、大和政権と深いかかわりのあつた首長であり、こうした反映として、前方後円墳を築造することも可能であつたと考えられるわけである。ちなみに、2号墳より南東へ1kmのところではほぼ同時期の古窯址(河芸町)が確認されている。

次に、円筒埴輪の基底部にみられる「凹痕」の特徴について触れてみたい。この特徴ある埴輪の出土例は、鈴鹿市内において、富士山10号墳⁽²⁾20.5m(前方後円墳)、保子里14号墳⁽³⁾10m(円墳、円筒埴輪棺)、岸岡山25号墳⁽⁴⁾(形状不明)、西ノ野5号墳30.5m⁽⁵⁾(前方後円墳)をはじめ、亀山市からは、城山古墳40m⁽⁶⁾(前方後円墳)、木ノ下古墳30m⁽⁷⁾(前方後円墳)、井尻古墳53m⁽⁸⁾(前方後円墳)が知られており、古墳の外、四日市市の大谷古窯址⁽⁹⁾からも出土している。こうした点から、鈴鹿川流域を中心とした北伊勢だけに発達した特徴的な埴輪と考えていたが、すでに西では、大阪府の泉南地方、東は静岡県遠江地方の数基の古墳から出土しており、早くから注目されていたことがわかった。凹痕は、基底部を0.5～1cm巾で周囲を巡っている。この痕跡について川西宏幸氏は底部の調整技法と把え「自重によって内側にはみ出していた粘土を起こし、正立の状態に戻す。その結果、最初に底面であつたところが外面に凹帯となって残る」⁽¹²⁾と説明されている。しかし、この凹痕を観察すると、巾5～7cmの範囲で、紐状の圧痕が認められるので、

ある。こうした点から、この凹痕は、基底部の径を決める際一例として、竹などを薄く割ったもので輪型をつくり、内側から粘土紐を強く押したあとにできた痕で、そこに観察される紐状の痕は、輪型をつくる際に結んだ紐の痕と考えたのである。この紐状の痕は、円筒埴輪の基底部の一箇所にしか付いていない。例えば、長い紐状の上で作業をしたとすれば、対象となるもう一箇所に付いていなくてはならないが、それは全く見当たらない。また、この紐状の痕は、当古墳だけではなく他地域の凹痕をもっている埴輪にも見受けられるのである。おそらく、これは偶然についたものではなく、製作工程のなかでついたものであり、底部の「調整技法」と言うよりも、「製作技法」の一つと考えたい。

この種の埴輪を持つ古墳は、北伊勢における初期形式に近い須恵器を伴っていることが多く、この地方の須恵器生産の開始と、埴輪製作との間に非常に密接な関連があったことが窺われる。特徴ある埴輪は須恵器生産の開始と併行して同じ窯窯で焼かれた最初の形式の一つにあたるのではなかろうか。須恵器生産以前の埴輪には、八幡塚古墳、西高山1号墳にみられた黒斑の円筒埴輪が位置づけられるものと

思われる。また、30m 前後の前方後円墳にこの埴輪が多いことも注目され、この埴輪を追求することにより、北伊勢における須恵器生産の開始と埴輪製作の問題、須恵器工人集団と地域の首長層の関係、そして、この地方の政治状況も解明されていくものと考えられる。

- 註 (1) 横山浩一「土器と生産」『日本の考古学』V、河出書房 1972。
(2) 中森成行「富士山 10 号墳調査概要」鈴鹿市教育委員会 1978。
(3) 神戸史談第 4 号 神戸高等学校郷土史クラブ 1964。
(4) 神戸高校所蔵。
(5) 藤原秀樹氏教示。
(6) 三重県教育委員会文化課発掘。
(7) 三重大学歴史学研究会古代史部会「亀山市木ノ下古墳の発掘調査概要」考古学雑誌第 6 7 巻第 3 号 1982。
(8) 藤原秀樹氏教示。
(9) 小玉道明「小杉大谷古窯址」四日市市埋蔵文化財調査報告 9、四日市市教育委員会 1974。
(10) (2) に同じ。
(11) 川西宏幸「円筒埴輪総論」考古学雑誌第 60 巻第 2 号 1978。
(12) (11) に同じ。

3. 西高山 3 号墳

(1) 位置、外形 (第 15 図)

西高山 2 号墳から、東へ 20m と離れていないところに位置する。2 号墳と同様に盛土の大半は削りとられ、発掘当初は若干の高まりが認められたものの、遺物も散布してあらず、古墳かどうか疑がわしかった。発掘の手順は、2 号墳と同様に中央部と考えられるところから十字のトレンチと、地区割を設定し南東隅から発掘調査を実施した。ここから、周溝と考えられる落ち込みを検出したことから、古墳であろうと断定し、全体の規模、形状の確認につとめた。その結果、ほぼ 12 × 12m の方墳であることが判明したが、周溝は、明確に方形に巡るものでなく、また深さ、巾とも一定するものでない。周溝の深いところは、北東区で 40 ～ 45cm、他は浅く、30cm 程である。周溝の最下層には、黒色土層が 10cm の中で認められた。埴輪片は西側、前方後円墳よりで 2 ～ 3 片出土したにとどまり、3 号墳に埴輪が巡っていた可能性は少ないと考えられる。また周溝内から須恵器の杯片が数点出土しているが、時期に巾がみられる。土師器の高杯は、表土除去中に盛土の中から検出されたもので、祭祀に利用されたものではなかろうか。

断面観察から、緑灰色の旧地表上に約 40cm の盛土が残っているのみで、その盛土は、2 号墳と良く似ており、茶褐色と、青灰色の粘土を用いている。古墳の盛土は、溝の掘削土だけによるものとすれば、もともと墳丘は余り高くはなかったものと考えられる。

(2) 出土遺物 (第 16 図)

1. 須 恵 器 (1 - 7)

杯蓋 (1・2) 口径 11.5cm、高さ 3.8cm。非常に口縁部の短い杯蓋で、口縁部と天井部の間には鋭い稜と口唇部の内側に小さな段をもつ。天井部は巾広くへら削りされ重ね焼された痕跡があり黒灰色と青灰色の違いがある。2 は口径 13.5cm、器高 5.2cm。口縁部は短かく、背の丸い杯蓋である。口縁部と天井部の間には、にぶい稜をもち、丸い天井部は、細かくへら削りされる。

器台 (3) 器台の杯部で、口径 21cm、深さ 11.2cm を計り、底部には脚部を欠損した痕が残る。杯部の上位には、2 列の櫛描文、その間に 2 本の細い稜をつくり、その中央に小さな刺突文を飾る。下端部には、平行叩き目文を施す。口縁部が片口状に少し歪む。

有蓋高杯 (4) 口径約 13.6cm の杯に、内湾気味の器壁の薄い脚部が取りつく。脚部の中央に丸い円孔を 3 箇所穿ち、端部は小さく屈曲し外反する。器高 10cm。

壺 (6) 口径の中央部に櫛描文を描き、黄褐色の自然釉が全体に付着する壺の口縁部である。

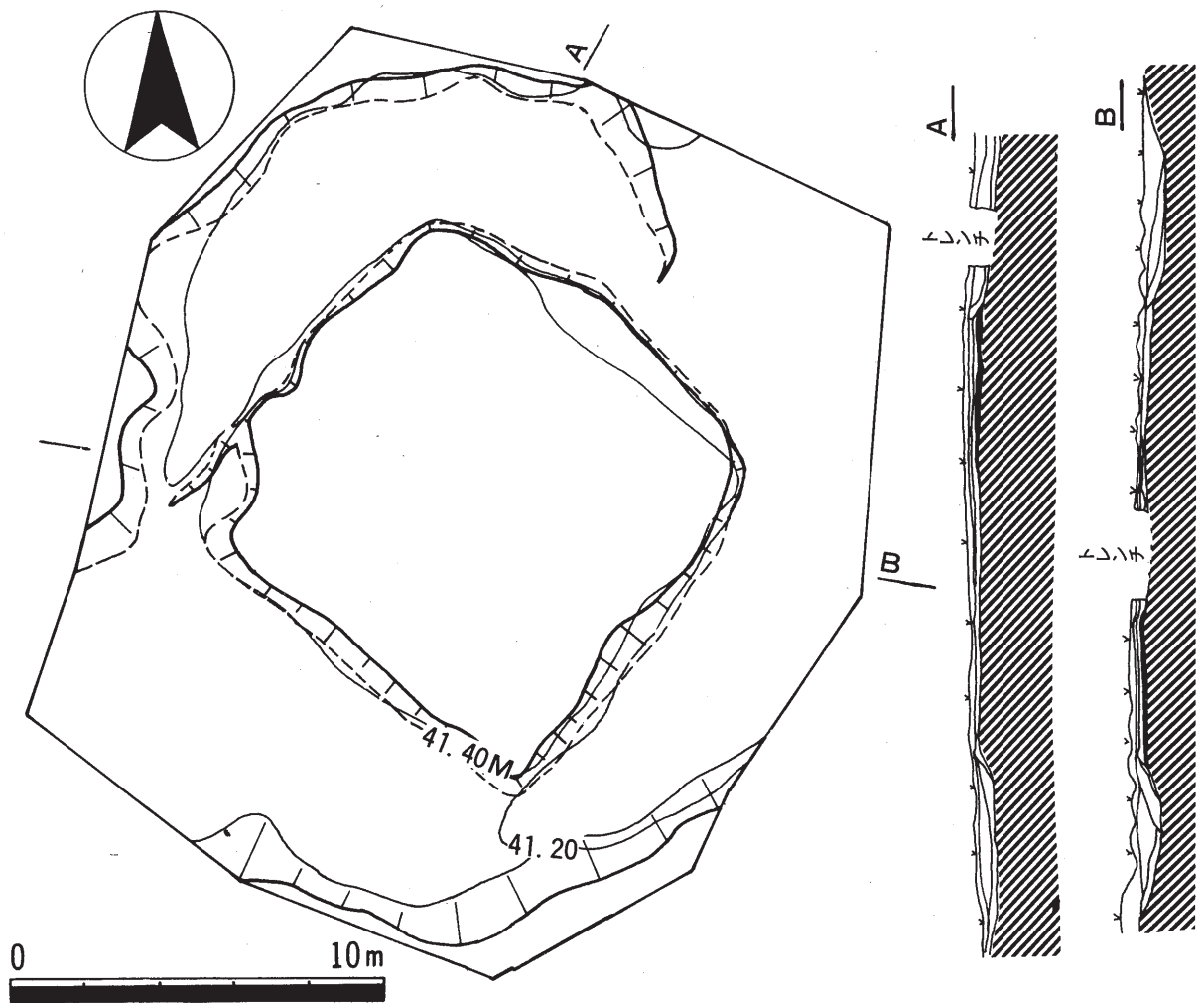
甕 (7) 丸味をもった大きな体部に、短かく外反する口頸部からなる。口頸部は、内弩気味に直立し、外側に稜をつくる。外面には、平行叩き目、内面には同心円状の浅い叩き目を施す。口径 20.4cm、器高 36.4cm で青灰色。他の須恵器よりも若干時期が下がるものと思われる。

2. 土師器

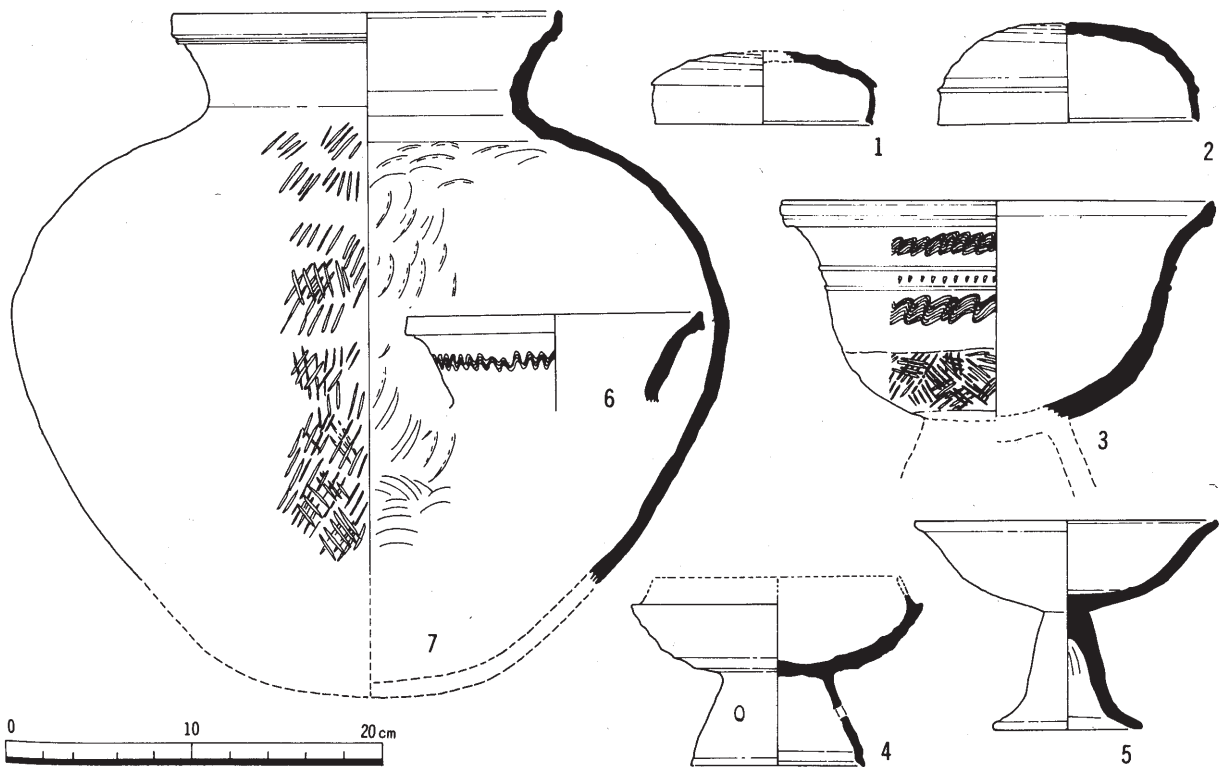
高杯 (5) 口径 cm、深さ 4 cm の浅い杯部と高さ 12 cm の脚部からなる。脚部は端部ちかくで短かく外反するもの。杯部はナデられ平滑化し、赤褐色を呈する。

(3) 結 語

2 号墳と同様に、盛土の大半は削平されているが、12 × 12m の方墳であることが判明した。出土遺物の大半は、表土と周溝内から出土し、須恵器は 6 ～ 7 世紀代と少し巾が認められるが、最も多数を占める杯などの形式から 6 世紀初頭の築造時期が考えられ、2 号墳よりやや後出するものと思われる。



第15图 西高山3号墳墳丘測量図、断面図 (1:200)

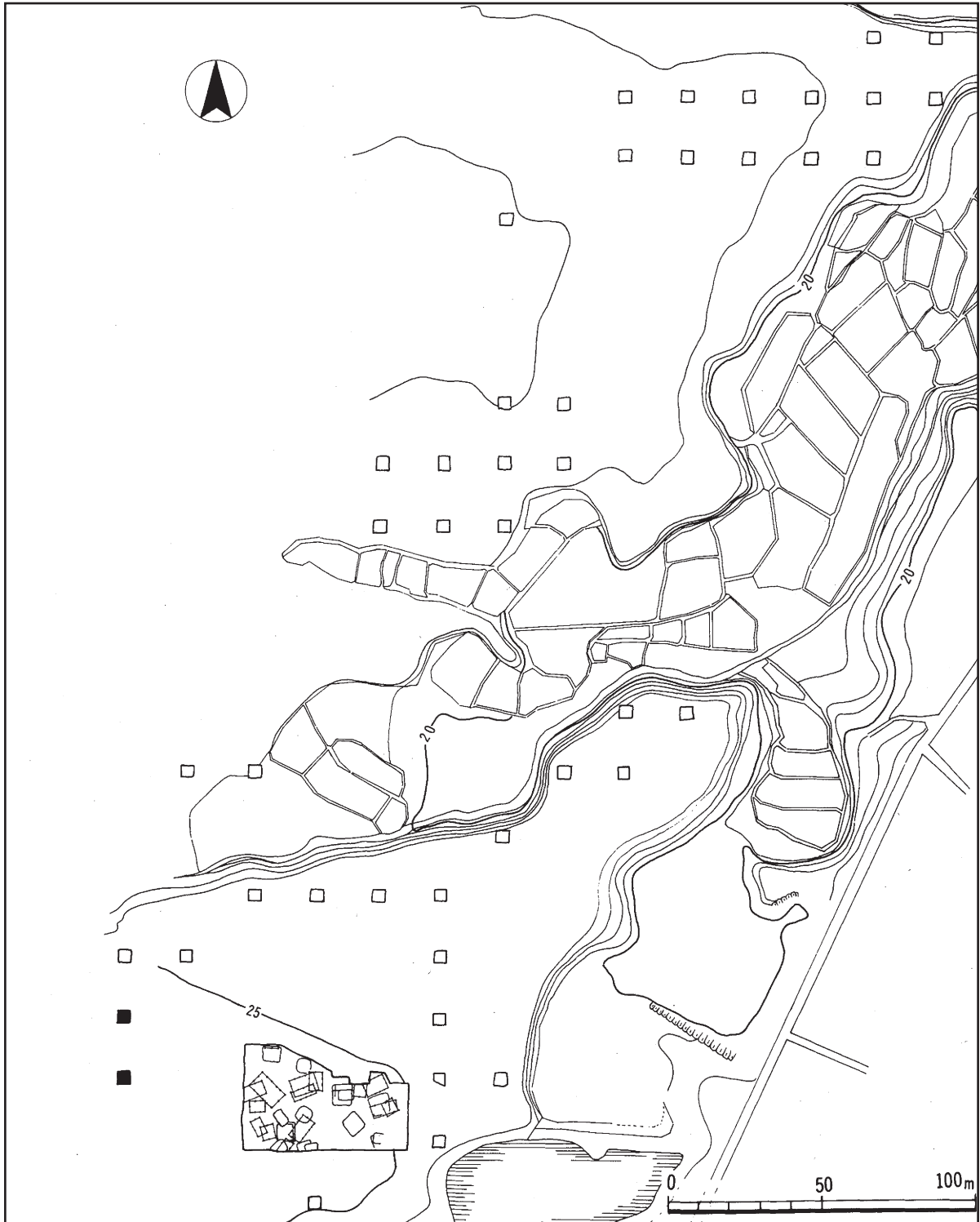


第16图 西高山3号墳出土遺物実測図 (1:4) 須恵器・土師器

第6表 西高山古墳群の規模

号墳	外形	墳丘規模 (m)	内部主体	出土遺物		
				周溝 (墳麓)	外周	その他
1	円墳	径 30 × 30 高さ 1.5	不明 8 × 4.5 m の既掘墳がある。	円筒埴輪 (黒班) 形象埴輪 (家) 山茶碗 須恵器 (甕)		昭和初期に調査され、鏡、玉、刀剣が出土した。 (白子郷土史)
2	前方後円墳	全長 25.5 (35.5) (周溝を含める) 後円部径 16 前方部巾 12.3 前方部長さ 9.5 主軸 N - 82° - W	削平されて 不明	円筒埴輪 形象埴輪 (人物、動物、家、楯) 須恵器 (高杯、壺) 紡錘車	円筒埴輪 須恵器 (杯)	
3	方墳	12 × 12 主軸 N - 44° - E	削平されて 不明	円筒埴輪 須恵器 (杯、壺、器台)		盛土中より土師器 (高杯) が出土する。

V 西川遺跡の調査



■印は遺構・遺物検出箇所

第 17 図 西川遺跡地形図 (1 : 2,000)

1. 位 置

A区の西側に位置するB₁区は、郡山町の南で南西に開折した巾80mの谷を臨む地区で、谷の西側と南側には、低い舌状の台地が発達し、畑と一部山林となっている。試掘調査は谷と未買収地を除いて造成区全域に4m×4mのグリッド45箇所を設定して行った。調査結果は、谷の西側では遺構はほとんどなく、むしろ南側の台地に遺構・遺物が多数認められ、この地域を調査対象地区とし字名をとり西川遺跡と呼称した。西川遺跡はちょうど、巾80mの谷に囲まれた細長い台地の中央部より南に位置しており、谷は上部からのしめ出しにより湧水も豊富で現在でもなお水田が営まれている。西川遺跡より西に広がる低い台地は、水田と畑に利用され、畑には多数の土器片の散布が認められるところから、古代集落の存在が予想される。鈴鹿市南部で最大規模を誇る大野古墳群は、西へ500mの松林の中に存在する。

2. 遺 構

1,200㎡の調査面積から縄文時代の竪穴住居址2棟、古墳時代後期の竪穴住居址19棟、古墳時代以後奈良時代に続くと考えられる掘立柱建物址13棟の外、土壇、溝址が多数検出され、遺構密度の高い遺跡である。調査区は西から東へわずかに傾斜し掘立柱建物址は西へ行くにつれ多くなる傾向を示すのに対し、竪穴住居址は、谷に近くやや低い東側に多く認められる。未買収地の関係から、西側部分の調査は出来なかったが、調査結果から遺構は更に西側へ展開していくものと思われる。

1. 縄文時代の遺構 (第19図)

(1) 竪穴住居址

S B 27 発掘区の中央部で検出された径4.8m×4.8mの円形を呈する竪穴住居址である。床面は外から内側にゆるやかに傾斜し、西側部分を除いて周囲には巾10cm、深さ15cm～20cmの溝が巡り、ところどころに10cm内外め小柱穴が見受けられる。炉址は、

中央よりやや西に寄ったところに巾60cm×70cm、深さ35cmほど掘りくぼめてつくられ、底は真赤に固く焼け、炭化物、焼土が多量に埋まっていた。炉址を中心に径20cm～30cm、深さ35cmの主柱穴は四隅に各2本ずつ認められ、おそらく建替によるものと思われる。また床面の北に巾10cm、深さ15cmの細溝がL字状に残っている。住居址の埋土は、炭化物を含んだ黒褐色をなし、縄文式土器、石器類は床面より少し浮いた状態で多数出土した。

S B 24 S B 23の北側に位置し径が4.2m×4.2m、円形に近い竪穴住居址で、北壁の範囲ははっきりしない。床面には炭化物が多く、焼土がところどころ10～15cm高く盛り上がり残っており、火災を受けた可能性が考えられる。炉址は、中央よりやや北に寄ったところに、巾60cm×70cm、深さ35cm、掘りくぼめてつくられている。主柱穴と考えられる径20cmの小さな柱穴が炉のまわりに認められ、黒褐色土が埋まっていた。周溝は認められない。

2. 古墳時代以後の遺構 (第20～22図)

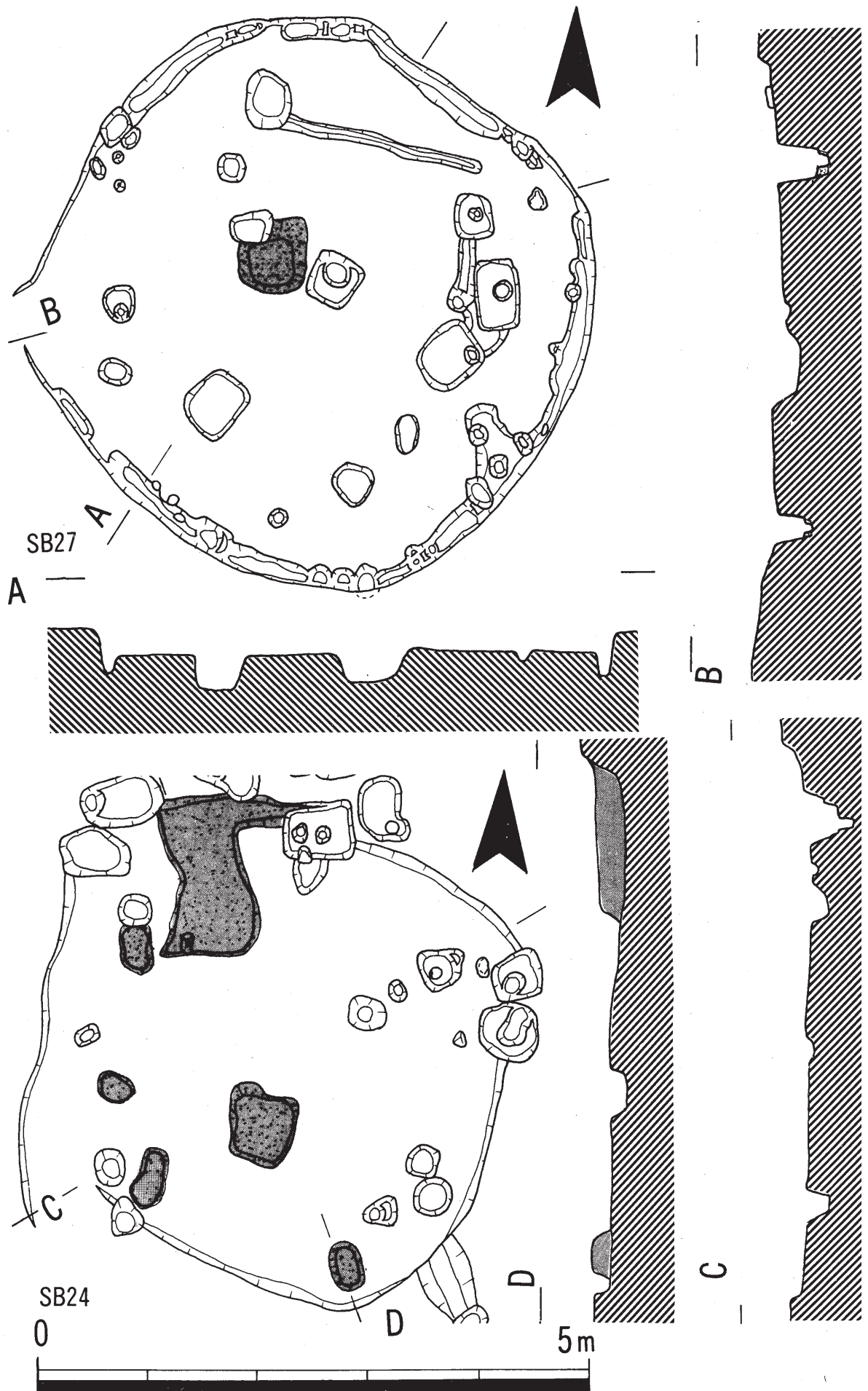
(1) 竪穴住居址

S B 2 発掘区の最も東に位置する竪穴住居址で、周囲に巾25cm、深さ15cm～20cmの溝が巡り平面が方形をなすが、東壁が少し内側に折れ曲がることから、いびつな形を呈している。南壁は、S K 7・12と重複し、削り取られている。カマドは、北壁の中央部に付設されていたと考えられ、炭化物、カマドの構築に使用された黄褐色の粘土が、2m×1.8mの範囲で広がっている。この付近から土器の甕片が多数出土した。主柱穴は、北西隅の柱穴を除いて、径、深さとも確固としたものはない。また、南東隅から排水溝と考えられる細溝が低い東へ延びている。住居址の中央で、S B 3・4掘立柱建物址と重複し、前後関係は建物の方が新しい。

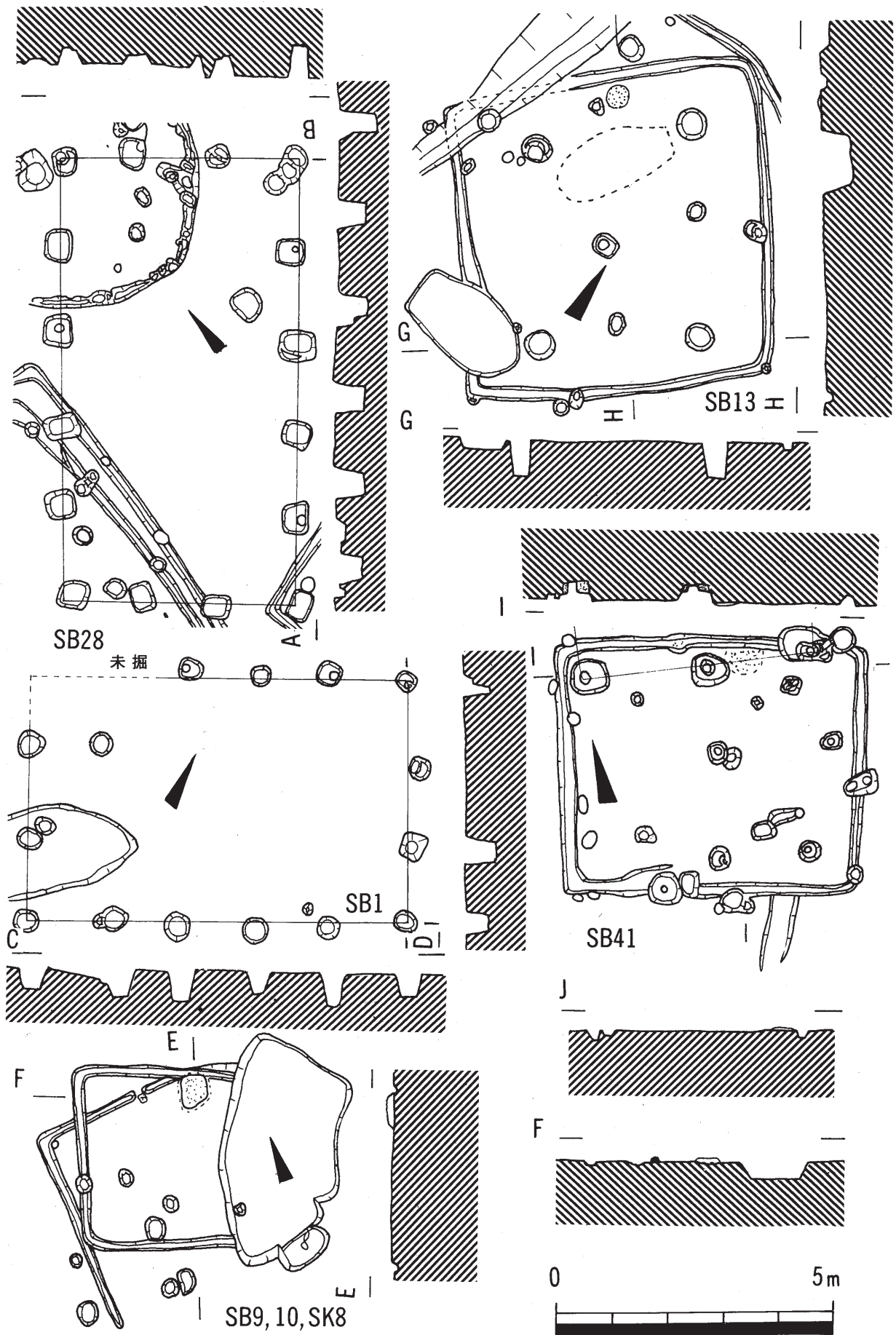
S B 9・10 S B 9・10の東端はS K 8により切り取られ規模は不明である。S B 9は、S B 10の床面をわずかに掘りくぼめてつくられ、北壁の中央部



第18図 西川遺跡遺構平面 (1:200)



第 19 図 遺構実測図 (1 : 50) 縄文時代竪穴住居址



第 20 图 遺構実測図 (1:100) 竪穴住居址、掘立柱建物址

と考えられるところに巾60cm×50cmの範囲で焼土が残っている。焼土の中にカマドの構築にS B 2でも使用されていた黄褐色の粘土が認められる。床面は平坦で、支柱穴は確認できなかった。カマドの東側、S B 10の廃絶した溝の上で砥石1点が検出された。S B 9より古いS B 10は、西側に鍵形で巾15cmの周溝が残っており、全体の規模は不明である。東壁に並んである柱穴は、S B 10の支柱穴とも考えられる。S B 16・17・18・19・20 ほぼ同一箇所に、竪穴住居址が4～5回にわたって建替えられ、床面は凸凹している。埋土は全体に茶褐色を呈し切り合い関係は明確につかめなかったが、周溝などの切り合いからS B 16は最も古く、S B 18が最も新しいものと考えられる。住居址が新しくなるにつれ、25m前後から10m前後へと規模が小さくなっていく。S B 16は、5.2m×5.2mの方形を呈したもので、南壁は新しい住居址によって削り取られ不明である。北壁に1m×0.8mの中でカマド址がある。S B 17は、S B 16のカマドを利用しながら、西へ20cm拡張することにより建替されていて、北側支柱穴2つは、重複している。S B 16・17の北壁で床面と住居外との差は15cmある。S B 19は、5.3m×4.8mの住居址で、S B 17をそのまま、南へ約35cmずらすことにより、新しく建替えられ、カマド址が、新しいS B 18によって削られているが薄く焼土として残っている。最も新しいS B 18の規模は4.5m×3.2mで平面は長方形を呈し、北壁の中央部にカマド址がある。東側にS B 20の周溝の一部が認められるが、切り合い関係からS B 18の方が新しいようである。以上から、S B 16→17→19→20→18と住居址の建替が進んだものと考えられる。

S B 13 ややいびつな方形を呈する5.8m×6mの住居址で、周溝が巡り、北西壁の中央部にカマド址に焼土がわずかに残っている。床面と住居外との高さの差はない。四隅の支柱穴は、径60cm、深さ80cmと大きくしかも深く立派なものである。西隅の柱穴より出土した大甕の口縁とS K 22出土の破片とが接着した。南西壁でS K 14と重複するが、前後関係はS K 14の方が新しい。平面形、規模、棟方向は、S B 2と良く似ている。北側に巾2.4×1.4mにわたって後世の土壌がある。なお、住居址の北東隅に巾

20cmの細溝が途切れたかたちで残っている。住居址の周溝が削られ排水溝のみが残ったとも考えられる。

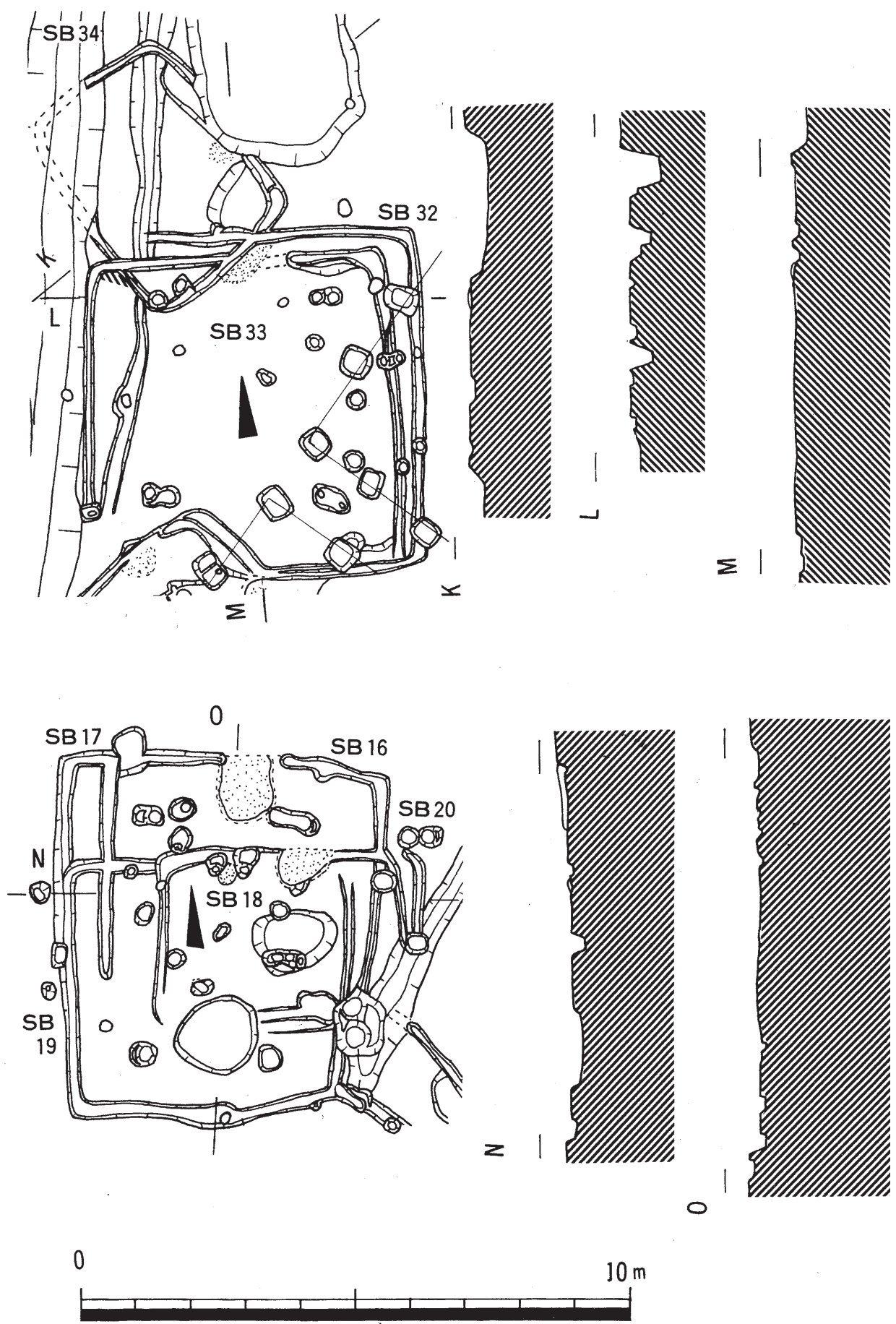
S B 29・30 二棟の住居址が切り合い、S B 30の方が新しい。S B 30は、S B 29の床面を10cmほど掘り下げ建替がおこなわれている。東壁では周溝が確認されたが、西壁では認められなかった。おそらく、廃絶したS B 29の軟い埋土の上に溝がつけられたため、検出は困難であったと考えられる。北壁に20cm×18cmでカマド址がある。黄褐色の粘土が若干認められる。S B 29は北西隅でS B 28掘立柱建物址と重複するが前後関係はS B 28の方が新しい。

S B 32・33 S B 32・33は同一場所で重複し、前後関係はS B 33の方が新しい。S B 32の規模は、6.5m×6.5m、方形を呈し、周囲に巾15cm、深さ20cmの周溝が巡り、西壁は、溝により削り取られ不明である。S B 33はS B 32の床面を10cmほど掘り下げ、位置をずらさず規模を5.8m×5.5mに縮小し、新しく建替していることから、支柱穴、カマド址も、重複・近接している。

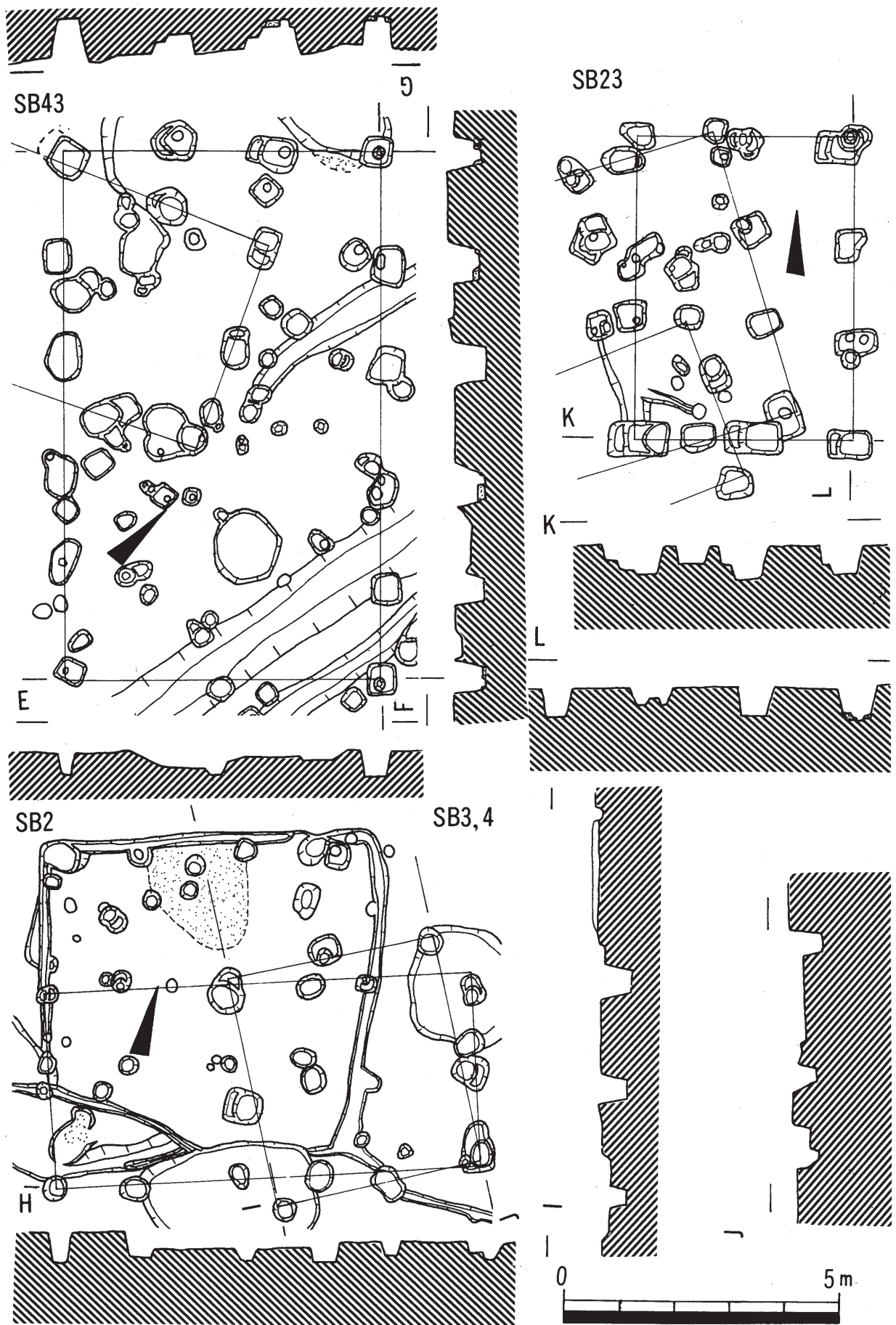
S B 34 4.2m×3.4mの長方形を呈した住居址で、中央部と西端を二本の溝が横切る。この住居址の東南壁で、S B 32・33のカマド址を切っており二棟の住居址より新しい。北東壁に若干カマド堤の焼土が見うけられる。住居外と床面との差はなく溝がめぐのみである。

S B 36・37 二棟の住居址が重複し、南側は未掘のため規模は不明である。北壁に、旧住居址のカマド址の焼土が残っている。北東隅でS B 32・33を切っており、二つの住居址よりも新しい。S B 36・37の埋土上でS B 31掘立柱建物址の柱穴は検出されなかった。

S B 41 発掘区の最西端に位置する東西に細長い住居址で、北壁にカマド址の焼土を残す。周囲に巾10cmの周溝が巡り、北側の溝より、須恵器の杯が出土している。床面は凸凹し、住居外との差はわずかである。支柱穴は径20cm～30cm、深さ15cm～20cmと確固としたものではない。北側でS B 41掘立柱建物址と切り合うがS B 41の方が新しい。棟方向は、ほぼ南北を指し、S B 32・33とは方向が良く似ている。



第21図 遺構実測図 (1:100) 竪穴住居址



第 22 図 遺構実測図 (1 : 100) 竪穴住居址、掘立柱建物址

第7表 竪穴住居の規模

名称 (SB)	規 模 (m)		深さ (cm)	南北軸	カマド位置	備 考
	東 西	南 北				
S B 2	6.2	5.8	10	N-15°-W	北	
S B 9	—	3.4	15	N-8°-E	北	S B 10 よりも新しい。
S B 10	—	4.2	10	N-11°-W	—	
S B 13	5.8	6.0	5	N-35°-W	北西	
S B 16	5.2	(5.2)	10	N S	北	S B 17 より古い。
S B 17	6.0	(5.2)	10	N S	北	
S B 18	4.5	3.2	—	N S	北	S B 19 より古い。
S B 19	5.3	4.8	—	N S	北	
S B 20	4.8	—	—	N S	北	
S B 24	4.2	4.4	20	—	—	縄文時代竪穴住居。
S B 27	4.8	4.8	25	—	—	縄文時代竪穴住居。
S B 29	4.1	—	10	N-15°-W	—	S B 30 より古い。
S B 30	4.4	—	15	N S	北	
S B 32	(6.5)	6.4	10	N-4°-E	北	S B 33 より古い。
S B 33	5.6	5.8	20	N S	北	
S B 34	3.4	4.2	—	N-53°-W	北東	
S B 36	—	3.2	10	N-30°-W	北西	S B 37 より古い。
S B 37	—	—	10	N-37°-E	北東	
S B 41	5.6	4.8	5	N-9°-E	北	S B 40 より新しい

(2) 掘立柱建物

S B 1 発掘区の最も東に位置する5間×3間の南西-北東棟建物である。南北の側柱の並びは不揃いである。掘り方の径は30cm~40cm、深さ30cm~40cmで総じて妻側の柱穴は浅い。柱間間隔は1.4m~1.5mと狭いのが特徴である。杯Aが多い。

S B 3 S B 2 竪穴住居址、S B 4 掘立柱建物址、東側では、S K 6 と切り合う南西-北東棟の5間×2間の細長い建物。S B 1 とはやや方向を異にする。側柱の柱間間隔は不揃いである。S B 4 との前後関係は不明。S K 6 より新しい。

S B 4 2間×2間の方形の建物址。床柱は不明であるが倉庫風の建物。S B 1 と棟方向は良く似ている。

S B 15 北側部分は未掘のため規模は不明であるが、棟方向を北からやや東へ振る建物。4間×2間の建物か。この付近の三つの建物と棟方向が異なる。柱穴の掘り方は径30cm前後でS B 1 と良く似ている。桁行柱間2.1m、梁行柱間1.8m。

S B 23 棟方向が磁北を指す3間×2間の建物。南妻側柱の柱穴掘り方は方形をなし、径50cm~60cm、深さ60cm~70cmで重複している。東側柱の柱穴から台付椀が出土している。S B 2 5 掘立柱建物と切り合

い、前後関係はS B 25の方が新しい。S B 40 と棟方向は良く似ている。桁行柱間1.8m、梁行柱間1.8m。

S B 25 4間×3間の建物で、北側柱の柱間間隔は、1.8+2.1+2.1+1.8mである。柱掘り方は0.6m~1mと変化があり、南側柱には径20cm前後の柱穴痕が良く残る。

S B 26 5間×2間の細長い建物。側柱間隔は、1.4+1.8+1.4+2.1mと不揃いである。S B 1 と棟方向が似ている。

S B 28 縄文時代の竪穴住居址と重複する5間×3間の建物。方形の柱掘り方をもち、径50cm~60cm、深さ60cmとしっかりしたもので、古墳時代の須恵器杯A・台付椀が多数出土している。桁行柱間は1.8mと等間隔である。北側柱の北から2番目の柱穴には多量の焼土が埋まっていた。S B 43 と棟方向は同じである。

S B 31 S B 28 と西側柱列を揃える北東-南東棟建物で、西側柱はS B 36・37 竪穴住居址との重複により削られる。

S B 40 棟を磁北にとる梁行2間の建物で、桁行の間数は未掘のため不明。S B 41 の埋土上で柱穴が検出され、前後関係はよく判明した。丸い径60cmの

掘り方をもち、その中に径20cmの柱穴が良く残る。

S B 43 5間×3間の北西-南東棟建物で、建物のなかで最大面積(55㎡)を有する。柱穴掘り方は方形に近く、柱間は1.8mで等間隔である。南妻側柱は2間、2.7m+2.7mとなっている。

S B 45 西側は未掘のため不明であるが、4間×2間の建物か。S B 43 掘立柱建物と切り合うが、前後関係はS B 45の方が新しい。南側柱の柱穴は、他の柱穴と重複して不整形を呈している。

S B 46 3間×2間の棟をやや西に振った建物で、北妻側柱には、径15cm~20cmの柱穴痕が良く残っている。東西の側柱柱間は、不揃いである。

S B 47 2間×2間の建物で、柱の並びは悪い。柱穴掘り方は30~40cmの小さな方形の掘り方を呈し、埋土は、灰褐色をなして奈良時代の須恵器片が出土している。東西の側柱間隔は2.1m。

S B 48 3間×2間の東西棟建物である。中央の妻柱は径20cmといずれも小さく、南側柱は建替されたものか重複している。

第8表 掘立柱建物址の規模

名称(SB)	規模(間)	桁行(m)	梁行(m)	棟方向	備考
SB1	5×3	6.8	4.3	N-66°-E	
SB3	5×2	7.8	3.6	N-70°-E	
SB4	2×2	3.6	3.6	N-14°-E	
SB15	-×2	-	3.6	N-60°-E	
SB23	3×2	5.6	4.0	NS[SB25より古い。西側柱は2.2m+1.2m+2.2mで中央は狭い。
SB25	4×3	8	5.2	N-71°-E	
SB26	4×2	7	3	N-68°-E	
SB28	5×3	8	4.2	N-42°-E	
SB31	-×2	-	3.2	N-42°-E	
SB43	5×3 5×2	9.8	5.4	N-44°-W	北妻側柱は2.7m+2.7mの2間。
SB45	-×2		3.8	N-65°-E	
SB46	3×2	4.9	3.2	N-32°-W	
SB47	2×2	4.2	3.2	N-2°-W	S B 23と棟方向が似る。
SB48	3×2	4.8	3.2	N-85°-E	

(3) 土 壙

S K 6 S B 2の直ぐ東にある2.2m×2.2mのほぼ円形を呈する土壙で、埋土は黄褐色で砂礫性に富む。埋土の直上で柱穴を確認する。杯A・Bが出土している。

S K 7 S B 2 竪穴住居址の南壁と、S B 18・19 竪穴住居址からの排水溝とも切り合う。排水溝との前後関係は、S K 7の方が新しい。

S K 8 S B 9・10の東端で切り合う3.6m×2.1mの土壙で、ややくの字形に折れた形を呈している。2つの土壙が重なりあった可能性がある。埋土は黒褐色に近く、炭化物も多く、奈良時代の杯C類が多

数出土している。

S K 11 4m×1.5mの階円形をより細くした不整形の土壙。S B 1、S B 15と切り合い、前後関係はS B 1、S B 15より古い。

S K 12 6.5m×1.8mの長方形を呈する土壙。東端にカマド風の黄褐色の粘土と焼土がある。

S K 14 2.2m×1.4mの小さな土壙で床面は平坦である。S B 13 竪穴住居址と切り合い関係があり、S K 14の方が新しい。古墳時代の須恵器片が多数出土した。

S K 21 S B 13 竪穴住居址の北西に位置する5.6m

× 2.4m の階円形の土壙。古墳時代の須恵器杯・甕片等が多数出土した。

SK 22 5.6m × 6.2m の不整形の土壙でいくつかの土壙が重なりあったものと思われる。北東隅は、深さ 30cm と他より深く、多量の須恵器の外、鉄滓、軽石、石錘等が出土した。北壁付近に、礫が 5～6 個埋もれていた。

SK 35 SB 34 竪穴住居址と南西隅で切り合う

2.9m × 4.5m の長方形を呈した土壙。埋土は非常に固い灰褐色で、須恵器の細片が多い。

SK 44 2.9m × 4.5m の楕円形を呈した土壙で東端に焼土があり、北西壁は地割の溝により削り取られている。SB 43 掘立柱建物址との切り合い関係は、SB 43 の方が新しく、奈良時代の須恵器片が出土している。

第9表 土 壙 の 規 模

名称 (SK)	形 状	規 模 (m)	深 さ (cm)	名称 (SK)	形 状	規 模 (m)	深 さ (cm)
SK 6	円 形	2.4 × 2.1	25	SK14	長方形	2.2 × 1.4	25
SK 7	円 形	3.1 × 2.2	20	SK21	楕 円	5.5 × 2.6	10
SK 8	長方形	3.6 × 2.1	30	SK22	不正形	5.6 × 4.8	30、10
SK11	楕 円	4 × 1.5	15	SK35	長方形	4.5 × 3	40
SK12	長方形	5 × 1.8	10	SK44	楕 円	3.4 × 2.8	15

(4) 溝 址

SD 5 発掘区の最東端にある巾 20cm、深さ 40cm の細溝で弓形に東へ延びる。おそらく、北に存在すると考えられる竪穴住居址からの排水溝と思われる。

SD 38 巾 50cm、深さ 15cm の浅い溝で、茶褐色の埋土とこぶし大の礫を多量に含む。付近から鎌倉時代の山茶碗片が出土している。

SD 39 巾 15m、深さ 45cm。SD 38 と同じく北東に延びる。埋土は灰褐色。畑の地割溝と考えられる。

SD 42 巾 50cm、深さ 20cm。SD 38・39 と同じ方向であるが、ところどころとぎれ、古墳時代の須恵器片が数点出土している。

溝址の多くは、発掘区の西側にあつて、N - 12° - W を向き、この方向は、畑の地割方向と似ている。

3. 出土遺物 (第 23 - 29 図)

1. 縄文時代の遺物

(1) 縄文式土器 (第 23 - 25 図)

SB 24・28 から縄文式土器が整理箱で 2 箱出土している。ほとんどが細片で、全形を窺えるものは少なく文様の残りも悪い。器形は、深鉢形土器が中心をなすものと思われ、口縁部には平縁と波状口縁があり、底部は円形で平底の外に、脚付のものもある。施文には、大きく縄文を下地として、沈線で区画

設けたり、渦巻文を施したりする I 類と、縄文は使用せず、沈線により区画帯、渦巻文を描く II 類、施文を全く施さない無文の III 類に分類される。

○ 口縁・胴部

I 類 (1・11・12・15・16・22・25・27・28)

1. 口縁部から、底部まで接着した唯一の縄文式土器である。波状口縁をもつ深鉢形土器で、口縁部のみ細かい縄文を施した上に、大小二つの階円状の区画帯をもち、その内部には細かい斜線が描かれる。胴部にも、二本の沈線が垂直に走り、その区画内は細かい沈線により羽状を描く。丸い底部は若干のあげ底となる。砂礫を少し含み、黄褐色を呈する。口径 30cm、高さ 28cm。

11. 平縁の口縁部で、横に縄文を施した後、巾の広い浅い沈線と細い沈線が横に走る。

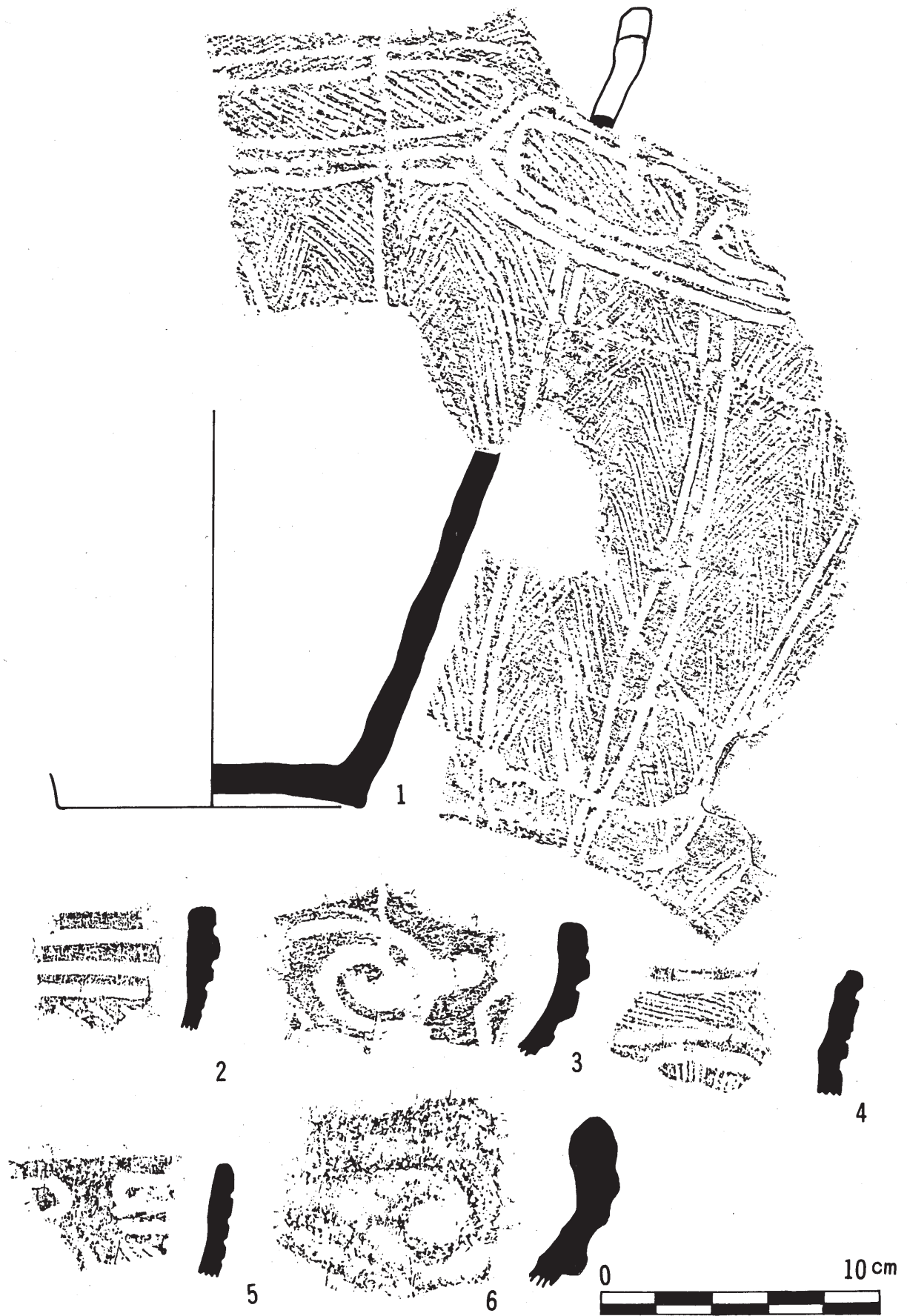
12. 口唇部が、小さく内側に屈曲して、巾の広い面をなし、細い縄文の上に弧線を描く。19 と同一個体。

15. 内弩気味の胴部で羽状に細い縄文を施す。

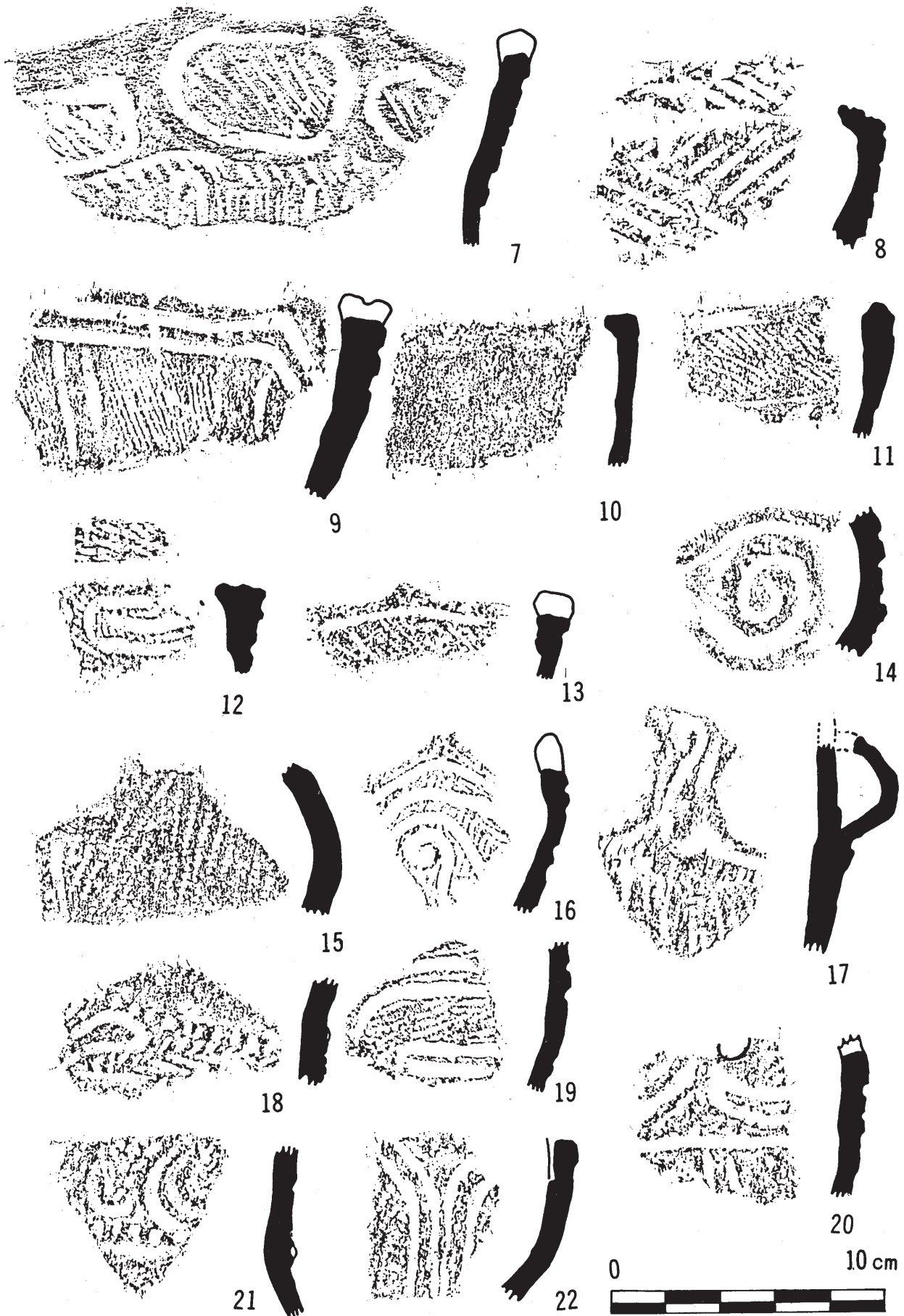
16. 縄文地に渦巻文の沈線を施し、二つが結ばれる。波状口縁で内面の口縁端部は肥厚する。

19. 縄文地に弧線を描く。赤褐色。

20. 縄文地に弧線と直線の組み合わせによる文様



第 23 図 出土遺物実測図 (1:2) 繩文式土器



第 24 図 出土遺物実測図 (1:2) 縄文式土器

構成。上端に5mmの円孔を穿つ。

22. 縄文地に2本の平行曲線を施すもの。

25. 縄文地に縦に太い沈線を施す。

27. 縦に間隔をあけて縄文を施すもの。東庄内A遺跡第Ⅱ類A種に多い。

28. 縄文地に縦に細い沈線を施し、その中の狭い部分を磨消している。

Ⅱ類 (2・3-6)

2. 直立する口縁部で、横に走る太い沈線と右下がりの沈線により文様を構成。黒褐色。

3. 内弩する波状口縁で、沈線により大きな渦巻を描く。赤褐色で砂礫多い。

4. やや外反する口縁部で、太い直線、曲線とで区画帯をつくり、内部は細い沈線で飾る。黄褐色で砂礫は少ない。

5. 2と良く似た文様構成で、二本の平行沈線が丸く結ぶ。黒褐色で砂礫多い。

6. 口縁部が内弩し、太い渦巻文を描く。器厚1.8cmの厚手の土器である。赤褐色、砂礫多い。

7. 波状口縁で、円形の区画内には、細かい斜線を施し、その下には、細かい波状の刺突文、くびれ部には、縦に二本の沈線が垂直に走り、その間には細かい沈線を描く。黒灰色。

8. 口縁部が内側に屈曲して、口唇部が広い面をなし、口縁、口唇に羽状の太い沈線を施す。灰褐色で砂礫多い。

9. 波状口縁で、端部に小さな突起をもち、縦・横に二本の太い沈線と細い沈線により文様を構成。

13. 小さな山形の突起をもつ波状口縁で、その下には、細かい斜線を描く。口縁端部が少し肥厚する。茶褐色で砂礫多い。

14. 内弩する口縁部で、渦巻文を描く。

17. 環状の把手が付く、壺形土器の腰部で、把手にはS字状の沈線を施す。黄褐色。砂礫多い。

18. 突帯に刺突、羽状を施した上に、沈線が巡る。

21. と同一個体。

23. 二本の弧線の区画内に右下がりの沈線、下端は縦に細い沈線。

24. 沈線の区画内、右側は細い沈線、左はS字状の沈線を施す。

26. 24と文様構成は似ており、沈線の区画内左側

に羽状を描く。

Ⅲ類 (10)

10. 口縁部が内側に少し屈曲する平縁の口縁部で平滑に試上げられている。茶褐色。

○ 脚 部

29. 台付台器の脚部で、下端部は大きく欠損する。脚部の上位に円孔四つ穿つが、その1つは位置がずれ、径2cmと大きい。

30. 縦に稜をなす太い脚部で、端部ちかくに径2cmの円孔四つを穿つ。砂礫多く、黄褐色。

(2) 石器 (第26図)

石器には、石鏃・石錐が圧倒的に多く、他に、石斧、石錘がある。石鏃、石錐は、竪穴住居址及びその周辺から、石斧、石錘は、古墳時代以後の柱穴、土壌より出土している。

①石鏃(1-16) 1以外はえぐりを有するものが多く、13、16はチャート、他はサヌカイト。

②石錐(17-23) 剥片の端部を細かく調整し、先端部を形づくる。18はチャート、20は硬砂岩。

③石斧(24-25) 24は刃部のみを残す磨製石斧で、四面が丁寧に研磨されている。器厚2.2cm。安山岩製。25は刃部を欠損した磨製石斧で、先端部を荒く剥離することにより刃部を尖がらし、再利用をはかっている。器厚2.4cm。片麻岩。

④石錘(26) 偏平な川原石の両端を打ちかいたもの。6cm×8cm。器厚1.3cm。結晶片岩。

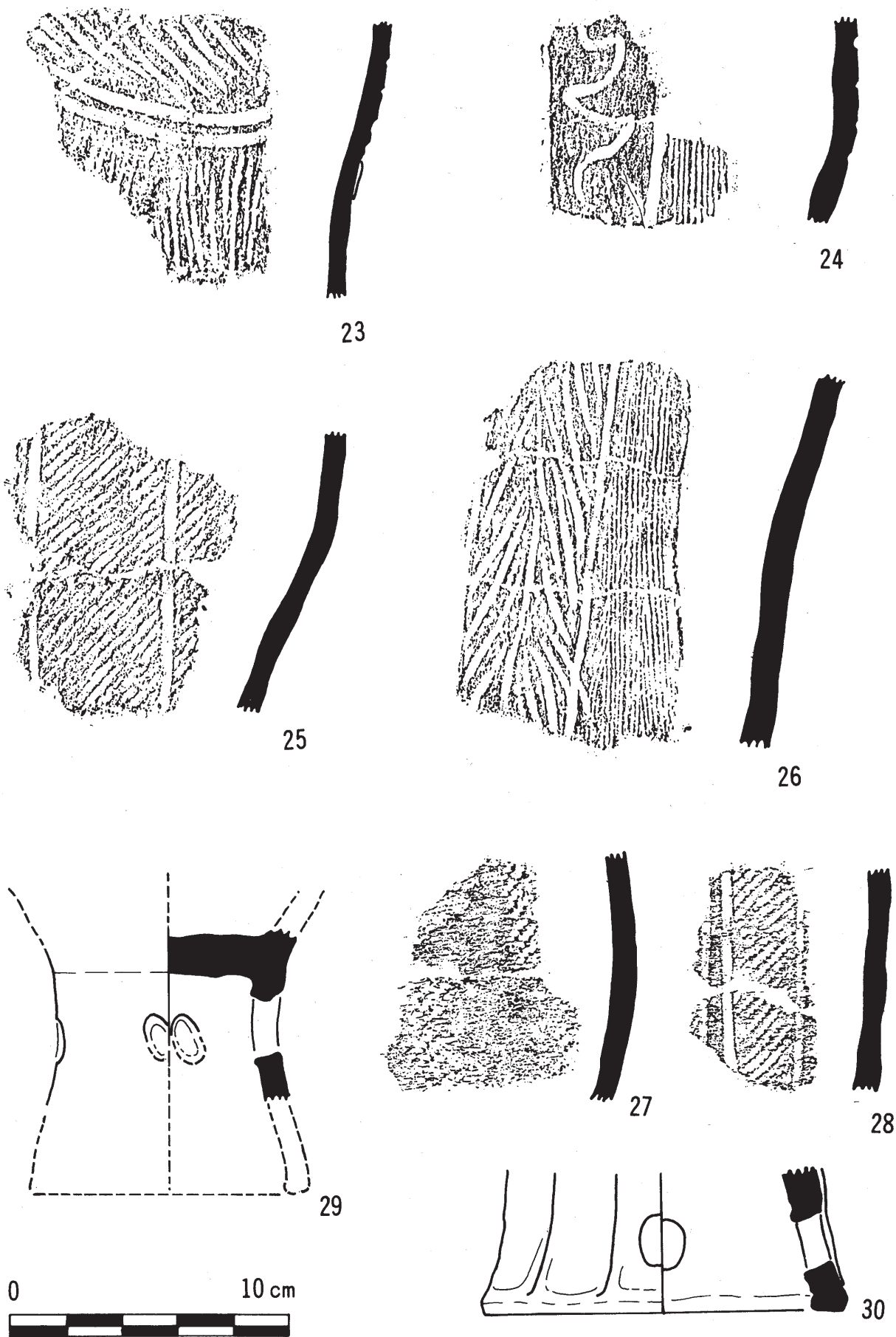
2. 古墳時代以後の遺物

(1) 須恵器 (第27・28図)

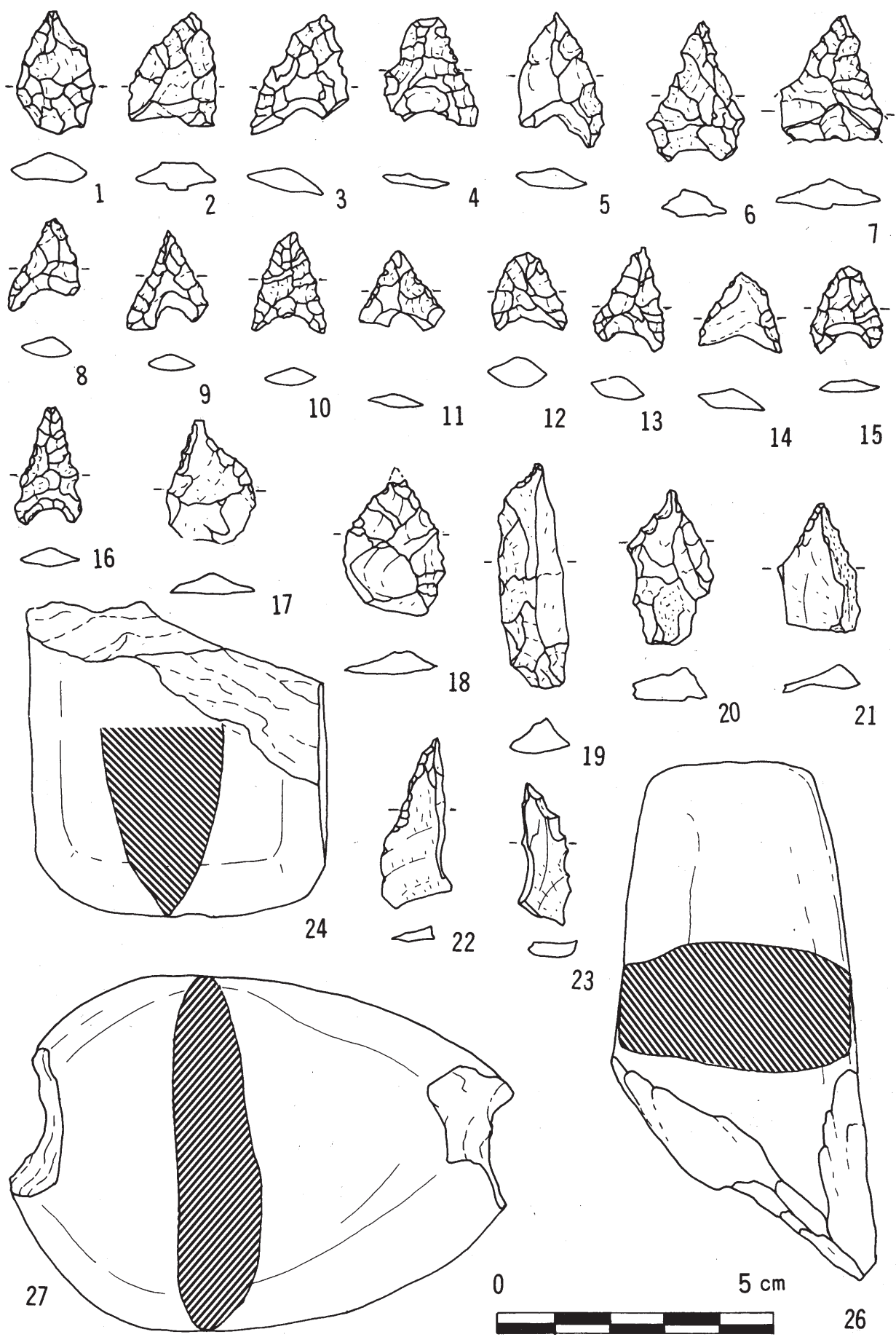
須恵器は、竪穴住居址、土壌、建物址などから多数出土した。器種には、杯・蓋が圧倒的に多く、他に甕、壺、鉢など豊富である。

その中で中心を占める杯は、丸い底部を有し、口縁部に蓋受けのたちあがりがつくA、底部がへら削りされ、体部が外傾、もしくは内湾するB、底部に高台をもつCの三種に大別できる。蓋も同様に丸い天井部を有するA、つまみがついて口縁端部にかえりがつくB、かえりが消失し端部が内側に短かく屈曲するCの三種に分けられる。

杯A(21-33) たちあがり短かく内傾するもので、底部のへら削り調整が確認できるのは21・26



第25图 出土遺物実測図 (1:2) 縄文式土器



第 26 图 出土遺物実測図 (1:1) 石器

・28 と量的に少ない。他は、切り離しのままのもの、指で押えたもの、ヘラ状工具で叩いたものとさまざまである。内面はよく水引きされ、中央部はナデ調整が一般的である。21 の底部は、黄褐色で自然釉の剥落があり、石の動きがかすかに観察できる。口径 10.5cm、高さ 4.3cm。28 は黄灰色の底部で、中央部をのぞいた周辺には、ヘラ削りがおこなわれる。26 は口径 8.5cm、高さ 3.2cm と最小形の杯で底部はヘラ削りされ平坦となっている。32・33 は体部に歪みを持っている。

蓋 A (1 - 20) 天井部が未調整のもの A₁、ヘラ削り調整がされる A₂ に分けられ、量的に杯と同様に A₂ 類は非常に少ない。

蓋 A₁ (1 - 5、14 - 18) 径が 5.5cm ~ 6.5cm と巾があり、6cm ~ 6.5cm が最も多い。14 は最大形で径 13cm、高さ 3.5cm。5 は最小形で口径が 9.5cm、高さ 2.4cm。天井部はヘラ状工具で調整される。6 の肩部には、沈線をめぐらし、周辺部はよく水引きされるが天井部の丸い中央は不調整で、「×」印の窯印がある。焼が硬く、青灰色。4 は天井部の切り離しが雑で、凸凹している。天井部に「×」印の窯印がある。17 は体部に歪みをもって、天井部には指押えによる調整がみられる。青灰色。

蓋 A₂ (7 - 13、19・20) 径が 6.5cm ~ 11cm とさまざまで、口縁部と天井部とを分ける肩に沈線がめぐるとそうでないものがある。径が 6.5cm ~ 8cm の A_{2a}、9cm ~ 9.7cm の A_{2b}、10.5cm ~ 11cm の A_{2c} に分けられる。A_{2a} は杯蓋、中間的な A_{2b} のなかには、杯蓋のほか短頸壺の蓋も含まれ、A_{2c} は小形で短頸壺の蓋と考えられる。8・20 は天井部のほぼ全体にヘラ削りがおこなわれ、いずれも端部には重ね焼痕があり、黄褐色もしくは灰褐色を呈しており、内面には、自然釉、灰の付着がある。9 は天井部が平坦で、長い口縁部に沈線がめぐり。口径 7.2cm、器高 4.2cm。青灰色。10 は口縁部がやや歪み、外反ぎみ。天井部は、ヘラ削りにより平坦となる。黒灰色。11 は全体のつくりが雑で形がいびつである。焼も甘く青灰色。13 は細かくヘラ削りされ、天井部が尖がるものである。

杯 B (34 - 37) 径 8.4cm ~ 10cm の B₁ の (34・35) と径 12.8cm ~ 11.8cm の B₂ (36・37) に分けられる。

34 は口縁部は歪み、ヘラ削り調整により底部は丸味をもつ。腰部に「×」印の窯印がある。35 は口径 10cm、高さ 4cm で、体部が外傾し、口縁部が薄く仕上げられている。内外面はよく水引きされ、底部のヘラ削りも丁寧である。灰褐色で焼成が良い。36 は口縁端部がやや外反ぎみで、底部のヘラ削りはすどく稜をなしている。黒灰色。37 の底部はヘラ削りされるが、明瞭な稜をなさず丸く仕上げられる。

口径 11.8cm、高さ 3.8cm。黒灰色。

蓋 B (41・42・44) 41 はかえりの部分が口縁部より突出しないもので青灰色。42 のかえり部分が真すぐ下へ延び、壺の蓋と考えられる。44 は扁平で丸いつまみをもち、かえりが内側に折れまがるもの。天井部はカキ目調整されて、青白色である。

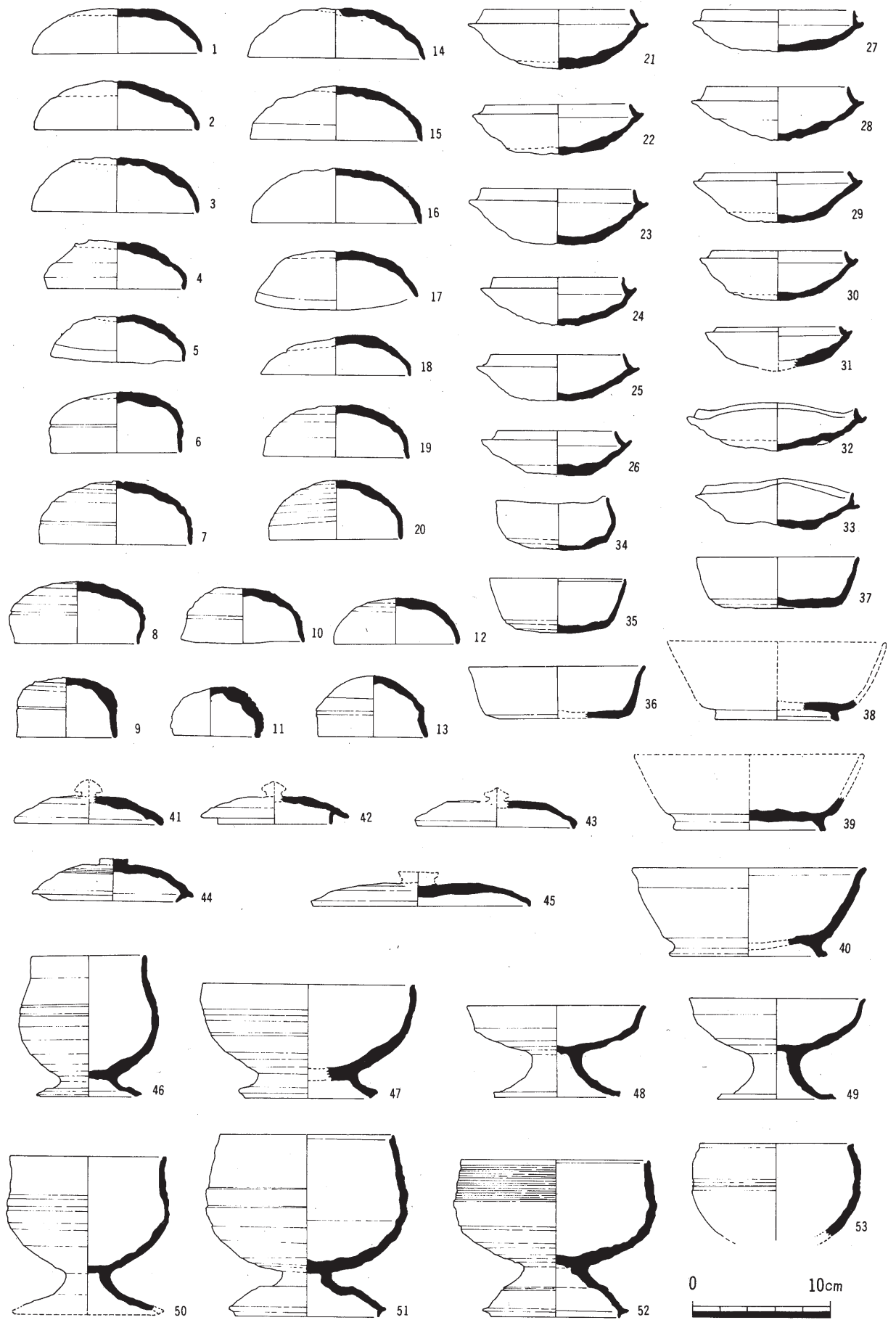
杯 C (38 - 40) 外傾する大きな体部と高台をもつ。40 は口縁部が横ナデされて小さく外反し、底部はヘラ削りされ、外へふんばった長い高台がつく。口径 17cm、高さ 6.4cm。灰褐色。38・39 は口径に較べて浅い杯で底部はヘラ削りされ、小さな高台がつく。青灰色。

蓋 C (43・45) 43 は口径 11.4cm、高さ 3cm と小さく、天井部は平坦部分のみヘラ削りされ、屈曲した口縁部は三角形をなしている。45 は口径 15.8cm、高さ 2.8cm。天井部のヘラ削り調整は巾広くおこなわれ、口縁端部の折り曲げは小さい。灰褐色。

台付椀 (46 - 53) 深い椀部と背の低い脚台からなる A (46・47・50 - 53) と浅い椀部と大きく広がる太い脚部からなる B (48・49) がある。46 は丸味をもつ太い体部と短かく直立する口縁部からなる深い椀部に大きく開いた高さ 1.5cm の短かい脚部がつく。椀部の上位に 2 条の沈線を施す。赤褐色。

47 は径 15.5cm の口の広い椀部に、外側にふんばった短かい脚部がつく。底部付近の器厚は 8mm と厚く、椀部の上位に三条の浅い沈線がめぐり。黒灰色。

48・49 は底部がヘラ削りされた口径 12.8cm の浅い椀部と大きく広がる太い脚部からなる。50 は浅い沈線を 2 条めぐらした丸い体部に外反ぎみにのびる長い口縁部と、大きく開いた短かい脚部とからなる。青灰色。51 は内弩ぎみで深い椀部の胴部は三つの段と長い口縁部をもつて口唇部の内側には小さな段をつくる。脚部は中央部で屈曲して一たん段をなし、



第27图 出土遺物実測図 (1:4) 須恵器



第28图 出土遺物実測図 (1:4) 須恵器

端部はつまみ出され下方へのびる。黒灰色で焼が良い。52は51と良く似た形態で、長い口縁部にはカキ目調整を施し、脚部は中央で段をなして沈線をつくる。口縁、脚部の端部のつくりは、51と同じである。黒灰色で焼が良い。53は球形に近い台付椀の椀部で、中央部に2条の沈線が巡る。口径11.2cm。

高杯 有蓋高杯(55・56)と無蓋高杯(54-60)の二形式がある。55は内傾した短かい立ち上がりをもつ口径12.2cmの杯部と大きく広がる脚部とからなる。黒灰色で焼成が良い。56は脚部の中央と裾部に沈線をめぐらした長脚二段二方透し高杯。口径12.3cm、器高9.4cm。青灰色。

無蓋高杯は口径から(16.2-14.8cm)のAと(9.6-12cm)のBの二種に大別できる。54は大きく外傾する口縁部からなる杯部に、大きく開く脚部がつき、杯と脚部の中央部と裾部に沈線がめぐる。口径16.2cm、高さ12cm。57杯部は口径14.8cm、器高5.2cmで、54にくらべてやや深い杯部は灰白色で焼成は甘い。58は口径12.2cmの小さな杯部で肩のところに2本の稜をつくる。黒褐色で焼成は堅い。59は底部の平坦な杯部と脚部の中央と裾に沈線をめぐらす小形の二段二方透し高杯。口径9.6cm、高さ9.6cm。60は大きく開く高杯の脚部でその中央に二条の沈線をめぐらす。内部にしぼり目がある。青灰色。

短頸壺(63-65) 63・64はやや外反ぎみの短かい口縁部とヘラ削りが中央部まで及ぶ胴部とからなり、肩の部分に一本の沈線が巡る。

65は63・64に較べ口径の割に非常に浅く胴部の中央に二本の沈線がめぐり、ヘラ削りは、底部のわずかな範囲のみである。器壁は63・64に較べ薄く、底部は灰白色で焼成が甘い。

広口壺(66) 短かく外反する口縁部は肥厚して稜をつくり、胴部にはカキ目調整を施す。口縁部はわずかに歪む。

はそう(61・62) ラツパ状に大きく開く口頸部は、いったん屈曲して段をなし口縁部につづき、61の口頸部と体部に浅い沈線をめぐらして、つき出した注口は丸い体部の中央より下位につけられる。体部は丁寧へラ削りされる。器高13cm。

62は61に較べ口頸部は太く、丸い体部は小さくどがり気味で、注口は中央部よりやや上位につく。肩

をはる体部は、細かくヘラ削りがなされる。61・62とも洗浄中に体部内より径1.5×1cmの注口の栓を検出する。

ねり鉢(69) 口縁部が外反し、肩を張る胴部にはカキ目調整をほどこす。丸みをもった底には刺突文が放射状にある。胴部がやや歪み口縁部に自然釉が流れている。

平瓶(70) 球形に近い脚部をもつ平瓶で、ヘラ削りは胴部中央までのび、口縁部がわずかに欠損する。黄灰色。

鉢(71) 口径23.5cmの大きな鉢で、口縁部が短かく屈曲して面をつくる。底部は丁寧へラ削りされ内・外面とも、水引きされ中央は、ナデ調整。

甕(72・73・75) 72の外反する口縁は、端部で肥厚して帯状をなし、下端に稜をつくる。頸部には「×」印の窯印がある。青灰色。

73は口径14.2cm、口縁端部が肥厚し、小さな稜をつくる小形の甕の口縁部。内面には同心円文の叩きがある。青灰色。

75は口径35cm、高さ23.5cm、直立する甕の口縁で、端部は肥厚し、下端は稜をつくる。頸部の装飾は、カキ目調整と太い沈線の組み合わせである。内面は、水引きされ、下部はナデ調整。外面とも、茶褐色、黒褐色である。

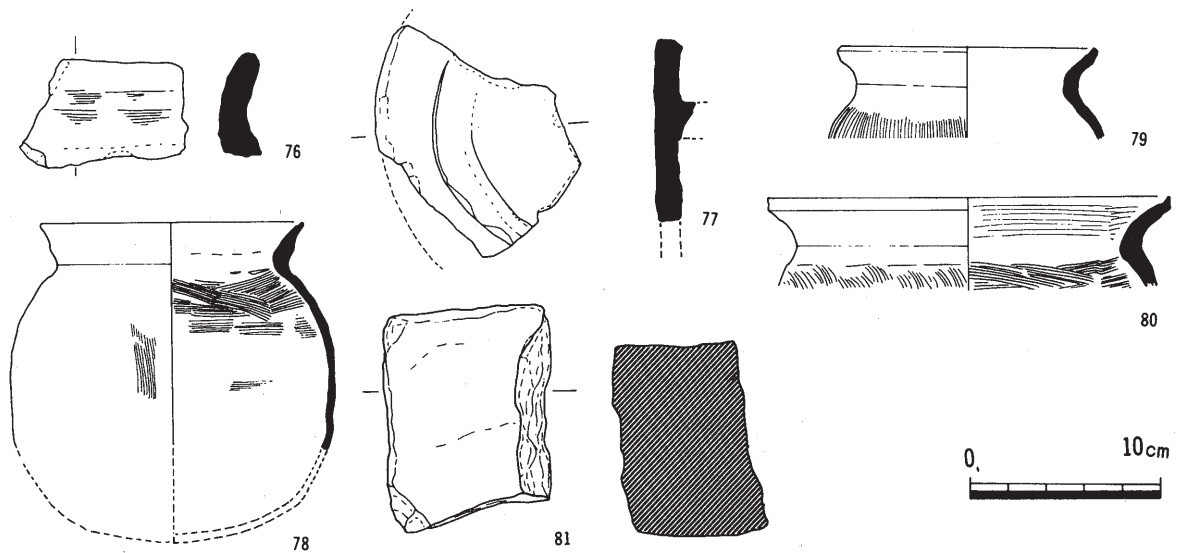
獣足(74) 長さ7cm、径が1.7×2cmの細かく面取り、壺形土器の脚部。灰褐色で焼成がよい。

甑(67, 68) 口径32~32.4cmの大きく開く甑の口縁部付近で口縁端部は肥厚して帯状をなす。カキ目調整は、口縁部から部分的にほどこされる。内面は水引き調整のあと、下から上への荒いヘラ削り調整がされる。68には、把手がつく。両者とも灰褐色で焼成が甘い。

(2) 土師器(第29図)

竈(76) 巾が5.5cm、厚み1.5cmで穹曲した短かい把手状のもので端部は丸くおさめられる。荒いハケ目調整を施して色調は、黄褐色で一部火熱を受け赤褐色である。カマドの一部と考えられる。

蓋(77) 円形の板状のものに、外縁から3.4cmのところの中2cmの突帯がつく。裏面には、ススが付着し、黄灰色もしくは灰白色である。鍋、甕の蓋の一部とも考えられる。推定径24cm。



第29図 出土遺物実測図 (1:4) 土師器・砥石

第10表 遺構別出土遺物

器種 遺構	須恵器										土師器				
	杯蓋			杯身			高杯		平ね	台	広	は	獸	襦	そ の 他
	A	B	C	A	B	C	有蓋	無蓋	り 盤 鉢	襦 付 椀	口 壺	そ う	鉢 足		
SB2	14													78, 79	
SB9	1, 9														
SB13	13			23, 22						75					
SB16	5														
SB18, 19	4, 18														
SB23											51				
SB25											53				
SB29		42													
SB33	6, 10, 15, 44				28		59		⑦〇						
SB37	19				34										
SB41	12, 16, 17			26, 33			58 60								
SK6		④④ ④⑤			③①, 35									⑧〇	
SK8					36, 37, 41										
SK14													74		
SK21										47					
SK22	2, 3, 7, 8, 11, 20, 30			21, 24, 27			55 56	54 57		69 71 72, 73	46, 48 49, 50	66 61, 62	63~65	67, 68	76, 77
SK35			④③			④〇									
SK44					38, 39										

○は遺構の周辺から出土。

甕(78-80) 78はくの字形に外反し、頸部が肥厚し、体部内外面にハケ目調整が施される。赤褐色で剥落が著しい。

79は口径13.6cmの小さな甕で、口縁部はつまみ出され端部が尖っている。外面はハケ目調整される。

80は口縁端部がつまみ出されて上を向き、内外面にはハケ目調整。赤褐色を呈し焼成は良く、胎土は緻密。

(3) その他

①砥石(81) 9.5cm×10cm×8cmの直方体を呈した大きな砥石で、左右には割った切口の凸凹した広い面が残る。正面ともう一面は、良く使用され、滑めらかな面となっている。凝灰岩。

②軽石(82) 5.1cm×7.2cm、4.8×4.8cmの大小2個の軽石で、いずれも小さな気孔が多数あき、黄褐色である。

③鉄滓(83) 8cm大のもの2個と小さな棒状のもの3個ある。表面は茶褐色で飴状に溶け、ところどころに小さな孔があいている。

4. 結 語

西川遺跡は、縄文時代の集落と古墳時代後期以後奈良時代に至る集落が重複した遺跡である。

縄文時代の竪穴住居址は円形を呈するもので発掘区中央部より2棟検出された。鈴鹿市内において、縄文時代の竪穴住居址は、北部の山間部(標高60~70m)に位置する東庄内A・B遺跡⁽¹⁾(東庄内町)、鈴鹿川中流南岸の台地上(標高35m)にある北一色遺跡⁽²⁾(国府町)の三箇所から見つかっているが、鈴鹿市南部では初めての発見となる。二つの竪穴住居址から出土した縄文土器の文様は、沈線で区画したり、渦巻文を描いたりするものが主体を占め、こうした施文の特徴は、土器編年から中期末に位置づけられるものである。また出土土器のなかには、縄文時代後期の指標となる典型的な磨消文が認められないものの、東庄内A遺跡から多数出土している間隔をあけて縄文を施すもの、沈線で区画された小範囲を磨消すものも数片であるが含まれている。これらは、縄文時代後期への萌芽を示す特徴のものであり、西川遺跡の縄文土器は、中期末から後期初頭に至る過渡的な

一群として扱えられる。西川遺跡と時期的に共通する遺跡には、東庄内B遺跡、北一色遺跡、起A遺跡⁽³⁾(安塚町)、地藏僧遺跡⁽⁴⁾(亀山市)がある。

石器類には、石鏃、石錐が豊富で、石質はサヌカイトが最も多く、次いで珪岩である。この他、黒曜石の剥片が多数出土していることも注目される。

古墳時代後期の集落の開始は、竪穴住居出土の須恵器に、杯・蓋の底部・天井部が未調整のものが大半を占めていることから、6世紀末~7世紀前半頃が考えられる。須恵器の特徴から竪穴住居をIV期に分類したなかでIV期に該当する。これは、郡山遺跡群の集落址の中ではやや遅く、西部の集落ほど形成が遅くなる傾向が見受けられる。

竪穴住居址は、建替を含めると19棟検出され、特に台地縁辺部に近い東側に多い。竪穴住居址は、一般的に北もしくは北西にカマドを持ち平面形、棟方向により、III群に分けられる。SB2・13(A群)は主軸を北からやや西に振るもので、発掘区の東側に認められる。SB16~20・32・33・41(B群)は規模が小さく、棟を南北にとり、SB41をのぞいた住居址は意識的に棟方向を変化させず同一場所で数回にわたって建替がおこなわれている。一方、SB9・10・29・30・36・37(C群)は10m²前後の小規模な竪穴住居址で、集落の中央より南に扁っており、棟方向もまばらで統一性が見受けられず、住居址の主柱穴も不明瞭である。こうした住居は、居住用の他に、掘立柱建物の付属建物とも考えられるものである。

それぞれの前後関係は、A群の住居址が35m²前後と平均して一番大きく、周辺の出土遺物などから判断してB群に先行するものと考えられる。B群とC群は切り合い関係からB群の古いことが認められるが、SB16とSB18の場合、須恵器の形式に差は認められず短期間の間に建替がおこなわれたものと考えられる。A→B→C群と住居址の規模の縮少とともに時期が新しくなるようである。

竪穴住居址と掘立柱建物址のいくつかは切り合い関係があり、前後関係を示している。SB28掘立柱建物址とSB32・33竪穴住居址、SB3・4掘立柱建物址とSB2竪穴住居址の関係は建物址の方が新しい。SB36・37竪穴住居址とSB31掘立柱建物址

との関係は、逆に竪穴住居址の方が新しい。この他、S B 17・18・20 竪穴住居址と S B 23 掘立柱建物址は、接して棟方向も一致し、竪穴住居址の北壁に掘立柱建物の南妻側柱を揃える建物配置と周辺遺物などから両者は併存していたとも考えられる。

掘立柱建物址は 14 棟検出し、竪穴住居址とは逆に西側に集中し、更に西部にも相当数の建物群が存在すると考えられる。建物規模は一般集落での基本形をなす 3 間×2 間建物は少なく、5 間×3 間、5 間×2 間と言った大きな建物が目立っている。なかでも S B 43 の建物は 55m²で最大面積を誇り、この集落の中心的建物となっている。こうした居住用建物が中心をなしているのに対し、平面が方形にちかい倉庫建物が少ないことも、この発掘区の特徴で、今までの調査結果などから、北西区の未調査部分に存在する可能性も考えられる。建物構成は、棟方向により細かく分類できるが、なかでも棟を東西よりやや西南に振るもの（Ⅰ群）、南北よりやや北東に振ったもの（Ⅱ群）、棟を磁北にとる（Ⅲ群）の三つの建物群が中心をなし、それぞれ、2～3 棟を基本として集落の構成単位となしている。Ⅱ群建物は、建物規模、柱掘り方も大きく、発掘区の中央部に多い。Ⅲ群の磁北を指す建物は、柱掘り方が大きく深いのが特徴で、末野 B・C 遺跡から多数検出され、一つの時期を示唆する建物と考えられる。建物の時期を決める手掛かりとなる柱穴からの出土遺物は、古墳時代後期の杯 A 類が圧倒的に多く、B・C 類はわずかである。これまでの郡山遺跡群の調査結果などから判断して、建物の時期に杯 A 類も含まれると考えられる。こうした建物群も、奈良時代後期を境に衰退

を迎え、平安・鎌倉時代までは存続しないようであるが、これらの建物遺構はこの調査区域から検出されていない。

出土遺物には、多量の須恵器があり、S K 14・21・22 の出土量は際立っている。それに対し各遺構とも土師器の出土量は、甕などの破片が数点と限られて少なく、こうした特徴は郡山遺跡群内の各遺跡でも指摘できることである。出土遺物のなかで、特に S K 22 からはその注口の栓（須恵質）が出土したことは珍しい。この他、同じ土壌内より 5 個の鉄滓が出土したことは、この集落のどこかで鍛冶がおこなわれていたことを裏づけるものである。鍛冶に関連したブイゴの羽口は、末野 A 遺跡から 2 個検出されている。

西川遺跡は、縄文時代に開発され、途中大きな歴史的空白を置いて、奄芸郡衙の成立する 7・8 世紀に至って再び盛時を迎える。特に奄芸郡衙推定地から 1 K m 以内に位置し、郡山遺跡群の集落と同様に早くから律令体制の村落の中に組み入れられたものと考えられ、最終報告のなかで、住居址、出土遺物などをとおして、本集落の性格、位置づけについて再検討をしてみたい。

註（1）谷本鋭次・山沢義貴「東庄内 A・B 遺跡」『東名阪道路埋蔵文化財調査報告』

三重県教育委員会 1970。

（2）『鈴鹿市史』第 1 巻 原始古代

（3）県営圃場整備に伴い昭和 57 年、三重県教育委員会文化課が発掘調査を実施。縄文時代の土壌が検出されている。

（4）倉田直純「地蔵僧遺跡発掘調査報告」

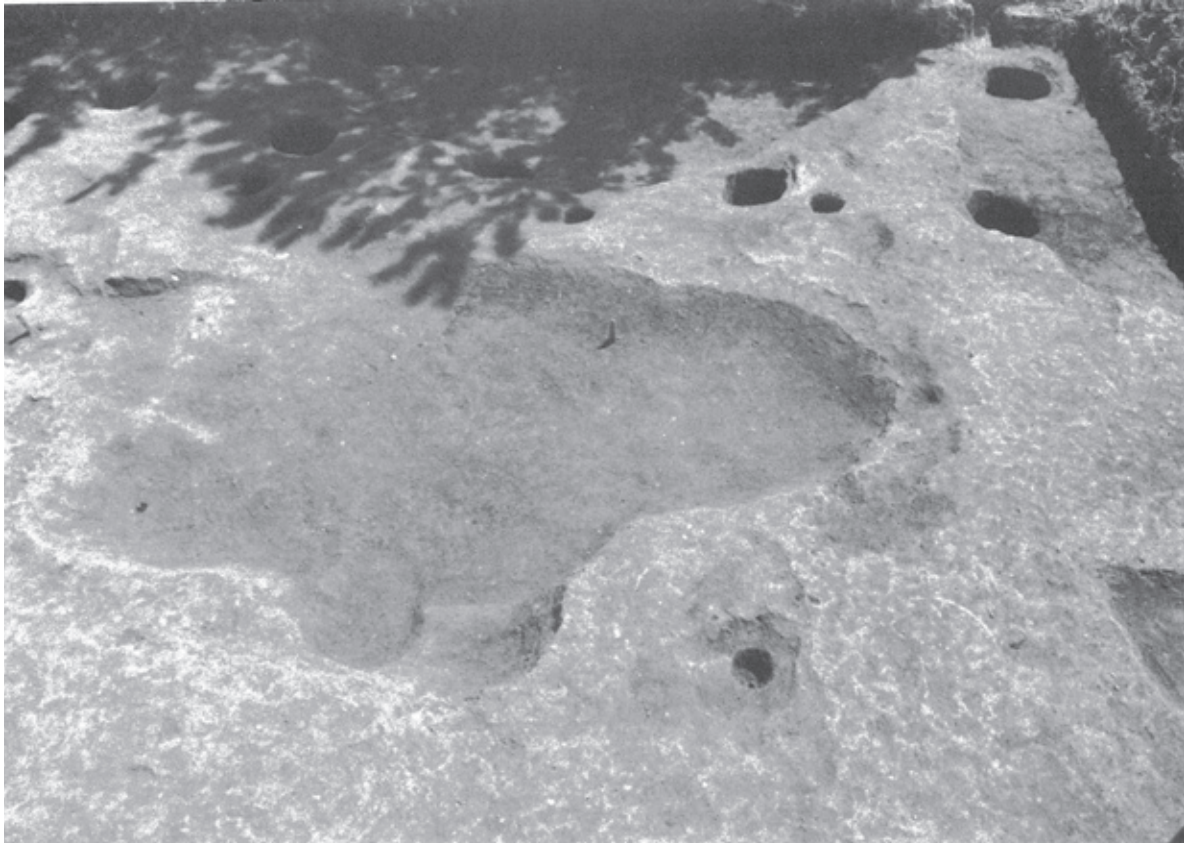
亀山市教育委員会 1978。

図

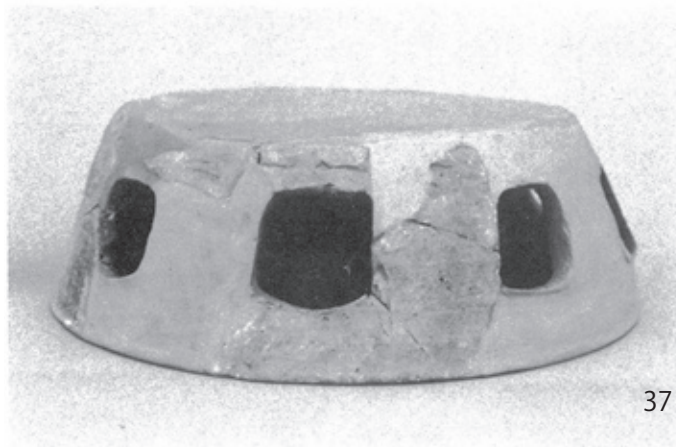
版







(1) SK-1、SB-1 (北より)



37



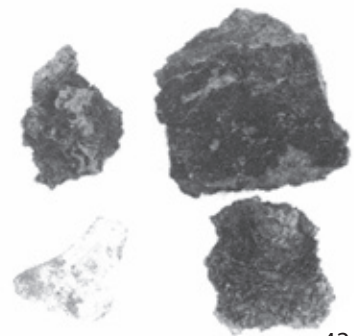
38



33

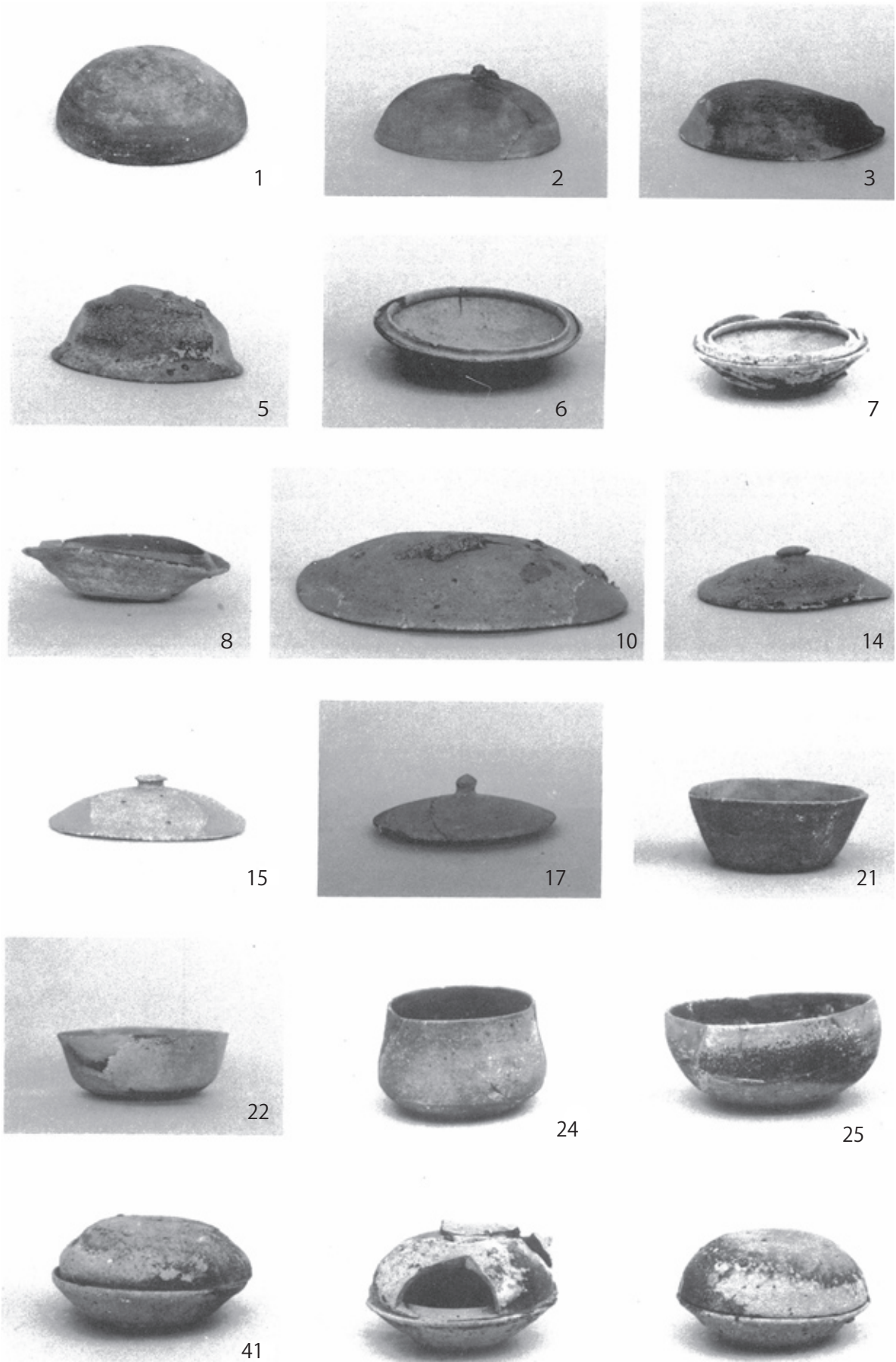


34



43

須恵器 (1/3), 砥石, 窯壁 (1/5)





(1) 西高山 1 号墳 遠 景 (北より)



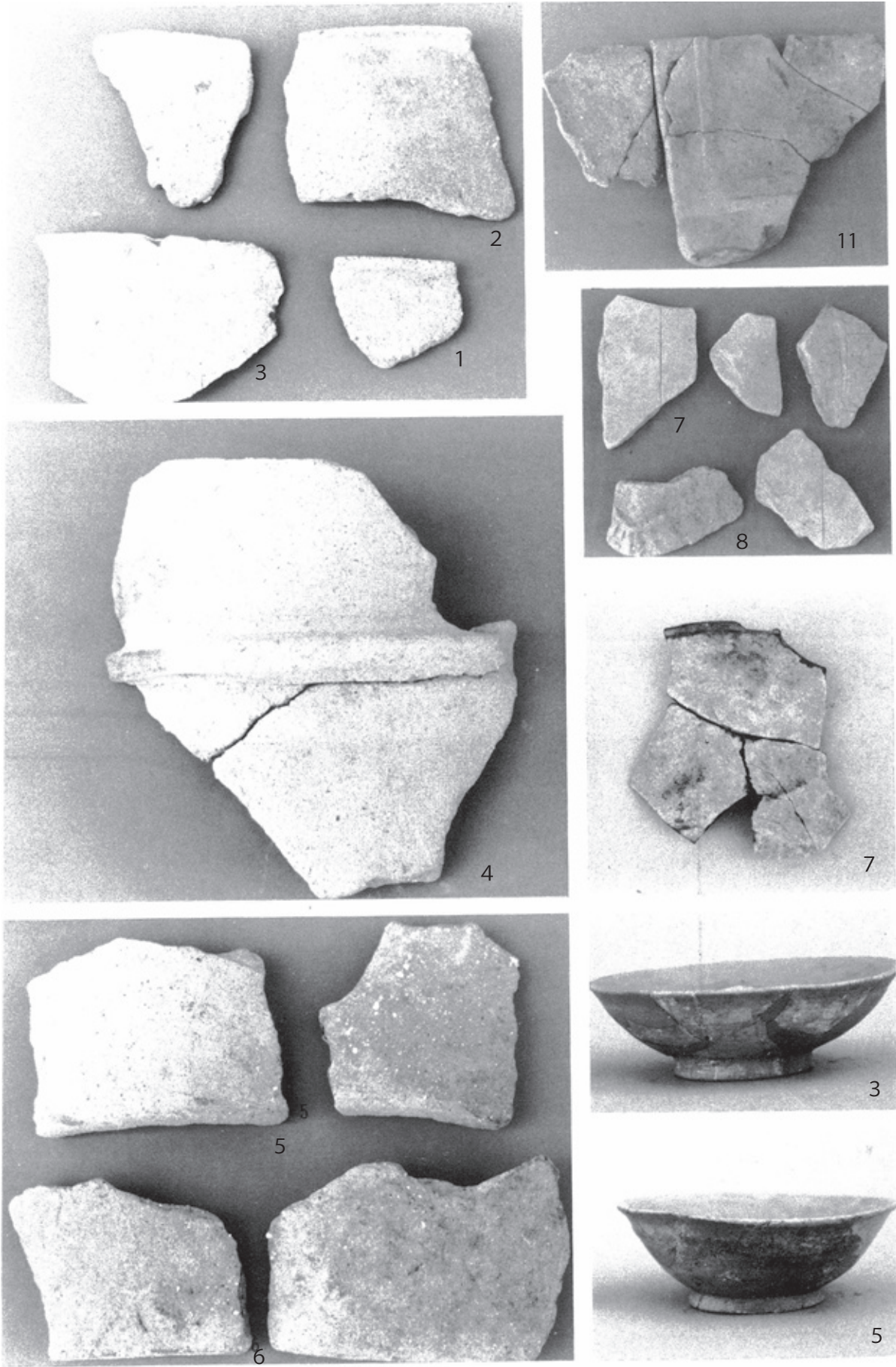
(2) 西高山 1 号墳 発掘前 (南より)



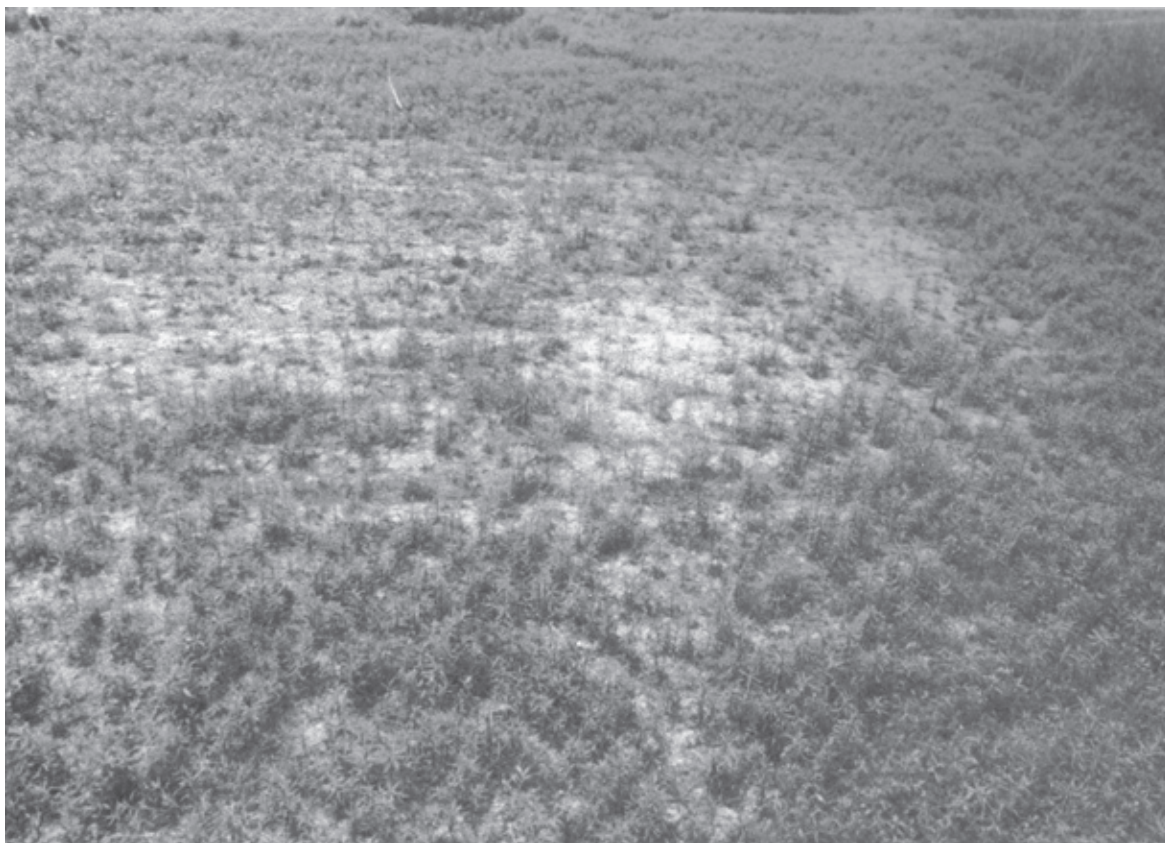
(1) 西高山 1 号墳 発掘調査後（東より）



(2) 西高山 1 号墳 既掘坑（北より）



(2) 西高山 1 号墳 発掘前 (南より)



(1) 西高山 2 号墳 発掘前 (北より)



(2) 西高山 2 号墳 発掘調査後 (西より)



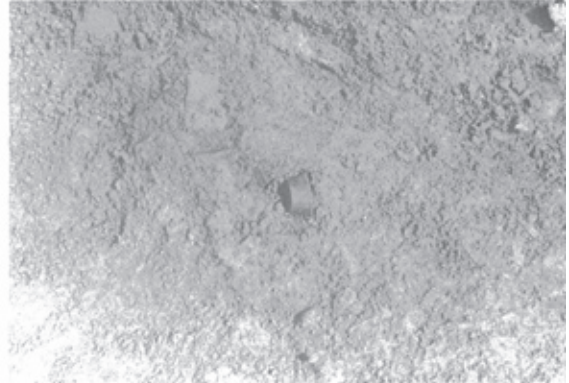
(1) 円筒埴輪出土状況 (南東より)



(5) 円筒埴輪出土状況 (北東より)



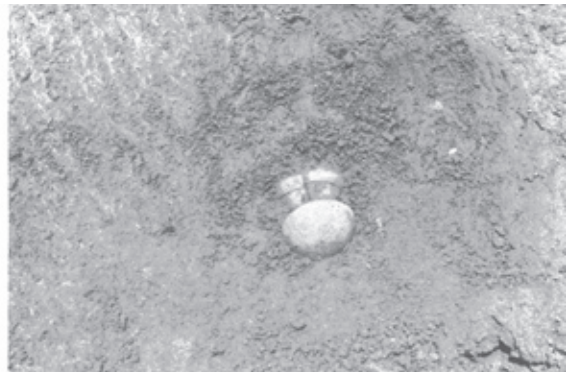
(2) 人物埴輪出土状況



(6) 紡錘車出土状況



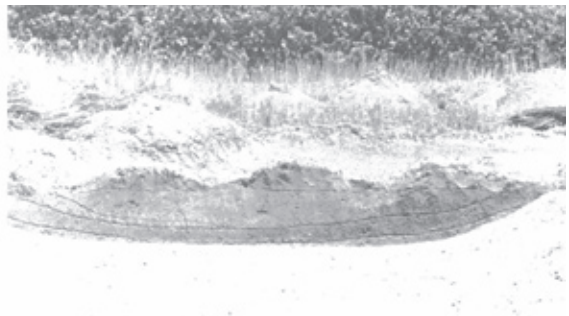
(3) 須恵器杯出土状況



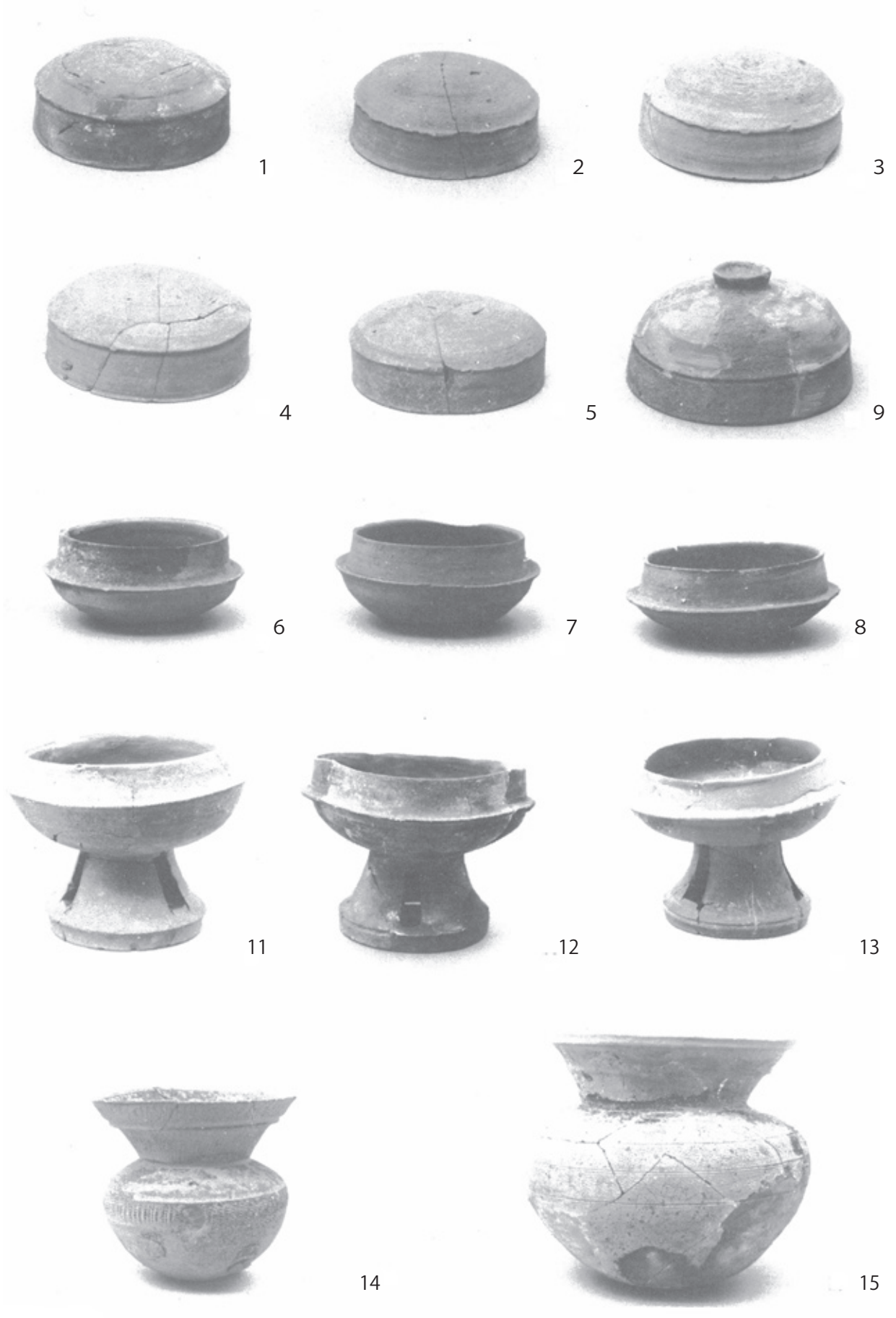
(7) はそう出土状況

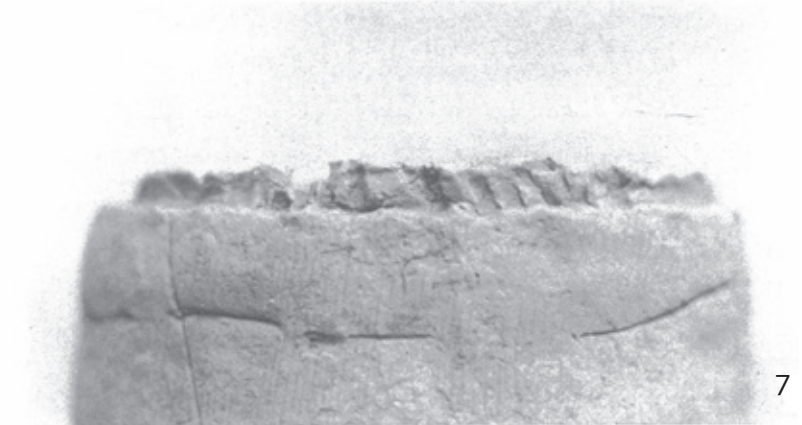
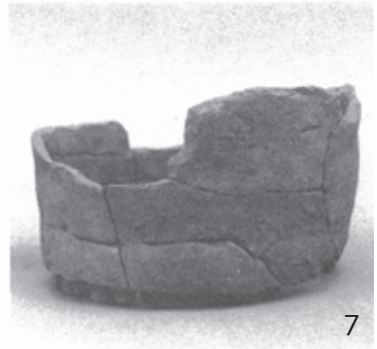
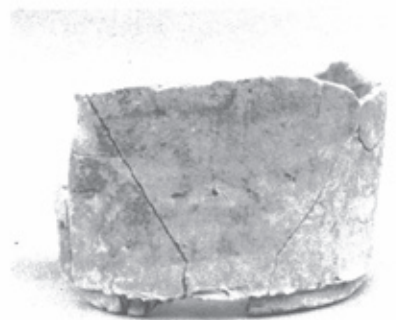
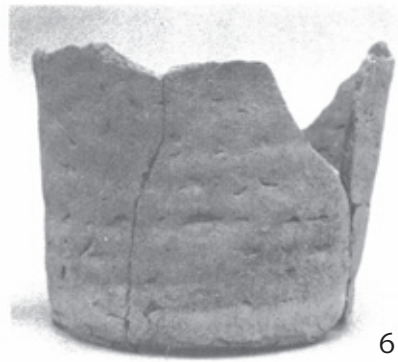
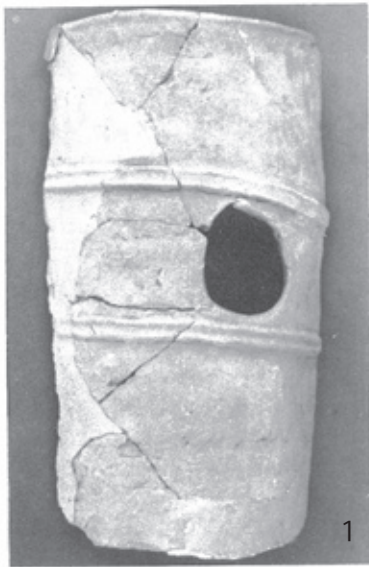


(4) 後円部周溝断面 (南より)

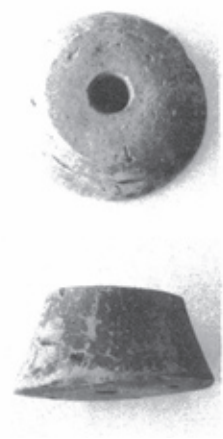
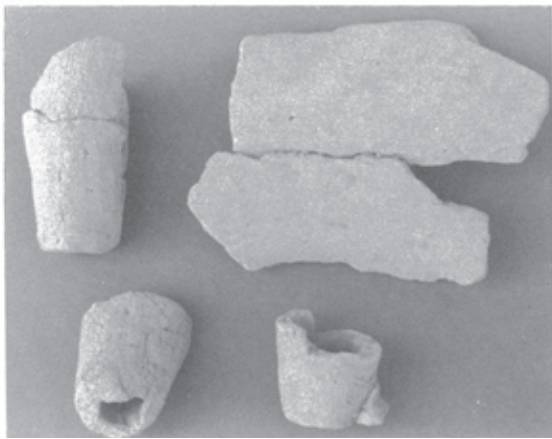
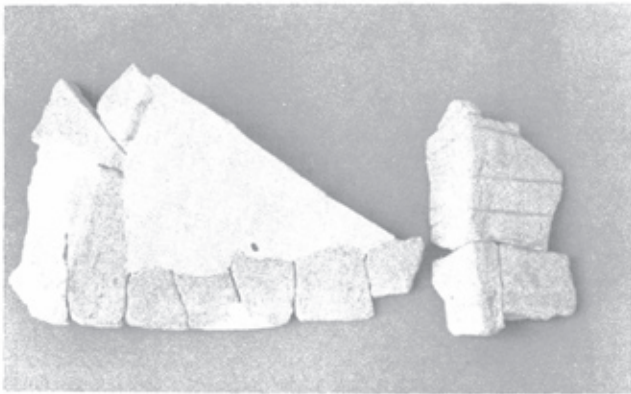


(8) 前方部周溝断面 (北より)





円筒埴輪、朝顔形埴輪 (1/5)



形象埴輪 (1/5)、紡錘車 (1/2)



(1) 発掘前 (南より)



(2) 発掘調査後 (北より)





(1) 発掘区 全 景 (東より)



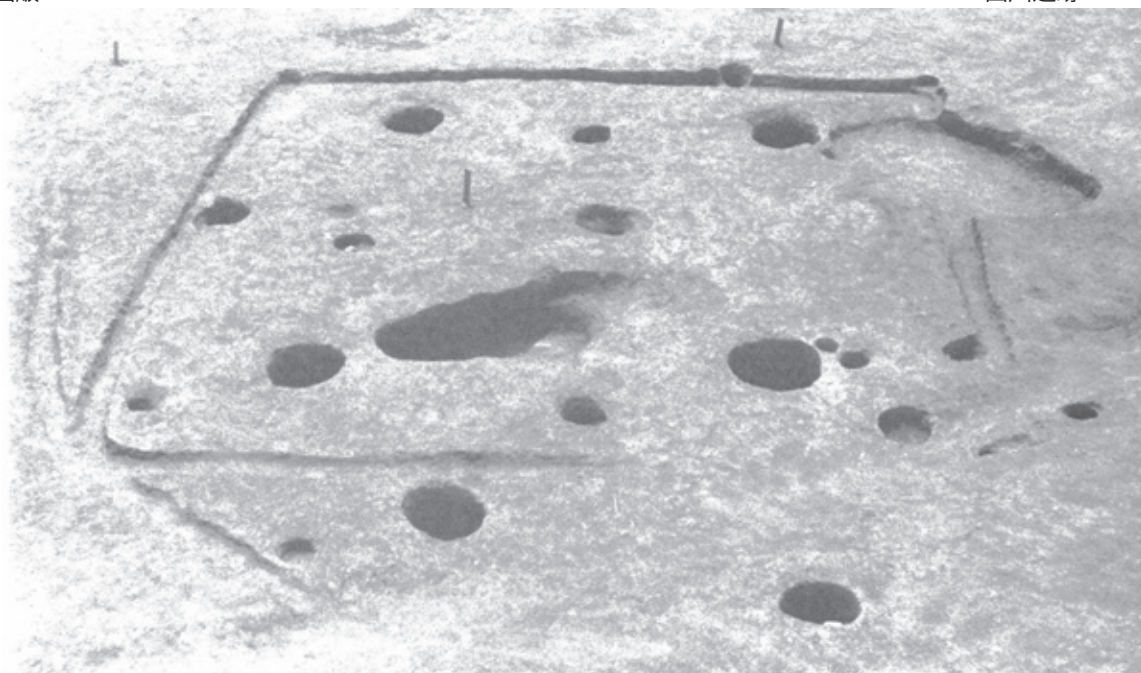
(2) 発掘区 全 景 (西より)



S B 27・28・32・33 (北東より)



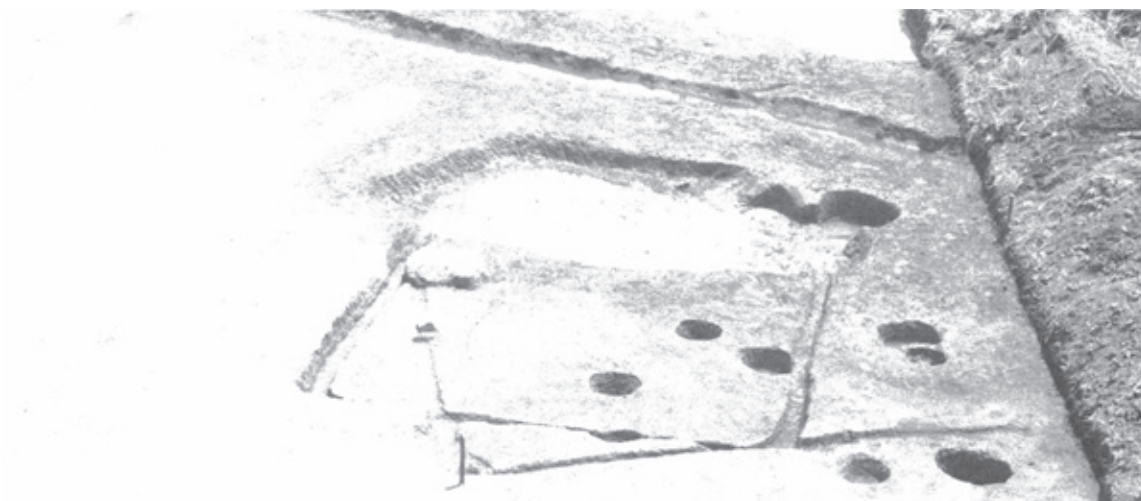
S B 1・2・13 (東より)



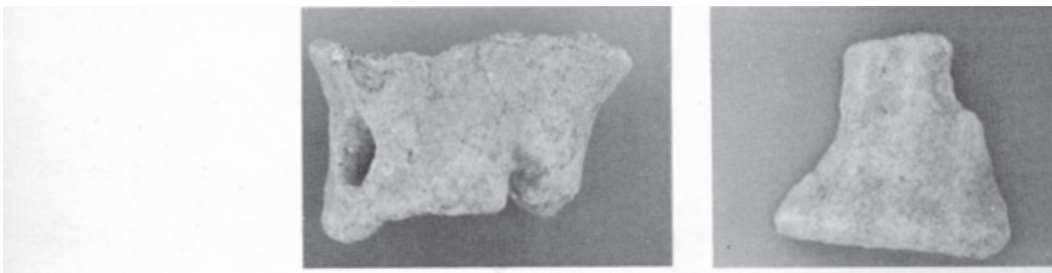
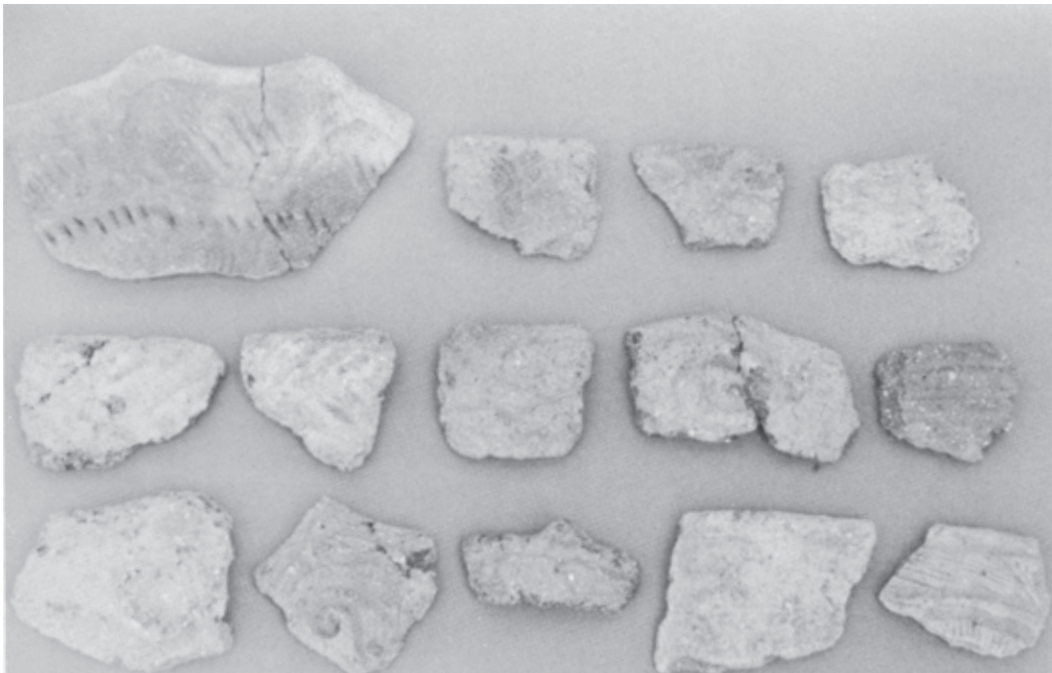
S B 13 (北より)



S B 16・17・18・19・20 (南より)



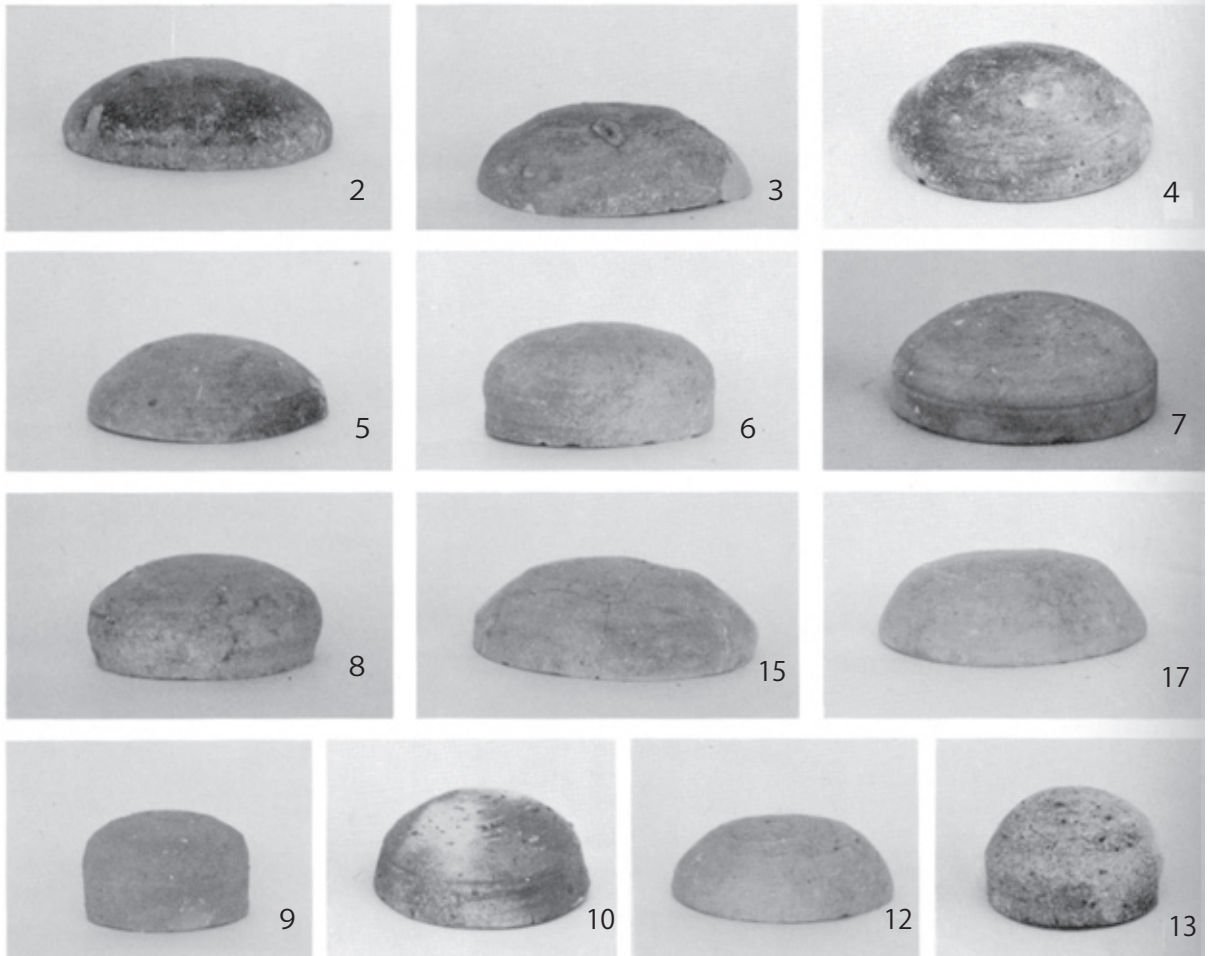
S B 9・10 S K 8 (西より)



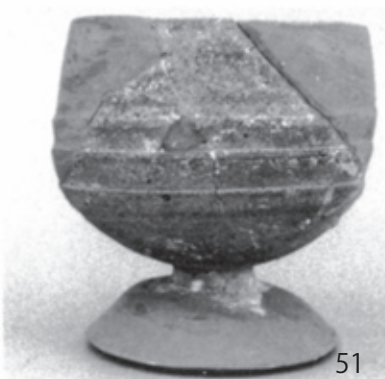
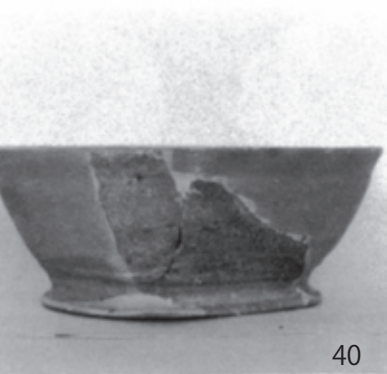
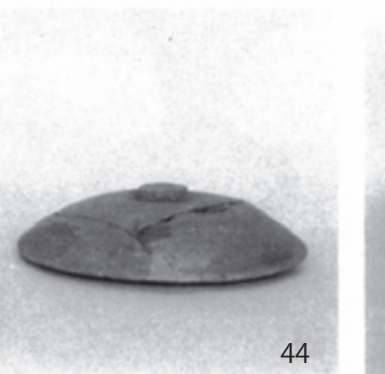
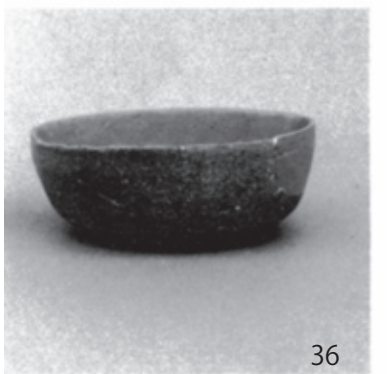
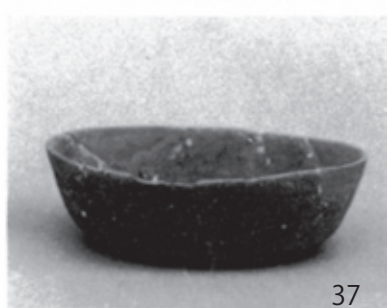
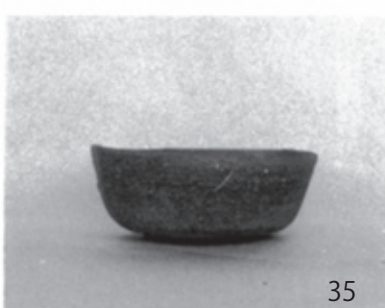
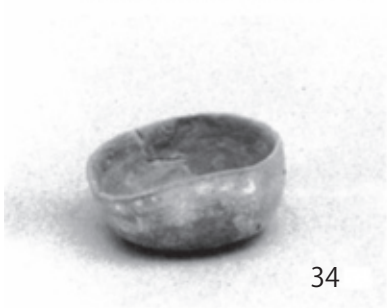
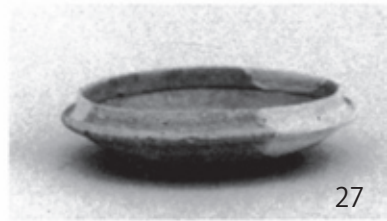
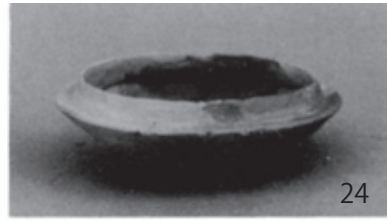
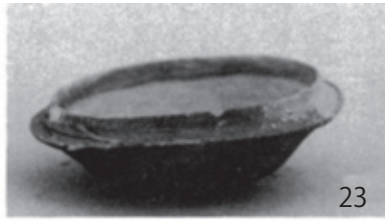
縄文式土器 (1/3)



縄文式土器 石器 (1/3)



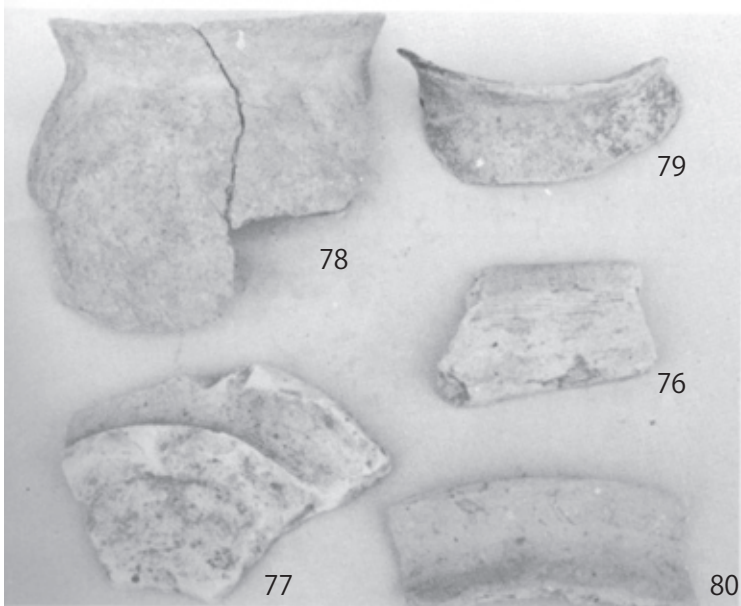
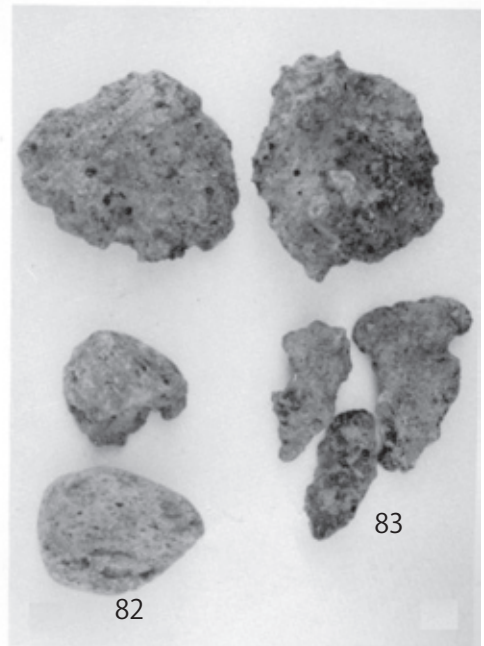
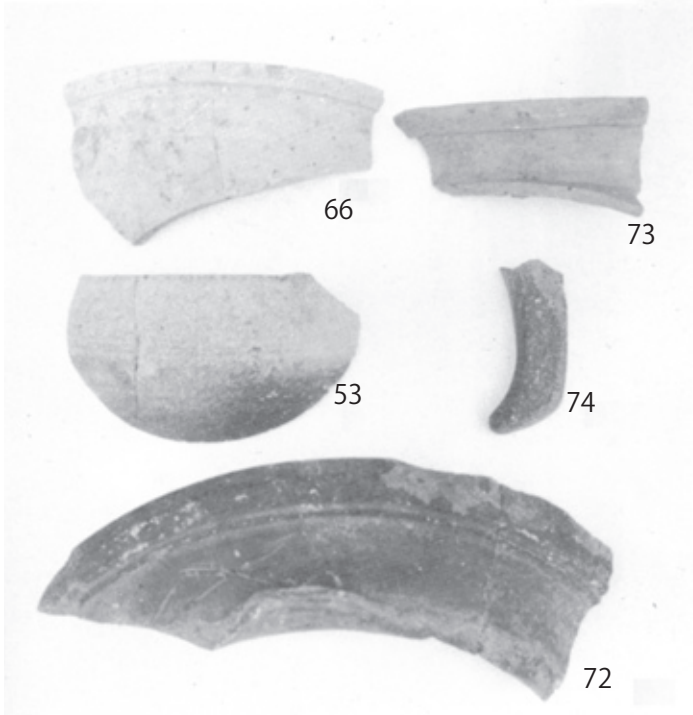
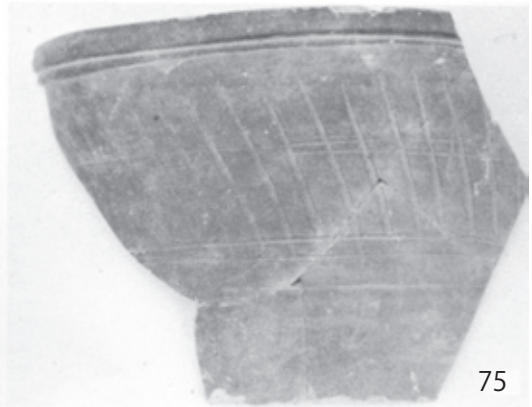
須恵器 (1/3)



須恵器 (1/3)



須恵器 (1/3)



須恵器、土師器、鉄滓、軽石、砥石 (1/3)

鈴鹿市文化財調査報告書Ⅶ
鈴鹿市郡山町 郡山遺跡群発掘調査報告Ⅰ
西高山D遺跡・西高山古墳群・西川遺跡

昭和58年11月

編集 鈴鹿市教育委員会
発行 鈴鹿市遺跡調査会
印刷 オリエンタル印刷(株)

三重県安芸郡河芸町上野2100
電話 (05924) - 2 - 3111